0054745000

0054745-000

３８８．１－Ｙ５３－１２ウ

昔話覚書

柳田国男・著

三省堂

昭和１８

AID

22 1 28

389.1
Y53
2

昔話覺書

柳田國男

三省堂

953
160

自序

全國昔話記錄の、次々に世に出るやうになつた歡びを記念すべく、あれこれ書き散らしてあつた小文を取りまとめて、又一冊の本をこしらへて置くことにした。前集は主として國內の發達、いはゆる說話文學との交涉を說かうとしたものが多いに反して、この方は比隣の諸民族がもつて居るものと、どういふ關係に在るのかを考へるのに力を入れて居るが、是は私のやうな時間の不足な者には、容易に進めさうにもない遠い險しい路である。前から集めて居る僅かな書物も中々讀み盡されず、外國には又是に何十倍もの古來の文獻があつて、名を聞くばかりで當分は手に入りさうにも無いからである。その上に西洋の學者の今までの研究は、多くは印度以西の古い交通路上の資料で、近頃やつと少しづゝ、世界の他の隅々の調査が始まつたのだが、それも偶然の機緣といふほどのもので、たとへば大東亞圈內の諸民族な

どでは、たゞ昔話が必ず有るといふことを知るだけて、採集はまだ少なくともあまり公表せられて居ない。或は斯ういふ小さな片端の研究でも、之を讀んで始めて興味を覺えたといふ日本人が、出かけて段々に聽いて來るといふ、端緒にならうかも知れぬのである。問題は大きく、人の一生はあまりにも短かい。すつかり集めて置いてから、さて愈ゝ研究に取りかゝるといふ樣な順序には行かぬのである。

昔話といふものは十人が八人まで、幼ない頃に聽いて覺えて居る。どんなまじめな人でも折々はきつと內々は憶ひ出して居る。たゞそれがあまりにたわいも無いことだと思ひ、又自分等だけのものだらうと獨斷して、互ひに話し合つて見ることが無いばかりに、古い人類の寶が埋もれたまゝで、或はもう消えて行かうとして居るのである。といふことだけなりとも、ちつとでも早く、心づいて居る方がよいのである。この本の中にも僅かな實例を擧げて置いたやうに、我々の昔話には全國の子供が、曾ては皆同じものを聽いて居た時代があつた如く、附近の諸民族の中にも、到底偶合だとは言へない位に、よく似通うた話を聽く場合が多い。それがある以上は先祖は一つだらうとか、又はこちらから往つて敎へたのだらうとか、きめてしまふやうな人も元はあつたが、迂闊にさういふことの言へないわけは、この類似の及ぶところは法外に廣く、北はシベリアの雪氷の荒野から、南は綠輝く珊瑚の島々にまで、搜せば時々は同じ話が行き渡つて居ることがわかる。今から百何十年も前にグリム兄弟が、獨逸の片田舍で聽き集めたものゝ中にも、日本で我々の祖先たちが、樂しみ語つて居たのと先づ一つといつてよい話が、五十は安々と拾ひ上げられると謂つて居る人もある。今日はまだはつきりと說明し得ないにしても、是は何かよく〳〵の、全く我々の知らない原因があるのだと、いふことと迄は考へて見なければならぬ。歷史を超越した遠い〳〵大昔に、同じ一つの焚火にあたつて居た者が、別れて年久しく孫から曾孫へ、大よそまちがひ無く、しかも文化に相應する修飾を加へつゝ、語り傳へて居たのだとしても大へんな奇蹟である。或は又人が隣から隣へ順送りに、どこまでも持運んでしかも大切に守り續けて居るのだとしても、さういふ大規模な入組んだ交通は、まだ文化史の上では何人も說明して居ない。第一に言語の極端なちがひ、今でも飜譯には無理ばかり多く、いゝ加減なところで辛抱して居る者が幾らもあるのに、例へば糠福米福や姥皮の話のやうに、そつくり其儘をどこの國でも、それ〴〵

に自分の言葉の藝術としてもてはやして居る。單なる國語の機能としても、現在の常理を以て期待し得ないことを、いづの間にか昔の人は爲し遂げて居るのである。果してどういふ手順を重ね、又はどれ程の年月をかけたら、斯ういふ不思議が實現し得るものか。我々にはまだ之を明かにする方法は立つて居ない。是をたゞ二つの民族の接觸と交通さへあれば、自然に斯うならずには居らぬものゝやうに、勝手にきめ込んで居る氣樂さといふものは、是を各箇の民族に獨立發生したものが、偶然に互ひによく似て居るだけだと、思つてすまして居る無責任にも劣らない。西洋の學者には流石にそんなのは少なく、良心の強い人は皆迷つて居るやうだが、しかも一方には地位や職業から、何とか意見を述べずには居られない者が、若干あることだけは我邦と同じであつた。數多い事實を累積し整理し、且つ之を安全なものにする技能にかけては、確かに向ふの人は一日の長があるのだが、さて愈ゝ是から一つの結論を導かうとすると、やつぱりこぢつけも有り又思ひちがひも多い。マックス・ミュルラーの言語頽廢說以來、たつた百年足らずの間に前說の覆沒し去ること、昔話研究の方面のやうに、頻繁であつたものは他には無いかと思ふ。それといふのが世の進みと共に、段々と新らしい資料が加はつて來て、それに頰冠りをすることが出來ないからである。以前の限られた知識でならば、昔話の水源は印度であり、それから東西に流れ下つたなどゝいふ類の說もなほ成立つたらうが、さういふ水筋とは緣も無さゝうな、遠い島邊にも同じ實例のあることがわかり、おまけに大東亞圈の洪大な地域のやうに、搜せば何が有るか知れないといふところが、手を付けずに殘されて居るのである。日本に於ても、近年我々の手で集めた昔話の如き、獨逸で一部分の飜譯が出來たゞけで、まだ少しも向ふの人たちには利用せられてゐ居らず、しかも是を印度の方から、支那を經て入つて來たらうといふことは、たゞ何も知らぬ者がさう推測するだけで、そんな形跡はまだ我々には見出し得ないのである。

國の學問の自主といふことを考へて見るには、或は意外の感を抱く人があるかも知れぬが、昔話研究などが殊に手頃なる目標であつた。日本で學者と言はれる人の中には、向ふの本だけしか見て居ないのが元はあつた。昔話の本質を論じようとする場合にも、あまり色々のよい材料を貰ふので義理があるとでも思つたものか、彼等の不確かな結論までも合せて頂戴したのである。まさか破られてしまつた古い學說の受賣まではしないが、最近最新のもの

だといふことがわかると、公然と之を信奉し且つ援用して居る。實に腑甲斐ないことだつたと我々は思つて居る。文化人類學の他の多くの問題に就ても、さういふ嫌ひはよほどある樣だが、つまりは我々の事實、彼等白人のまだ參酌することが出來ず、しかも我々にはよく呑込み得る資料を、是からどし〳〵と集め且つ整理して行くより他に、斯ういふ情け無い屈服を排除する途は無いのである。全國昔話記錄の個々の事業なども、今まで無いも同然であつた國民生活の一面を、知り且つ檢査し得る狀況に置いたといふだけで、もう一つの功勞だつたとは言へるであらうが、それよりも更に大切なことは無意識の間に、この人類の過去にとつて最も興味の深い事績を、國の學者の創意によつて、判別し又解說するといふ事業の最初の推進となつて居るのである。勿論昔話の國內に於ける發達を、細かに見て行くといふこともよい學問であらうが、是と併行して日本と四圍の諸民族との心の繫がり、もしくは精神生活の歸趨ともいふべきものが、下に隱れてどれだけの一致を具へて居たかといふことを、見つけ出さうとする努力も輕んじてはならぬ。又さういふ幻しを胸に描いて進んで行くといふことが、この艱難時代の一つの慰安でもあらうと思ふ。斯んな小さな本を出して置いて、大きなことばかりいふのはをかしいかも知らぬが、是でも一つの機緣であらうぐらゐには、私は樂觀して居るのである。

昭和十七年十一月二十四日

柳田國男

目次

自序……一
昔話採集者の爲に……一
昔話の發端と結び……四七
猿と蟹……八一
綾かち〳〵山……一三五
天の南瓜……一五五
俵藥師……一五五

峠の魚……一六三
鯖大師……一七三
片足脚絆……一八一
食はぬ狼……二〇七
味噌買橋……二一三
『壹岐島昔話集』……二二三
『島原半島民話集』……二三一
『二戸の昔話』を讀む……二四三
昔話解說……二五一

昔話採集者の爲に

一　昔話の意味

是まで自分等が民間說話と謂ひ、又はそれを略して民譚と謂つて居たものと、爰でいふ昔話とは全然同じものである。一方にもし範圍のやゝ不明な點がありとすれば、此方でもやはりそれは問題になつて居る。昔話と謂ふのは差支へ無いが、民間說話の中には入れられないといふ樣な話は無いと共に、昔話で無い民譚といふものも、一つも無いといふことを私は信じて居る。そんならば何故に今頃「昔話」などといふ古臭い語を、持ち出して使ふかといふ疑問が起るかも知らぬが、それには堂々たる幾つかの根據がある。主たる理由は斯う言はぬと採集が一層六つかしいから、私は是非とも此語を將來の精確なる日本の用語とし、他の一方

のものを必要な場合の代用語にして置きたいと願つて居る。

民間說話は佛蘭西語のコント・ポピュレェル、もしくは英語のフォク・テェルズの直譯であつて、果して「民間」が原語の趣旨を盡して居るかどうかも心もと無いが、是でも外國人と學者とだけには通用するのであらう。しかし少なくとも實際の當事者、即ち昔話を記憶し又は聽きたがる人々には、是は思ひも付かぬ新語なのであつた。通例最も多くの昔話を知つて居るのは村に生れた老女たちであるが、もし假に彼等に向つて民間說話を聽かせておくれなどと云ふ者があつたら、彼等は恐らく目を瞠らずには居ないであらう。即ち此言葉は警察兵營の語と同樣に、まだ通譯を要する程度の日本語であつたのである。英佛の二つの名稱も、近頃急に用ゐられるやうになつたことは同じだが、是は今まで知られて居る二つの語を繋いだだけであつて、字を書いて見せなければ想像も出來ぬやうな漢語とわけが違ふ。しかもそれすらもなほ採集者は、出來るだけ使はぬ樣にして居るのである。野外と書齋とでは別な語を用ゐようとして居るのである。ところが我々の國だけでは、ちやうど兩方に通じて少しも差支への無い「昔話」といふ語があるのである。それを持合せなかつた國の眞似をする必要などは更に無い。

昔話は以前或は昔語り、もしくは昔物語と謂つた時代があつたかも知れぬが、それを昔話と謂ひ始めてからも、もう隨分久しいことである。人によつては昔の話をするのだから昔話だと思ひ、又さういふ意味に此語を使ふ者も段々多くなつたやうだが、是はさう解しても抵觸しなかつたといふのみで、この單語の起源は今少しく具體的のものであつたと思ふ。一つの證據は土地によつて、今でも是をムカシムカシと小兒などが呼んで居ることである。東北ではコを附けてムカシコといふのも古くからのことであつた。即ち冒頭に必ずムカシといふ一語を用ゐて說き出す話を、人が其特徵に據つてムカシ話、或は昔昔と名づけたのであつて、必ずしも其內容の古代であることを要しなかつたのである。伊勢物語の「昔男ありけり」以來、ほゞ現代まで此樣式はずつと續いて居る。コントといふ語は其本國に於ても、用法が漸次延長して來たが、所謂民間說話に對立する文藝說話即ちコント・リテレェルには、避けて此形は使はぬやうにして居るのみか、同じ凡人大衆の間に流傳する說話でも、「昔話」で無いものは出來るだけ、是と異なる表現法を採らうとして居る。單に最近の見聞を傳へんとす

る世間話は固より、同じく過去の出來事を語らうとする場合でも、それが歴史でありはた傳說であつて、我も然りと信じ又聽く者にも信を置かしめようとするものは、最初から話し樣が別であつた。即ち昔話と古い話とは、決して一つの物では無いのであつた。尤もこの傳說や世間話と昔話との間には、實質上の混亂は若干ある。たとへば世間話の形を以て、誠しやかに語られるものが、實は昔話として久しく行はれて居るものであつたり、もしくは餘りに珍らしい實話が、いつと無く昔話になつて行つたりすることもあらうが、話者は少なくとも其分堺を明かにして居た。さうして我々の考へて見ようとする民間說話なるものも、すべてこの境の線の此方の側に屬して居ることは、「昔話」と更に異なる所が無いのである。

二　昔話の範圍

昔話の外形は一方の製作說話の影響を受けて、追々に自由になり不精確にならうとして居るが、まだ〳〵日本などでは其特徴の認められるものが多い。人は僅かに最初の一句だけを聽いて、容易にその昔話であるか否かを判別することが出來る。聽衆が普通幼少な者ばかりで、其更迭が頻繁であり、且つ單調を氣にかけなかつた爲でもあらう。しかし永い間には、是でも幾分か新意を出す必要はあつたと見えて、少しづゝは地方によつて違つて來て居る。東京の子供のよく知つて居るのは、

昔々あるところに、爺と婆とがありました

といふ形であるが、それをわざと長たらしく

昔の昔のその昔、ずつと昔の大昔に……

と謂つて待遠に思はせて見たり、又は省略して

まづ或處に……

と言つて見たりした。全國各地の例といふのも、大體にこの二つの形の中間を動いて居る。試みに私の知つて居る二三の例をいふと、肥前島原半島のは、高陽民話（旅と傳說三ノ五）にもある如く、

昔ちやつたげなもん……

發端の一句

同じく伊王島の例は本山君の『民俗研究』に、

昔ぢやつたちふ……

出雲の例は『鄉土研究』に

とんとむかし……

伯耆米子のは『民俗』に

とんと昔あつたげな。あるよその國に……

といふとあるが、勿論是が唯一種しか無かつたといふわけではあるまい。「とんと昔」は江戸でも曾て使つた省略法であつたと見えて、何かの落し話に化物が芝居をしたといふことがあつて、さげは其一人が「とんとんかかか」と言つたとある。卽ち拍子木の音と昔話の初の文句とを引掛けたのである。富山縣の實例は高崎正秀君の報告(民族三ノ一)に

昔あるとこに、餅のすきな姑はんがあつたと

と出て居るが、大田榮太郎君の「灰まき爺」などの初の語りは

とんと一つあつたと

といふので、採集地は同じ上新川郡である。越後でも色々の形はあらうが、私の聞いてゐるのは西蒲原などに、

あつたてんがのに……

といふ例がある、信州は松本附近で、

昔あつたさうな。爺と婆とあつたさうな

甲州の九一色では、土橋里木君の報告に依れば、普通の「昔ある處に……」の他に、「まアある所に」、もしくは

まア昔ある村に、爺と婆とがあつたさうだ

といふ例も多いといふ。是とよく似て居るのは、仙臺地方の

さつと昔、ある處に……

此もあまり「昔々」を謂ひ古した後の革新と認められる。以前私が問題にした鹽竈神社の「さつとな」なども、つまりは人の惡口を昔話の形にして言つたものであつた。山形縣の例は、

昔あつたけど。ちんぢとばんばとあつたけど

といふのが見えて居るが、最上郡の方には又

昔はあつたけとよ

と謂つてはじめる土地もあつた(豐里村誌)。岩手縣は田中喜多美君の採集に「昔はありましたとさ」と謂ひ、青森縣では川合勇太郎君の集錄に「むがしがあつた」とあるなどは、何と無く次の語りと打合はぬ樣な感じもするが、それに近い形のものは既に他にもあつたのでゝもとも形式である故に必ずしも其内容を問題にしなかつたのである。川合君の『津輕むがしこ集』の跋文には、特に此發端の一句の變化を擧げて居る。之に依ると、同じ津輕だけにも次のやうな色々の形があつた。

むがしにせェ。爺樣と婆樣どあつたど
むがしこァあつたど
むがしァあつたぢん
むがしァあつたど

是は時代の推移といはんよりも、寧ろ村又は家々の風、人々の流儀ともいふべきものであつたらう。現に内田邦彥氏が津輕口碑集に寫生せられた一例の話法には、別に又

昔にあつたどす。おやづとかゞとあつたどす

といふのもあつた。全國を詳しく調べたら、細かな變化と同時に又、顯著なる共通點をも見出すことが出來ること〻思ふ。播州の鄕里で五十年前に、自分などが聽いたのはやはり

昔昔あつたといな

であつたやうに思ふ。今の内ならばまだ各人が、その記憶する所を比較して見ることも容易な筈である。之を要するに「昔話」といふものは、至つて古くからの習はしに從うて、必ず冒頭に昔々といふ一句を、副へて語つて居るハナシであつた。其種のハナシだけが具へて居る特徵は幾つかある。是と然らざる普通の話との差別には歷然たるものがあつた。その一方を尋ねて居る人が、境を踏み越えてこの特徵を具へぬものまで、一緒に考へて見ようとしたことは混迷のもとであつた。故に私は先づ昔話の範圍といふものを明かにしたいのである。

三　話法の特徴

「昔話」の特質は、決して最初の一句に昔といふ言葉があるのみでは無かつた。既に前の列擧の中からでも認められるやうに、其語りの殊に重々しい部分は、悉く直接の實驗では無く、單に「私はさう聽いて居る」といふ意味の語が副へてある。それが「あつたちふ」であらうと「あつたさうな」であらうと、一つとして他の人がさう謂つたのだといふことを、明かにして居らぬものは無い。是は恐らく古傳を尊敬して、大切に之を引繼がうとした時代からの仕來りでもあらうが、之を支へる信仰が薄れ、一方に人が珍奇諧謔を愛するやうになれば、いつと無く次第に責任を避ける目的のやうに解せらるゝに至つたのも已むを得ない。又話す者もさういふ心持で、東京などでは「あつたとさ」を使つて居る。「とさ」といふ語の中には、「私もどうかと思ふけれども」といふやうな感じまで含んで居て、眞面目な傳達には我々は之を用ゐなかつた。九州の各地で「げな話」といふのも同じ趣旨で、「だらう話」よりも尙一段と確實ならず、寧ろ信じてはいけないといふ意味をすら持つて居た。六つかしくいふと、人が空想を自由に働かせ得る區域、うそを吐いても罪にならぬ土俵場として、夙くからこの形式の埒を結ひまはしたので、小說（フィクション）といふ文藝の萠芽を發するには誠に似つかはしい新開地でもあつたのである。人は餘りに注意して居ないが、遠くは今昔物語の「……とな ん語り傳へたるとや」も此形式であつた。勿論全部が作りごとで無くともよい。單に面白いから語るので、其實質の眞僞、乃至は一部の修飾誇張の有無は、話者の與り知る所で無いといふことは、もうあの頃から諒解せられて居たのであつた。

傳說と昔話との差別は此點から之を立てることが出來る。傳說も前代の事實を說くことは同じであるから、當然に昔又は大昔といふ語を使はねばならず、通例亦それを擘頭第一に唱へたであらうが、しかも如何なる場合に於ても、「あつたとさ」の形を以て之を人に說かうとする者は無かつた筈である。そんな事をすれば之を聽く者が、傳說として受取ることをしなかつたらう。尤も今日の傳說の中には、說く者が既に之を信ずる能はず、所謂斯んな話として笑ひながら語るものも多くはなつたが、さういふ退化の狀態に於てすらも、まだ之を全く

昔話として說くことを敢てしない。まして寺社の緣起や由緣書に書き上げられ、それを以て一地方の信心を繫いで居るもの、もしくは村の起り家の先祖の奇瑞として、紋にしたり苗字にしたりして居る言ひ傳へ、それから今日でいふと進んで歷史を改訂せんとまで意氣込んで居る口碑、たとへば　長慶天皇の御墓所とか、菅原道眞の子孫とか稱する熱心な主張に至つては、假に「ださうな」であらうとも「である」と言つて居る位で、少しでも昔話に近い形態を以て話すことは、ぶち毀しになるから絕對に之を避けて居るのである。然るに傳說を昔の話だから「昔話」に混入していゝと思ふ人は、寧ろ傳說の衰へ又は病み、今まで通りに働くことの出來なくなつたものだけを見て、それを傳說の本來の姿だと思つて居るのである。この見方は多くの今も活きて居る傳說に對して不當なるのみならず、更に一方の昔話の成立を考へて見る爲にも煩ひをなすものである。二者の區別は決してあやふやで無い。一方は說く人聽く人の最初から信じようとしなかつたもの、それ故に古い形をいつ迄も保存し得るものであつた。之に反して他の一方は、常に信じられ又信じようとして居たものであつた。新らしい知識の光に照らされると、ちきに信じ難くなるが故に、度々その外形を改めて行く必要のあるものであつた。傳はり信じられるものは話の骨子、特に重要なる內容だけであつて、人の名や年代さへも時々はさしかへようとして居る。話法や形式の無い方が當然であつて、事實は少しでも文藝めいた色彩を放つことを、努めて今までは避けて居たのであつた。是が幾分か昔話と近く、やゝ混同を受けるやうになつたのは、傳說としては零落の兆であつた。しかも多くの傳說は今とても思つたほど昔話化して居ない。昔話の弘く國內を週遊したに反して、此方は一地に定著し、たま〳〵同種のものを遠近に發見すれば、直ぐに剽竊呼はりをしようとさへして居る。さうして當代の地方文士によつて、一種新式のコントに書き改められるまでは、未だ曾て口頭傳承の文藝の間に、一個の座席を要求しようとはしなかつたのである。ところが昔話の方は流傳の力が强いので、時としては未だ其鑑賞に馴れない人たちの間に入つて、却つて傳說として受入れられ、もしくは傳說の種を供することになつたことは、曾て白米城について又鄰の寢太郎說話等について、自分が擧證した通りである。其結果は同種の物語の或土地には昔話として愛玩せられ、又他の土地では傳說として土著したものが多く、愈ゝ人をして二者混同に陷らしめることになつたやうに思はれる。しかし是とてももし

私の列記する形態の差異を明かにすれば、兩々相對して互ひに成長進化の跡を映發するに足るのであつた。一言で言ふならば一方は技術、他の一方は單なる記憶であり、一方は定まつた形のある文藝作品であり、他の一方はその素材となるべき事實といふに過ぎなかつた。元方に行つて見ればこの二つのもの程、はつきりした差別のあるものは無かつたのである。然るにそれを我々に語らうとする人が、今までは有りのまゝを傳へようとせず、之を中央の言葉に飜譯する場合に、この大切な「げな」や「とさ」を無視してしまつて、雙方を同じやうな語調によつて紹介したのがよく無かつた。其爲に今では傳說も昔話も、共に斯ういふ粗雜なる要領だけしか、知つて居らぬ者が地方にも多くならうとして居る。所謂學問の無い人がまだ少しでも殘つて居るうちに、もう一度改めて根本に就て、採集して見なければならぬ理由は爰に存するのである。

四　昔話の結語

グリム兄弟の集錄を見てもわかる如く、昔話の形式はまだ此他にも色々あるうちに、殊に顯著なるものはその末尾の一句であつた。傳說は勿論のこと、尋常平凡の世間話のやうなものでも、未だ曾て著けることを許され無い若干の言葉が、原則として民譚の後には附けられて居た。さうして初頭の「昔々」とは反對に、此方はやゝ自由な變化を遂げて居た爲に、何れの形が最も古いかを確めることが容易で無いが、それでも日本でならばまだ之を尋ねて行くだけの資料が集められさうである。現在の私の假定では、やはり昔話の多く傳はつて居る東北地方などのものが、うぶな形に近くは無からうかと思ふ。

津輕の實例は內田氏の口碑集に「とつちばれ」、川合氏の集には「とッちばれ」とかもしくは「そととつてとつちばれ」とあり、或は稀に

とッちばれの藤吉ア家のばゞア

とも謂つたとあるが、この「とッちばれ」の意味は、此土地だけで考へて見ても解るまいと思ふ。是と一番近いのは岩手縣であるが、盛岡に於ては「どッとはらひ」、紫波郡昔話を見ると「どんどんはらひ」、或は「これでどんどんはらひ」と謂つて居り、聽耳草紙の豆子噺（二二〇頁）

どつとはらひ

などには、

……惡りい婆のせんたく燒きだとさ。どんどはらひ。法螺の貝ごぼうぼう

と吹いたとさ

と謂つて居る例もある。思ふに津輕の「とッちばれ」も此「どんどはらひ」と一つで、「はらひ」は出拂ひなどの拂ひ、即ち是で全部(C'est tout)といふ意味であつたらう。現在は何と說明せられて居ようとも、さういふ趣旨の結末の弘く行はれて居る以上は、この推測は一應は之を認めねばなるまい。江戸では以前「それで市が榮えた」と謂つたさうだが、今では普通「それでおしまひ」といふことになつて居る。甲州九一色の例は土橋君の言に依れば、

何々したさうだ。それもそれつきりイ

と、引延ばした語を以て終つて居た。信州松本では「そればッかり」、もしくは「そればッかりしよ」と老人などは謂つたさうである。遙かに西へ飛んで伯耆の米子などは、

昔こつぽり

といふのを末の文句にしたことが、雜誌『民俗』に出て居るが、今はどうであらうか。その鄰接各郡村の例と共に、もう一度確めて見たいものである。是などは謂ふ者も恐らくはもう意味を知らなかつたらうが、やはり「昔は是ばかり」であつたのが、後に「昔こつぽり」など〻、移つたものと考へられる。それと似た例は長崎縣の伊王島で、現在は單に「そるばーつかり」と謂ふのを、以前は

そるばーつかり、こるばーつかり

と謂つて居たといふ話があり、更に島原半島の一角まで行くと、

こるばッかるばんねんどん、あばん忠れんどん、江の浦ん彥れんどん云々

といふ文句を添へて、是は昔小濱の湯に入りに來た切支丹宗徒の者の名であつたやうに謂つて居ると、榊木敏君は報じて居る。子供はいつ迄も話の後ねだりをする者だから、それを切上げさせるべく、此樣な飄輕な言葉を、高く唱へ始めたとも想像せられようが、假にさうだとしても下地はあつたので、しかもこの九州の向ふの端まで行つても、尙且つ「是ばかり」といふ語が用ゐられて居たのには、遠く由つて來る所が無くてならぬ。

夙く書物になつて居るものでは、中川喜雲の私可多咄(寛文十一年)に、

昔はまつこう、猿が面はまつかいな

といふ文句を以て、結尾とした猿の一話がある。是なども文句は假に新作であらうとも、斯ういふ語を著けるまでは創意で無かつたらう。「昔はまつこう」は伯州米子の「昔こつぽり」と同じく、「昔はまツ此の如く」の意に夙くから用ゐられて居たらしいからである。「それで市がさかえた」などは好い言葉であるが、或は「一期さかえた」から轉訛したものでは無いかとの說もある。佐々木喜善君の今度の集錄の中にも、「孫子繁げた」といふ文句が、二三ケ處見える。昔話の結末は大抵は幸運者の成功だから、單なる「是でおしまひ」以外に、別にさういふ結語も出來たのかも知れない。越後ではこの「市が榮えた」が流行したと見えて、西蒲原の吉田附近では、

えッちがさツかえぼッきと折れた

と謂ふのを、昔話の末句にしたと、幸田文時氏の『里言葉』には見え、又南蒲原では之を

市の樹がぽーんと折れた

といふと、外山曆郎君は報じて居る。二つとも尙「話は是を以て終る」といふ意味を、丸つきり失つては居なかつたやうである。一つの珍らしい例は五十嵐力博士の『趣味の傳說』の中に見えて居る。是は山形縣から秋田縣にかけて行はれて居るものらしいが、其地方に於ては話の終りに「どうびん」といふ語を用ゐる。或はそれを大袈裟に

どうびん三助、三助アうちに火アついて、權助ア屁でふつ消した

ともいふことがあるさうである。此「どうびん」については一つの想像說があるが、それは後でいふとして、もう一つの變つた例は越中の富山市附近で、昔話の終の句が

語つても語らいでも候

といふこと、此點は高崎大田の二君共に之を報じて居る。無意味な言葉のやうで、自分には深く考へさせられる。即ち「是でおしまひ」や「是つきりイ」が、單にうるさいからもう聽かうとするなの意味で無く、最初から語らうにも語るまいにも、話者の聞き知つて居ることは是だけしか無い。即ち傳ふべきものは悉く傳へてしまつたのだといふ趣旨の、一種の誓文であつたことを、之に由つて推測せしめるのである。我々の固有信仰の曾てまだ旺盛であつた時代には、今の傳說の骨子であるものを內容とし、今の昔話の特徵であるものを形態として、

祖先以來の傳承は授受せられて居た。其形跡は追々に指證せられようとして居るのである。神話といふ名目は今はやゝ濫用せられて居るが、是を「信ぜられて居た時代の昔話」と解するのが、此語を創始した人の志には合するのである。我々が子供でも無いのにこの切れ〴〵の民間說話を珍重し、一方には又如何に頽廢し又は引き曲げられた傳說をも粗末にせぬのは、有りやうは此二つの方面から推して行かねば、其神話の全體を察することが出來ぬからで、その前提としては昔話と傳說との、永い間の進化の經路を明かにする必要があるのである。近世新たに入り又は改造せられたものを、千年五百年の昔のまゝのものと同じに見るやうでは、到底精確なる斷案に到達する見込は無い。しかも日本のやうに斯ういふ色々の目標物が、豐富に保存せられて居る國はさう多くは無いのである。自分が僅かに知つて居る地方の事實にも、もう是だけの一致と變化、また是だけの暗示がある。此上猶詳しく尋ねて行つたならば、其收獲は或は意外のものがあらうも知れぬ。だから先づ最初に此點を考察して見たいと思ふのである。

五　昔話の合の手

今まで主として注意せられて居たのは、昔話の內容、もしくは趣向ともいふべき部分であつた。しかし內容は實は時代と共に、驚くばかりの新陳代謝をして居る。獨り傳說のみが聽衆の期待に應じて、次々の改造を遂げたのではなかつた。昔話とても決して古い儘を語つては居なかつた。例へば「黃金小犬」に見るやうな孝心な弟の幸運談は、いつの間にか兄を騙した「金ひり馬」の笑話に化し、たつた一粒の殘りの豆が、天に屆く大木になつたといふ奇瑞談などは、後には屁ひり爺や雷神の手傳ひの如き、大話とも結合することになつたのである。しかも一方には此變遷とは關係無しに、殆と無意識に古くからのものを持傳へて居たのが、前に列記したやうな幾つかの話法であつた。細かく注意して居たらまだ此以外にも、昔話にしか無いといふ特徵が見出されようも知れぬ。兎に角に折角今日まで保存せられて居たものを、愈〻採集に臨んで棄てゝ來るといふことは無い。假に記錄の方法は改めることが六つか

しいにしても、少なくともさういふものが有るといふことを、承知した上で採集するやうにだけはしたいものである。

西洋の昔話には話の初と終との他に、中間にも時々挿む文句のあることが注意せられて居る。たとへば英語の說話集に、クリック・クラック・ストーリーズといふなどがそれで、話者は折々話中にクリックといふ一語を入れて、聽衆が果して傾聽して居るか否かを試みる。其時に後者が直ぐにクラックといふ語を以て應じないと、もう其晩の話はそれで終るのであつた。我々の邦にはさういふ風が無かつたかどうか、久しく尋ねて居たがそれまでを記錄した者は無かつた。ところが內田邦彥氏の骨折に多謝しなければならぬのは、津輕の口碑集にその一つの例が現はれて居る。同書一五頁の亡靈の戻つて來る話の中に、突如として關係の無い次の一句が入つて居る。

むがしこ早くて寢目になつたどす

是は傳承者が是も話の一部かと思つて、意味も考へずに譜記して居たものらしいが、其爲に偶然婆や母が、話の間に斯んな語を挿んで居たことが知れたのである。勿論此場合には、聽いて居るわらしが寢てしまつたのなら、止めようといふ積りでさう言つたのであらうが、何にもせよ其一句を話のやうにして入れるといふ習はしは前からあつたのである。說話が兒童を睡に遣る爲に用ゐられる際には、是も催眠の子守唄の類であつたらうし、望みとあらば話してやらうといふ成人どうしの間ならば、或はセビオ氏などの言つた如く、後は明晩といふ合圖とも解してよいが、それが今一段と大切な敎育であつた時代には、是も或はもう少し深い意味のある語であつたかも知れない。クリック・クラックといふ簡單な單語の、最初の語義も調べて見なければならぬと同樣に、日本でも之に該當する文句の何であつたかを、今些しく各地に涉つて尋ねたいものである。「昔こア早くて寢目になつたどす」は、東京でならば「此兒はもう寢たさうな」とも謂ふべきところである。そんな場合には幼ない聽手たちは、必ず慌てゝ「うゝん、まだ寢ない」といふが、弘前邊では果して何と應へて居たらうか。普通は話者からさういふ探りを入れられる迄も無く、寧ろ稍煩しい程に「うん」と「それから」を連發し、話が所謂山に達する頃には、一度聽いて筋を知つて居る兒までが、この受け返事を愈〻繁くしたのであつた。人はこの習慣を以て、或は兒童自然の好奇心の現はれと解して居るか

も知れぬが、彼等とても昔話以外の談話には、さうやたらには此音聲を放たない。それと同時に成年の間にも、受け返事を繁くする談話と、さうで無いものとを區別して居る。よく落語家などが笑の種にするが、少しは受け答をしてくれないと話をするのに張合が無いといふと、それではと言つて無暗に「ふん成程」をくり返し、又話の腰を折つてしまふといふをかし味などは、我々もよく理解して居る。しかも眞面目な會話ほどこの合の手が少なく、面白い話では適切な箇所に之を送つて、後段をたぐり出すやうにするのを聽上手と謂つて居た。事によると是も昔話の方から移して來たものかも知れぬのである。併し「うん」とか「それから」といふ類の單に謹聽々々を意味する語ならば、移して日常の世間話に用ゐたとも言へるし、又偶然に發明せられたとも言へるが、昔話の合の手は元は必ずしも其樣な簡明なものばかりで無かつたらしい。たとへば紫波郡昔話の第百十一章にある一種の「果無し話」などでは、話好きのお婆さんが話の句切れ毎に、

口にえぼうしはア

と答へたとあつて、この話の文句は既に意味が不明になつたと言つて居る。私は斯ういふ類の文句が、尋ねたらまだ他の地方にも、小兒などの間に遺つて居やしないかと思ふ。五十嵐教授の集錄の中で見た「どうびん」の如きも、本來は或は此類のもので、話の中間に挿んで居たものでは無かつたか。津輕口碑集には、山形縣の先達在家といふ處でも、昔話の終末に「とろびん」と言ふ例があると記して居るが、私は是が意味不明であり且つ餘り短かい故に、曾ては「解つたか」とか「よく聽いて居たか」といふ心持に、話の段落毎に挾んで居たものを、後には唯「市が榮えた」の代りだけに用ゐたのかと想像して居る。「市が榮えた」の起りがもし「一期榮えた」であつたならば、是なども決して話の終末だけに、附加せらるべき文句では無かつたのである。

六　保存部分と自由部分

昔話の初中終の三つの形式の中で、「終」が特に複雜なる變化を示した理由も、私には大よそ解るやうな氣がするが、其方は爰では差控へて、まだ當分は不明なものとして置く。しか

し是とはちやうど反對に、以前必ずやゝ複雜なものがあつたらうと思ふ中間の形式が、追々幽かになつて、後は單純な受返事の如きものに化した理由だけは、さまでの面倒無しに之を説明することが出來る樣に思ふ。一言にして盡すならば、昔話は時と共に益々短かくなつて來たからであつた。中程で相手の傾聽するや否やを確める必要が無い位に、早く片附く話ばかりが多くなつた爲であつた。是は事實であつて誰でもよく知つて居るが、其原因は三つほど有る。一つには時間の短縮、二つには話の種の增加、三つには之を聽く者の態度の變化である。古風な昔話は神話の世の名殘を受けたものか。或一つの重要事を懇切丁寧に、個人が自ら實驗する以上に、裏から表からと繰返して知らせようとし、それを又面白いと思つて氣永に聽いて居る者も多かつたのである。ところがもつと他の話をといふ要求が段々に盛んになつて、勢ひ一つの話は省略せられなければならなかつた。

手近の例でいふと猿聟入の話に、老翁が還つて飯も食はずに寢て居る處へ、三人の娘が見舞に入つて來る。それに一人々々猿に約束したから嫁に行つてくれと言つて、上二人の姉は腹を立て、末の娘がおとなしく承知をする。この二回半の問答は、同じ文句を同じ調子でくり返さないと、三番目の優しい情愛は映らぬのであるが、近世は忍んで其全部を聽いて居らうとする者が無い。人に之を傳へようとするにも、當然に「同じことを謂つた」の一句を以て間に合せようとする。話は始めから要項に過ぎぬから、そんな文句までは保存せられないのである。ところが或時代には、是が三人に止まらず、或は七人の姫であり、十二人の兄弟であることさへあつた。それを殘らず聽かせようとするには、前に擧げたやうな時々の奪策が入用であつた筈である。我々の名づけて隣の爺型といふ昔話、卽ち灰撒き爺や屁ひり爺なども、最後の或一點の相違を顯著ならしめる爲に、特に同一の問答を二度づゝ語るのであるが、子供こそは善惡二人の老人が、引續いて同一の所作をするといふことに、嬉々たる興味を抱くであらうけれども、成長した我々にはそれが如何にもまだるつこい。從うて少しでも其問答の數を少なくしようといふ試みも現はれて居るが、鼠の淨土の信仰がなほ殘り、もしくは道端の地藏を貧者の友と見て居た時代には、寧ろこの稀有の會話が長たらしく、たとへば近頃の軍縮會議の議事錄の如くならんことを、欲して居た者も多かつたのである。

一番最初にこの親切なる話法に對して、叛旗を翻へしたものは「果無し話」であつた。是も

後々は子供の話ねだりを懲らさんが爲に、一種の防禦用に保存せられて居た形はあるが、わざと此樣な平凡なる出來事、たとへば鴉がカアと啼き、蛇がによろ〳〵と動いたといふ樣なことを、際限も無く繰返さうとしたのは、起りはやはりあの餘分の丁寧に倦んだ成人たちの、昔話に對する趣味の變化であつたらう。笑ひ話の發生にも幾通りかの起りがあつた。單に退治せられた妖怪や眞似そこなつた慾深爺の、見苦しさを誇張するだけで無く、一方には又成功した者の幸運と福分、もしくは寶物の奇瑞や藝術の精妙などを、どうせ夢ならば思ふさま大きく夢みようと、馬鹿々々しい程度まで述べ立てた大話といふものも出來た。雁と共に天を飛んだ話とか、額に柿の木が生えた話などがそれである。大話や果無し話の間接の影響は、笑話で無いもの〻上にも現はれて居る。話は理が詰んで又手ばしこく筋が運ぶのみならず、出來るならば數を多く種を新らしく、變化を豐かならしめんとした努力は、主として亦之に基づいて居たやうである。是には固よりこの技藝を職とした者の存在が要件であつたが、彼等が其衣食の資を斯樣な業から、求め得られるやうになつたといふのも、一方にそれを聽いて樂しむ者、殊に笑話の微妙なる心理を、たとへ漠然とでも會得する者が、次第に世の中に多くなつて來た結果である。

私たちから見ると、是は「昔話」の歷史の上で、かなり大きな革命であつた。所謂民間說話の比較研究をするといふ人が、定義も下さずに神話といふ文字を濫用するのも困つたことだが、それよりも差當つての迷惑は年代の無視、即ち說話がいつもかも同じ形で行はれ、殆と日本では何の進化展開をも見なかつたやうに、人に說かうとすることである。是は今一段と蒙昧な民族に對してでも、許し難い斷定であるが、殊に我々の祖先ほど昔話を愛玩し又利用して居た人々が、土地にも時代にも無頓著に、移住當初の儘を保存したといふことは有り得ない。早い話が一鄕黨一家庭に、知られて居る限りの昔話を集めて見ても、現在のところでは六七分、處によつては八九分までも、滑稽惡謔を以て充ちて居る。昔話とはをかしい話、笑はせられる話だと思つて居る者さへ少なくない。それが果して千年はさて置き、五百年以前の日本に於てすらも、普通の狀態だつたと言へようかどうか。少なくとも今ある記錄の中から、斯ういふ獨立した笑話が三百年前にもあつたことを、證明することなどは自分には出來ない。滑稽の用途は昔とても無論有つた。それがある爲に昔話は面白く、又此通り永くも

てはやされたのでもあらう。しかももとは唯壯烈なる行爲の反面に、もしくは驚歎すべき事件の前後に、言はゞ感動の波瀾を重疊せしむべく、交へ織らるゝに過ぎなかつたものを、引離して個々の短篇のをどけ話とするやうになつたのは、中世新たに現はれたる咄の者、一名御伽坊主なる者の術藝であつたと思ふ。昔話の輸送は彼等以前にも、何か類似の機關によつて行はれて居たらしいが、其方はまだ自分には確かめることが出來ない。兎に角に此期に入つて急に話が多くなり、今まであつたものを分解し又改造する他に、更に新供給を內外の文籍にも、仰がうとしたことだけは爭へないのである。我々の「昔話」の分類を必要とし、この新古の差を無視して、概括の論を立つる能はざるは當然であつた。しかも同じ話の復演を厭うて、ひたすら職業的製作品を歡迎した都會地は別として、他の大區域の田舍に於ては、聽く者も又話す者も共に、依然として昔からの昔話を見棄てなかつた爲に、實際はやゝ雜駁なる混淆があつて、人を此誤謬に誘ひ易かつたのである、それを今日に於て整理排列しようとするには、特に私の前に擧げたやうな、昔話のフォルミュールに注意を拂はなければならぬのである。之をもつと具體的にいふと、我々の老幼が等しく昔話として記憶して居るものゝ中には、

(イ)室町時代前からもあつて、單に歲月によつて自然に缺け損じただけのものと

(ロ)何人かゞわざとそれを作り替へもしくは切りちゞめて短くしたものと

(ハ)丸々新たなる考案模倣によつて作り出したものと、

少なくとも此三つが併存して居り、後の二つはごく僅かな例外、たとへばお銀小銀の繼子話などのやうなものを除けば、大抵は滑稽を主としたものであつた。從うて之に伴なふ發端又は結尾の語辭も、新らしいものだけは少し頓狂に改作せられ、中間に挿んだ應酬の文句などは省略せられることになつた。新舊說話の混淆する歩合は、土地によつて等差がある筈であるが、それは略この始中終の形式語の、古風を存すると否とに由つて、是を觀察することが出來ると、私などは思つて居るのである。

七　昔話の發生順序

昔話だから皆昔からあつた話だと思ふことの誤りは、最早くだ〳〵しく之を論ずるの必要もあるまい。そんなら其樣な後の附け加へなどは綺麗さつぱりと、證據のあるものなら取除けてしまふがよいといふ樣な早合點の方こそ、寧ろ我々は大いに反對しなければならぬのである。單にそれを棄てゝは淋しくなるといふが如き未練だけで無く、是が無かつたら恐らくは昔話といふものゝ、如何なる方向を取つて進化して行くものかを知ることも難く、又この民間の文藝が、進んで落語となり滑稽文學となるに至つた經路をも詳かにし得ず、人は依然として之を地底の石片骨片の如く、千古不變だとするやうな觀察を改めることが出來なかつたらう。是は說話の學問の爲に、誠に怖るべき魔障であつた。其上に我々の曾て大事にして居た昔話で、夙く改造によつて原の姿を失ひ、今は只滑稽化したる第二第三の形をのみ保存して居るのもの多い。才分ある咄の衆などの作爲によつて、新たに考案せられたといふ昔話の中にも、尙無意識に古い話法と內容の一部とを、持傳へて居る例は少なくない。おろか聟おろか息子の趣向は皆近世であらうとも、是を笑はせつゝ若い聽衆に、自然に其反對を學ばしめんとした古人の親切はなほ窺はれる。さうしてこの以外には、最早前代の滑稽教育の痕跡は殘つて居ないのである。

古い昔話の成長し又退化したといふ事實、殊に上古に於ても何回と無く、趣味の推移があり選擇の異動があつたらしいことも、この笑話い旁例と對比することによつて、追々に確かめられる希望があるのである。たとへば動物由來談が切り離されて、比較的簡單な一群の說話を爲して居ることも、或はある時代の流行に出でたものかも知れず、狐狸や妖怪の出現の益ゝ巧妙に又意外になると共に、一方に是と鬪ふ者の勇力智能も加はつて、單なる逃竄から完全なる退治にまで、幾つと無き勝利の階段を示して居るなども、それが現在の河童天狗の失敗した笑話と續いて居るのを見て、始めて追々の改良であつたことを察し得るのである。我々の分類はこの最終の一轉回期を堺線として、今少し綿密に其前と後との變化を比較するやうになつたならば、或は更に進んで一方の古風昔話が、現在の形になつて來た足取りを、

究めることが出來るかも知れぬと思ふ。

そこで將來の國内採集家に向つて希望しなければならぬのは、何よりも先づ昔話が、本來形式を重んずる口碑であつたといふことを承知してかゝつて貰ひたいことである。形式は或は調子口拍子と謂つてもよく、又は固有の敍述法と名づけてもよいが、兎に角に文字の記錄以外の手段を以て、古くからある言ひ傳へを後代に引繼がうとするには、何か特別に印象を深くし、記憶力を扶助するものが入用であつた。歌謠や語り物に定まつた節調があり、諺や唱へごとのやうな單純な文句にまで、尙その爲の句法語法があつたことは、認めない者も無い今日であるが、昔話ばかりは其折々の雜談も同樣に、たゞ自由に事柄だけを覺えて居たものゝ如く、思つて居る人が少なくは無いのである。さういふことが果して常人に出來るものか否かは、僅かな實驗を以て知り得られることだが、そこ迄は多數が考へ及ばなかつた。是は全く傳承法の相異、即ち昔話が歌物語などのやうに、敢て全篇の逐句的諳誦を要求せず、單に中間若干の重要なる辭句を記憶せしめて、其他を自然の再現に放任してあつた結果である。桃太郎の「一つ下され御伴せう」、花咲爺の「こゝ掘れわん〳〵」の類は、一々引證する必要も無いが、實際大抵の子供は永遠に是等の言葉を忘れず、其爲に又話の全體をいつ迄も覺えて居る。しかも其記憶力には最初から不均等なる配分があつて、久しい歲月には他の從屬的部分は、改められ又は誤らるゝ機會が比較的多かつたのである。昔話の變化すべかりし原因は爰に在り、人が往々にして全體を古傳の儘である如く、誤信する理由も亦爰にあつた。

さうして說話の大體の構造のみに重きを置き、其骨子を爲した若干の會話を、偶然のものゝやうに思ふ人が多くなつて、更に一段の烈しい改造が行はれるやうになつたのである。一つだけ手近の實例を擧げて見るならば、例の「屁ひり爺」の尻の鳴る音などは、殆と村毎に其文句が變化して居つて、しかも遠方の地にまでまだ一部分の一致が殘つて居るのは、是が本來は說話の不變分子であつた證據である。ところが如何に嚴密に其形式は保持せられて居ても、そればかりではなほ說話を元のまゝに傳へられなかつたことは、其前半の方を比較して見るとよくわかる。即ち「そこで木(竹)を伐るのは何者だ」、「山々の屁ひり爺でござる」云々とある問答は、全國ほゞ一樣といふ程度に踏襲せらるゝにも拘らず、誰がさういふ咎めだてをしたかといふ點に至つては、暗記部分で無い爲にもう甚だしく變化して居て、甲の地では

殿様、乙の地では地主又は旦那様、丙の地方に於ては之を山の神とさへ謂つて居るのである。元は瘤取りや笠地蔵と同様に、此昔を愛して悦んで恩惠を垂れた者は、恐らくは神靈であつたらうが、是は自由に話し得る點なるが故に、後には村内生活の有り得べき逸話のやうな形をとり、從うて屁の文句の如きも、呪言の意を去ること遠くなつてしまつたのである。部外他種族の說話の採集、殊に白人が阿弗利加や大洋洲に於て試みたものなどは、理解の能力が到底かゝる形式の辭句に及ばぬのみならず、話者も最初から通辯の望み無きことを知つて、さしも彼等に取つては肝要の部分を、いゝ加減に端折つて筋を運ばせた場合も多かつたのは致し方が無いだらうが、言語感覺を共通にして居る我々までが、此流儀に倣うて記錄を省略し、折角僅かでも遺り傳はつて居るものを、拋り出してしまふことは損失である。ちやうど木の板に書いた墨の文字が、板が磨り耗るにつれて高く殘る樣に、この口拍子でくり返された若干の應答や唱へごとだけは、比較的古いものが鮮かに浮き出して居る。是が昔話の年代をきめる上にも、又は各地の類例を比較する上にも、今では殆と唯一の手がゝりになつて居るのだが、それだけに用語が古臭かつたり、又は片言になつて意味の取りにくい場合もあるので、無造作な「研究家」には、之を今風に書き、もしくは略した人が多い。彼等は多分外國の採錄者が、ほんのよんどころ無くさうして居るのを見て、是でよいものと思つて眞似をするのであらうが、是は誠に悲しむべき破壞事業であつた。どうか我々だけはそんな仲間に入りたくないと思ふ。

八　童話と昔話

神話とか傳說とかいふ文字は、流行はして居るがまだ日本語になり切つて居ない。是に如何なる內容を持たせるのも、今ならば使用者の勝手であるかも知れぬ。しかし將來も學問の上に永く使用しようとするには、少なくとも分堺を立てゝ、同じものに二つ名があつたり、他のものに一つも名が無かつたりする樣な、だらしの無いことだけは避けなければならぬ。昔話を傳說とも呼んで居る人は、他の何等の形式も具せず、用語も一定せず、しかも信じて語り又聽く者を信ぜしめんとして居る一團の言ひ傳へに、別にどういふ名を付與するかをき

めた上で無ければ、恐らくいつ迄もそんな混用を續けるわけに行くまい。昔話の集錄に向つて、神話何々とかいふ名を附して居る人も同樣である。日本にはまだ現在はしかと發見せられて居ないが、曾て自分たちの信じ傳ふる所を、時を定め場所を限り又一定の形式によつて、語り聽かせて居たといふ事實だけは確かにあつた。それと今日の所謂民間說話とは、少なくとも日本に於ては明かに別物である。昔話は三尺の童兒までが之を正傳とは信じて居らぬのみか、話者も力を盡して是が架空のものなることを暗示しようとして居る。昔々ある處に、ある貧しい一人の爺があつたと謂つて、立證の責任の無いことを明かにして居る。單に其中には以前全幅の尊信を以て傾聽したもの、即ち神話の一部分が形だけを、混じ傳へては居ないかを感じられるだけである。外國の學者の中には、若干の蒙昧の種族が、今なほ半信半疑の過渡時代に在ることを推測し、又は今ある昔話の幾つかに、神話の名殘とおぼしきものがあるのを見て、時あつて稍大膽に、さういふ神話式昔話をもミスと呼ばうとした者があつた。又ミソロジーといふ名稱を、昔話の中から神話の痕跡を探らうとする研究にまで、推し擴めようとした學者のあることも事實である。しかし其爲に所謂神話學で取扱ふ資料が、忽ち神話と名づけられてよいといふ結論にはならない。斯んな判り切つたこと迄が、我邦ではまだ間違へて敎へられて居る。だから私は馬鹿げた勞苦を拂つて、昔話の特徵たる二つの點、即ち形を大事にすることゝ、內容を信ぜず自然の改作に任せて居たといふことゝを說いて、一應其範圍を明確にしようとしたのである。

それと同じ趣意を以てもう一つ、最後に昔話と童話との關係を明かにして置きたい。昔話の若干は近世になつてから、特に幼なき聽衆の興味を顧慮して、之を簡明に且つ無邪氣に、語り改めようとする傾向を生じたことは事實である。それから一方には成人の事務と話題が多くなつて、昔話の愛好者が追々と兒童ばかりにならうとして居ることも亦事實であるが、しかも之に由つて昔話の全部を、童話と名づくることは當を得て居ない。現に近代に發達した笑話の中には、わざと兒童の居合はさぬ時刻をはかつて、話さなければならぬものが無數にあつて、しかも兒童はいつの間にか之を聽き知り、長者の居ない處ではこそ〳〵と話し且つ笑つて居る。昔話の席上に兒童の參加するものは以前とても多く、近頃は其步合が益々增加して居るが、さりとて昔話の大部分が別に兒童用となつたわけでも無かつた。たとへば所

謂五大御伽の桃太郎だけは、曾て要素であつたらしき妻覓きの一條を省略し、犬猿雉の問答を稍あどけなく改めてゐるが、カチカチ山の「婆喰つた爺やい」に至つては、隨分と感心し難い慘虐のまゝになつて居る。其他子供の高笑ひするおろか聟、小僧の頓智と和尚の弱點の如き、どこに彼等の爲に用意したと見るべき個所も見つからぬのである。童話をもし兒童の爲に設けられた昔話と解するならば、そんなものは稀だと言はうよりも、寧ろ當節の製作童話以外には、無いと言つた方が精確なのである。グリム兄弟の話集の標題が、或は人をして誤つた速斷に陷らしめたかも知れぬが、是は「昔話」といふやうな要領を得た單語を、持合せなかつた國の不幸である。英國でもつい近頃になるまで、フェアリーテールズといふ語が、妖精を說かない昔話の類をも包含して居た。古人はもと總名を附けるに疎かであつたから、時には無理な延長をも免れなかつたのである。日本は幸ひにして其樣な必要の無い國であつた。ましてや童話といふ語は耳馴れない新語でもある。しかし一旦行はれた以上は棄てるにも及ばず、ちやうど「笑ひ話」や「大話」といふ名が、三四百年來の變化に成つたものを指示するに適した如く、この近頃の家庭向き改造の部分を、名づけて子供話もしくは童話といふのは幾分の便利がある。たゞ古來民間に集積して居る澤山の昔話を總括して、之を童話と謂ふに至つては寸毫の理據も無く、又そんな當らぬ語を强ひて採用せねばならぬ必要は、本をひさぐ者の算盤以外に、自分は之を發見することが出來ないのである。

これに附け添へてちよつと提案して置きたいのは、この我々の昔話と對立させて、新たに「世間話」といふ名目を採用して見たいことである。同じ一夜の火の傍の夜話に、昔話で無い今一種のハナシがあつたことは、是も恐らく上代以來であらうが、世の中が新たになると其方は自然に量を增加して、主として昔話の領域を侵食することになつた。それに何等かの總括的名稱が入用とすると、「世間話」が一番當てゝ居るやうに思はれる。多くの話ずきは先づ新らしい世間話を求め、それが太平無事の田舍なるが故に種切れになると、それから昔話の復習に戻つて來た。旅行や讀書の自由で無かつた時代にも、この世間話は成長する傾向をもつて居たのみならず、更に昔話それ自身の展開の上にも、可なり大きな刺戟を與へたかと思ふが、それと同時に强ひてこの世間話を豐富ならしめんとした努力は、往々にして材料を昔話の方から引寄せて居た。爐邊に最も人望のあつた狐の話狸の話、その他驚いたり笑つたり

する人生の逸話が、形は事實の報告の如く見えながら、其實は種を古い昔話に借りたものであつた例は、どこの地方にも有りすぎる位ある。それが昔話の歴史を知る上に、缺くべからざる史料であることは素よりであるが、同時に又人は如何なる種類の風説に興味をもち、如何なる方法を以て其供給を圖つて居たかといふことも、民間文藝の發達過程を知る上に大切な參考である。昔話を集める人たちに、私はなほ一歩を進めて世間話の研究を慫慂したい。

九　採集の協力

昔話の分類といふことは、多くの採集者が熱望して居る程には、自分などは其急務を認めない。單に現在の狀態ではそれが稍困難な仕事だといふだけで無い。强ひて概括的な名目を對立させなくとも、よく似た昔話を一處に集めて置けば、それで全體の見渡しがつく位に、其種類は實際は少ないからである。バーン女史の「民俗學概論」の末に列記した數は七十二だが、あの中には餘りに近くて別にするに及ばぬものがある。日本では多分一百ばかりのものであらう。其中には勿論新らしい形が次々に出來て居るが、個々の種類の間にもやはり古さの差等があつて、全部が一時に世に現はれたのでは無い筈である。從つてもし注意深い考察を重ねて行つたならば、行く〳〵は之を發生の年代順に排列して見ることが出來るものと信ずるが、それは非常に大きな問題であつて、實は我々の研究其ものと言つてもよいのである。この分類が滿足に出來上つた時は、即ち昔話の學問の完成であつて、それ迄は假に分類をして置いたところで、何度でも改訂しなければならぬのである。今日の聽衆が目標にしたがる點は、大抵は土地や時代によつて變化する部分であつた。鬼だ狸だ山姥だと言つても、桶屋だ山伏だ牛方だと言つても、僅か隣へ行つて見ると直ぐに他のものと入れ替つて居る。まさか是を狸説話・桶屋説話など〻名づけて、はい分類しましたと言つて居るわけには行くまい。つまり急いで見ても本當のものは出來ないのである。

それよりも急を要するのは昔話を知つて居る人のまだ居るうちに、少しでも數多く變化のあらゆる形を拾ひ集めて置くことである。今まで印刷せられた十餘種の話集を見ても知れる如く、又今度の催しでも實驗した如く、昔話の日の光を見たものは所謂九牛の一毛である。

舊日本の全版圖に比べると、百に一つと言ひたいが、まだそれだけの面積をすらも覆うて居ない。手の屆かぬ方面には數百の小さな島、山の奥や岬の片陰などの村で、最も冬の夜が淋しく長く、且つ世間話の威力の及ばぬ區域が殘つて居る。そこに話を多く知つて居て聽く人を得ず、又は他に運び出す機會を有たぬ老人たちが、既にくづをれて行かうとして居るのである。是に共鳴して居る若い男女も、恐らくまだ決して少なくはあるまい。今は唯この人たちをして、心置き無く聽いて居たことを公表して、我々の學問に貢獻せしめ、飜つては又その背後の寂しき人々を尊敬せしむべきである。

學問ある人たちの餘分の干與、上品過ぎる飜譯は戒めなければならぬ。折角大切なる形式の傳はつて居るものを、殺して持つて來るやうな紹介ははやらせたくない。あんまり當世のコント風に書き改めて居るものは、もう一度元方に就て正しく聽き直すやうにしたいものである。是に對する故障は、それでは報告があまりに長たらしくなり、同じやうな文句が何遍でもくり返されて、第一面白くなくなるといふことであるかも知れぬ。それは尤もな話で又勞力の浪費である故に、私は早く今度の樣な計畫を重ねて、新たに一つの基準昔話集を作つて置きたい。前年公けにした『日本の昔話』は、大體其目的を持つてかゝつたものであるが、分量も少なく又兒童用を主とした爲に、日本の昔話の片端にしか手が附けられなかつた。そこで昔話の今後の研究者の爲に、新たに五つほどの要項を提案して置く。幸ひに篤志者の團體などが出來て、これが實現に協力せられるならば、日本は當然に世界の民間說話の實驗所となることが出來るであらう。

一、基準昔話の選定と公表。各地から報告せられる同種昔話の中から、比較的形のよく整うた一つを選んで、それを精確に記述したものを公表して置く。

二、類型昔話の搜索と比較。是を內と外國の仕事に分つて、重きを內の方に置く。但し大抵の場合には基準昔話と比べて、異なつて居る點のみを報告すればよいことにする。

三、國外類型の分類と索引。是は常に成書のうちから發見するのだから、珍書でも無い限りは頁數だけを揭ぐれば可。但しこの類似には程度の差があるから、何か標準を設けて甲乙丙丁の順序を作り、たゞ爪の尖ほど似て居るものを見つけても、直ぐに鬼の首を取つたやうに騷がぬこと。

四、基準昔話の改定と新設。後から見つかつた類話の方が、更に完備して居た場合には、前のを罷めてそれを基準にし、又類似が微弱であると見たものは、其爲に新らしい目を立てる。但し二つ以上の話の面白い部分を繋ぎ合せることは、虚構と同樣に之を嚴禁すること。

五、昔話の名稱一致の申合せ。是は番號でもよいのだがそれでは興味が少ない。名稱は成るべく新たに設けず、弘く行はれて居るものから採るやうに心掛ける。さうして行く行くは之によつて、單に一二の異なつた點を附記すれば、それで長い昔話を話すのと、同じ結果を得られるやうに努める。

現在私の抱いて居る希望は「是つきり」である。願はくは永遠に向つてこの昔話の市が榮えんことを。

（旅と傳說、昭和六年四月）

昔話の發端と結び

一

『旅と傳說』の昔話特輯號に、昔話の初めと終りに附くきまり文句の、諸國に行はれる形を二十ほど並べて見たのは、今から十年餘り前のことであつた。あれから昔話の採集が又よほど進んで、大よそは比較をして見ることが出來るやうになつたから、爰でもう一度、重複しないものだけを列擧して見よう。言ふまでも無く是は多く集まつたのを自慢するためではなく、寧ろ是からの採集者にむだをさせない爲である。この問題には限らず、方言でも子供歌でも、又はもつと重要なる信仰や社會律の現象でも、最初から國內各地が區々であつた筈は無い。それが此樣に思ひ〳〵の變化を見るやうになつたのは、存外に近い時代になつてから

後のことで、少し氣永に注意してゐたならば、段々にその事實が判つて來るのみならず、更にその無數の地方的變化を一貫した、法則とまでは言へなくとも、傾向ぐらゐは明かにし得るといふこと、それをやゝ顯著なる昔の一例によつて述べて見たいのである。個々の鄕土に止住して同情ある觀察を續け、限られたる區域の採集に精進しつゝも、それが一國全體の學問に、果してどれ程の寄與貢献をなし得るものであるかと、思ひ惑うて居る人に取つては、この小さな綜合も亦一つの希望であり激勵であらう。さういふ中でも昔話の採集などは、前途に雄大な世界的發見を目ざしながら、常に人からは下らぬ道樂の如く、輕んじられやすい仕事である。せめては日本の中だけでも、協力の効果が是ほどにも大きく、又研究の興味が是ほどにも深いものであることを、急いで心づかせたいのがこの編者の願ひである。

二

我々の昔話は、「昔々ある處に」といふ言葉を以て始まるのが、中世以後の習はしであつたかと思ふが、それがいつの間にか地方毎に、僅かづゝ言ひかへられようとして居る。しかも今まで誰にも知られなかつたのは、その變り方にも各地の類似があり、變へた理由も大よそは共通だつたことである。山形縣の大部分で「昔あつたけど」、長野縣の中部に「昔あつたさうな」といふ例は既に擧げたが、是は或はどれよりも古い形だつたかも知れない。「あつたけど」は文語でならば「ありたりけりといふ」に該當する。始めの一句で此話が現代のものでないことを明かにし、從つて話者が直接見聞した事實ではないといふ意味を表はさうとして居るもので、方言は異なつてもその言ひ方だけはどこも同じである。

たとへば秋田縣では仙北郡の大曲や角館に

昔あつたぞん……

といふ言ひ方があり、それはちよつと聽くと「あつたぞ」と斷言したやうに取れるが、實は「あつたづおん」を早く言つたので、やはり「有つたといふものね」と、標準語でならば言ふべき場合である。是と心持も形も近いのは、

昔あつたでおん……

秋田縣河邊郡

あつたづお……　同　雄勝郡
あつたづおーな……　同　上

この後の方の例に於て、昔といふ一語を添へないのは省略で、越後蒲原地方の「あつたてんがのし」と同じく、あまり度々「昔」をくり返すので、無くても通ずるやうになつたのである。

昔々あつたおね……　岩手縣西磐井郡
昔あつたげだ……　新潟縣南蒲原郡
昔あつたさうぢや……　石川縣能美郡
昔はあつたてな……　岐阜縣吉城郡
昔あつたさうな……　香川縣志々島
昔はあつたげな……　高知縣長岡郡

勿論必ず此形でしか話し出さなかつたわけで無く、もつと色々の添へたり略したりする言ひ方も交へ用ゐられて居たのであらうが、とにかくに斯ういふのが前から用ゐ續けられて居た樣式であつて、それが又「昔話」といふ名稱の起りにもなつて居たのである。

ところがそれだけではどうもまだ安心がならず、もつと明瞭に到底この世の出來事で無いといふことを、聽手に承知させて置かねばならぬ樣な、空想に充ちた話ばかりが多くなつて、更に一段と此點を强調する必要が感じられた。そこで

昔々大昔のことだェ……　宮城縣刈田郡

と謂つて見たり、又は今風に

昔々うんと昔……　同　桃生郡
うんと昔であつたげな……　福岡縣鞍手郡

といふやうな形が現はれたのである。九州の方では又

昔々ずつと昔……　熊本縣鹿本郡
昔々じーつと……　長崎縣北高來郡
昔々じーとのまい……　同　上

とも謂つて居た。「のまい」は「のうお前」、卽ち相手の注意をひく呼びかけである。東北の方にも

先づ現代から引離す

昔々ずつと昔……　宮城縣栗原郡

といふ形はあるが、それよりも「さつと昔」といふのが廣く行はれて居た。

昔々さつと昔に……　同　名取郡

さつと昔その昔……　秋田縣平鹿郡

昔さつと昔……　同　上

それで昔話をザツトムカシと謂つて居る者も多く、何か面白い話をしようとする際に、先づ「さつとな」と呼びかけ、相手に「何とや」と受けさせてから、愈ゝ本筋に入るといふ風もあつたといふが、この「さつと」もやはり亦、他の地方の「うんと」や「ずつと」と同じく、本來は思ひ切つて古い昔を意味した方言であつたと思ふ。

三

現在はもうさういふ使ひ方が無いといふことは、其始まりが相應に早く、後には昔話以外のものには聽かぬやうになつたからで、さうなれば一層言ふ人の目的に合したわけである。小兒が昔話のことをトントムカシと謂つて居たことは前にも記した。是なども久しくこの語り傳への發端だけに限つて、さういふやゝ奇拔な表現を聽き馴れて居た爲で、現に又同じ文句の分布は、今でも東西にわたつて弘いのである。

とんとむかさあつたけど……　山形縣北村山郡

とんと昔があつたとさア……　新潟縣佐渡

とんと話があつたとさ……　同　島

とんとん昔があつたてのの……　同縣中蒲原郡

とんとん昔があつたがやな……　島根縣隱岐島後

とんとん昔もあつたげな……　同　美濃鹿足郡

とんとん昔があつたといや……　山口縣周防大島

とんと昔もあつたさうな……　愛媛縣上浮穴郡

とんとん昔であつたさうな……　福島縣小倉市

とんと昔もあつたげな……　香川縣仲多度郡
昔はとんとあつたげな……　同　地　方
とんと昔あつたさうな……　德島縣三好郡
とんとん昔あつたんぢや……　同　祖谷山

是等は大抵「とんと」がどういふ意味を持つものやら、考へても見ずに使つて居るらしいが、最初はやはり全然今と隔離した世界の出來事だといふことを、表示する爲の「とんと」であつたのが、それがいつと無くこの一群の說話の、總稱か又は看板の如くなつてしまつたものである。

但しその言葉がよほど耳に快く、又忘れ難い響きをもつて居ないと、この樣に永くは保存し得なかつたらうと思ふ。日本人は殊に單調に倦みやすく、いつも目先をかへることを趣味として居た。一夜に七つも十もの昔話をするのに、すべて前置きが同じであつては、說く者自らが先づ心おくれをする。それで必然に新らしい替りの文句も起り、又色々のものをまじへて使つたことゝ思ふが、案外にそれが傳はつて居ない。富士山の北麓に行はれて居るといふ「まア昔ある處に……」などは、東京の家庭にも「まづある處に……」となつて存するやうだが、是はたゞ一つの本式なものを、餘りくり返し過ぎた際に息拔きの意味で、折々は斯うも言つて見た迄かと思はれる。さういふ中でたゞ一つ珍らしいのは、鳥取縣の八頭郡に

なに昔ある處に……？

といふのがあり、又雜誌『安藝國』に出て居る昔話には

なんの昔があつたさうな……

といふ例もある。是などはナニが今のやうに純然たる疑問辭となるよりも前から、單なる口拍子として傳はつたのかも知れぬが、とにかくに言葉の內容にはさまでの注意を拂はず、たゞ一つの方式として斯ういつで居た時代が、久しく續いて居たことは想像せられるのである。岩手縣西磐井郡の一部にも、

こは昔あつたとさ……

といふ發語がある。古くは昔話の一つ毎に、「こは」といふ語を添へて居たのが、偶然に消え殘つたものとも考へられる。とにかく始めには伊勢や今昔の物語のやうに、たゞ簡單に「昔」

とだけで濟んで居たものが、やがて「昔々」となり「とんと昔」となり、同時に是非とも「あつたとさ」を、下に添へなければすまぬやうになつたのは、全國一般の趨勢らしいのである。

四

昔話の結末の一句も、本來の趣旨は至つて手短かに、たゞ是だけが傳承の全部で、知つて語り殘して居る部分などは無いといふことを、表白した誓文のやうなものらしいが、此方は後々の變化が多く、又一般に長たらしくならうとして居る。是は昔話の終りの文句が、斯ういふものだといふことだけを知つて、もう其言葉の意味をよくは意識しなくなつたのが一つの原因であらうが、なほ其以外に昔話の奇拔さが誇張せられ、笑はせる分子が段々と幅をきかすやうになつた結果、それに伴なうてこの最後の言葉の修飾に、力を入れる話手が輩出したものかと思はれる。

とにかくにこの結びの文句に於ては、東北と西南との一致が殆と無く、各地思ひ〳〵の變化を遂げて居る。それで地理的に南の方から、並べて見るのが便利かと考へるが、最近に沖永良部島の昔話集が世に現はれて、先づこの南の島の例が明かになつた。それは

……がつさとうさ

……がつさとうさでろ

など〻言ふので、ちよつと聽くとよく〳〵別系のもの〻やうに見える。しかし説明をして見れば、是も亦「斯くなん語り傳へたる」の一變形に過ぎぬので、しまひのデロ又はデェロは沖繩のデェビルと同じく、「侍る」に基づいた「候」以前の敬語で、標準語の「でございます」に該當する。ガッサは此島ではカ行の或ものが濁音化するから、「斯くぞある」もしくは「斯うだ」がこんな風に變つたので、それにいつの頃からか此方でいふトサを採つて附けたので、元はガッサだけでも用は足りたものらしい。喜界島の方でも昔話の結末に、今では

……ていさ

といふ簡單な語を添へる。是は「とぞ」「といふことだ」又は「とさ」と同じものだと、其島出身の岩倉君は説明して居る（喜界島方言集）。

鹿兒島縣にはまだ色々の注意すべき形が傳はつて居るらしいが、普通に市の附近などに行はれてゐるものは、

……そひこちやつた

……そひこんこつちやつた

といふので、或は略して「そひこん昔」ともいふさうだが、そのソヒコは卽ちソシコの發音差で、「それまで」もしくは「それだけ」の話といふこと、他の地方の「是つきり」なども同じであり、現に又甑島の中甑などでは、

……こんかぎいのむかアし

ともいふことになつて居る。卽ち「此限りの昔ぞ」といふ意味である。

五

他の九州海上の島々では、まだ詳しい調査が出來て居らぬが、對馬では

……とうすんだ

豐岐では

……そうりぎり

と言ふのが、昔話の一つの結び言葉である。後者は「それきり」で意味は明かであり、「とうすんだ」も古風な言ひ方で、今ならば「もうおしまひ」に該當するものと思ふ。

佐賀縣にも

……そいけん、こいでおしまひ

といふ形があるが、通例用ゐられてゐるのは、

……そいばつきや

……そいばつきや、もう知らん

といふのであり、又略してたゞバッキャと謂ひ、もしくはソガブンとも謂ふさうである。なほ同じ例は

……そいばつかし

もうおしまひ

長崎縣北高來郡

……そりばつかし

などにも見られるが、是が天草島に行くと大がゝりになつて

……そりばつかりのばくりうどん

……そりばつかりのばくりうどんの大きん玉

など〻謂つて居る。島原半島から報告せられた「こるばつかるばんねんどん云々」といふ奇拔な形も、斯ういふものから更に又一つの變化を重ねたものと見られる。

大分縣の速見郡は、九州としてはや〻變つて居て、

……昔かつぽ、米のだど

……もうすこす米ん團子

……すこす米ん團子、はよ食はにやひゆる

など〻いふ形がある。「昔かつぽ」は對岸中國地方には多いから、あちらのものを持込んだかと思はれ、米の團子は人間一生の終りに作るものだから、それでもうおしまひの意味に、使ふのだらうといふこちつけ說もあるさうだが、ほんの口拍子なのだから意味が有つた－却つてをかしい。モウスが昔話には似つかはしくなつて、或は「もう少し」と感じ米の團子などを取つて附けたのかも知れぬが、是は他の地方にもある形で、今にその古い文句に近いものが、比べて居るうちには出て來ようと思ふ。

……申すばつかり猿のつぺはきつかりきつかり　山口縣周防大島

……昔まつこう瀧まつこう、猿のつびやアぎんがり　高知縣長岡郡

……もうすべつたり釜のふた　島根縣鹿足美濃郡

……とんとすべつて釜のふた　同　上

……べつたりべつたりべたのふた。ひらは　山口縣阿武郡

大このすくひ込み

先づこの程度に段々と變つて行くものなので、さういふ中でも猿の尻だの、又は釜の蓋などのやうな思ひも掛けぬものが、何か動機があつて毎度援用せられるのである。

六

注意すべき全國の共通點は、豐岐でソーリギリといふのが岩手縣でもソレキリといふやうに、意味なり語勢なりの是と近いものが、どこに行つてもまだ少しづゝは殘つて、しかも追追に變らうとして居ることで、是を見ても簡單な形の方が古いといふことは言へると思ふ。島根縣の石見の方には話のしまひに、ポッチリ又はソレポッチリといふ例があるが、是も久しい間「是ばつかり」と謂つて居たのが、飽きて斯うも言ひかへたもののやうである。廣島縣安藝の山間部にも、トウカッチリと謂つて居る村が處々にある。狂言記に出て居る座頭の笑話の「どぶかつちり」、又は果無し話のどんぐりの實の話などが、是に影響して可笑味を添へて居ることは想像し得られるが、さう言ひ始めた元は「とうすんだ」などのトウと、是つきりといふ感じの語との結合らしい。さう想像する根據は同じ地方に、

……かつちりこ　　廣島縣山形郡

……もうし昔けつちりこ　　同　上

……けつちりこどちやうの目　　同　神石郡

があり、又一方には

……昔こつぷり　　同　山縣郡

……昔かつぷり泥鰌の目、とうらんけつつり　　同　比婆郡

……昔こつぷり蔦の葉　　同　上

……昔こつぷり泥鰌の目のくり玉　　同　神石郡

……昔こつぷりどちやうの目　　岡山縣阿哲郡

等があつて、それが山陰地方の「昔こつぽり」に繋がつて居るからである。

それから今一つ、「是で一昔」と謂つたやうな形もあつたかと思はれて、飛び離れて各地に行はれて居る。私の記憶するのは、

……これもこれも一昔　　岡山市附近

口拍子のをかしみ

……これも十年一昔　愛媛縣上浮穴郡

などで、後者は十年一昔といふことわざが、起つてから後の變化と見られる。或は又是が前のものと結合して、

……あと昔こつぶり　廣島縣双三郡

……一昔こつぶり　同　神石郡

……それがまつこう一昔　同　深安郡

ともなつて居り、遠く離れて岐阜縣の郡上郡にも

……それでちよつぴりきのこあし

などゝいふのが出來て居る。但し此地方の例は飛驒を除いては、まだ餘り多く知られて居ないから、現在は聯絡が明かになつて居らぬ。

七

『讃岐民俗』を見ると、瀬戸内海の島々には又一つの古さうな形がある。

……さうらへばく〳〵　香川縣志々島

……さうなさうらへばく〳〵　同　上

……さうぢやさうな候へばく〳〵　同　佐柳島

是が富山縣の「かたつてもかたらいでも候」と、系統を同じくすることは想像してよからう。區域が可なり弘いので、少なくとも一地の特發でないことだけはわかる。

……語つても語らいでも候の權八やつたと　富山市附近

……昔きつて候　富山縣中新川郡

……さうらいきり　石川縣能美郡

この終りのものは「候ひけり」であつたのを、やはり是限りの「きり」の方へ近づけて居る。關東では秩父の大瀧の山村にも「それだけ」といふ代りに

……それぶんきり

候ひけり

といふのがあり、どうやら白山々麓のサウライキリと、繋ぎがあるやうに思はれ、又越後岩船郡の三面村にも

……つゞきさうろ

といふのが殘つて居る。

飛騨は鈴木君や澤田君が、夙くから興味を以て集めて居るが、爰には他では聽かぬシャミシャツキリ云々といふ文句が、可なり奔放に發達して居る。尤も是はたゞ吉城郡の高原鄕と、大野郡の丹生川鄕との例のみで、西部の山間殊に白川の谷などはどうなつて居るか。それが判つて來たら面白いであらうが、今はまだ報告をした人がない。

……しやみしやつきり鉈づかぼつきり、藏の鍵ぴィん
……しやみしやつきり、稗がらばさごそ〳〵
……さみさつきり中ずりぽつきり、小便ぼろ〳〵
……さみさつきり中ずりぼうぎり、御話ようても茶菓子が無い
……しやみしやつきり燈臺がらり〳〵、茶碗の蓋ちやんちやらりん
……しやみしやつきりせんち板がた〳〵
……しやみしやつきり箒で掃いたらばらり〳〵

この文句の起りはまだどうも考へ附かれないが、とにかくにその色々の變化には共通點がある。どれも是も何等かの物の音であつて、それへ注意を向けさせて、もう話を打切らうといふ趣旨のやうにも解せられる。シャミは何であるか知らぬが、少なくともシャツキリはやはり「是つきり」のきりであらう。さうしてどの言葉も皆少しづゝの滑稽を帶びて居るのは、昔話は終りに近づくと共に段々と笑ふ話になり、もう切り上げるといふ際に斯ういふ長たらしい結びの言葉を、聲高に唱へることになつて居たので、一つ〳〵に是が附いたのでは多分あるまい。

八

それから愈ゝ前回に疑問にして居たドウビン三助の一聯を並べて見るが、この形式の分布

は思つて居たよりも廣い。

……とんびんからり　山形縣鶴岡市附近

……どんべからつこねつこ　同　最上郡

……とつびんばらりんさんしよのみ　秋田縣雄勝郡

……それきつてのとんびんばらり　同　平鹿郡

……とつびんばらりのぶう　同　仙北郡

等があるばかりか、今から百五十年前の岩手縣膽澤郡の農村にもトッピンハラリがあつたことは、菅江翁の「雪の膽澤邊」の記事にある。ハラリ又はカラリはやはり亦、是で全部といふことを意味して居たのであらう。山形縣の東田川郡で

……そんでとつびんからりイねえけえど

……とつびんからりんあどねえけえど

など〻謂つて居るのは、是だけでは何を言ふのかよくわからぬやうだが、ネェケェドは「もはや此以外には何も無いとさ」といふことらしい。其隣の最上郡眞室川などでは、

……とんびかんこ無いけど

……とんびんかんこ無いとは

とも謂つて居る。ナイトハは此地方で子供にもう斷念させる時の言葉である。

或は江戸にも是とやゝ似通うた文句が、曾ては行はれて居たのではないか。「茶壺に追はれてとつびんしやん」といふ子供詞の、何だか無上にをかしくて事柄のわからぬのは、其一つの痕跡のやうにも思はれるのだが、是は證明することが困難かも知れぬ。たゞ一つ同じ山形縣の北村山郡などで、

……どんびん三助猿まなく、猿のけッつさ牛蒡燒いてぶつつけろ。

といふのだけは、東京の惡太郎にもやゝ心當りがあり、同時に又「昔はまつこう猿の面はまつかいな」とも、隱れたる筋を引いて居る。實際我々の昔話の中では、猿は最もよく働く一役者であつた。普通はたゞ短くドンビンと謂つただけでも、話は終つたといふことを告げるには十分だつたが、愈〻夜が更けてもう子供に後ねだりをさせまいとすると、言葉が大げさになり、又屢〻猿が飛び出して來るのである。ドウビン三助の三助も或は猿かも知れない。

……どんびん三助猿まなく
猿のまなくに毛が生えた
けん〳〵毛抜きで抜いたれば
めん〳〵目つこになりました

といふやうな、長いものも同じ地方にはあつて、是などはよほど今日の所謂童謡の香がする。恐らくは何某先生作詞といふやうな新らしいものであらう。それと比べると昔なつかしいのは、藤原無想翁の記憶して居られた、仙北生保内村の「錦の長者」の結びに、

……錦の長者とよーばれた
よーびも呼んだしよーばれた
それきてとつびんばらりんぷん

といふのがある。斯ういふ風になると形はよく整うて居る。更に是から北の方の村々に、弘く行はれて居るといふトッチバレなども、元は或は同じやうな語り方があつたのかも知れぬが、今はたゞ各地の殘留を比べて見て、その變化の跡を想像するばかりである。

……それきつてどつとはれア　青森縣三戸郡
……それきりどつとはらい　岩手縣岩手郡
……どつとはらえ　同　九戸郡
……どつとわらえ　同　上
……どつとわれえア　同上閉伊郡

青森岩手二縣は殆と全區域に、この系統の文句　行き渡つて居るが、もう其意味を知つて使ふ人は無いやうに思はれる。ドットワラエと言ひかへて居る土地などでは、或は又新たなる「笑へ」といふやうな解釋が始まつて居るかも知れぬ。

九

あまりこま〳〵と煩はしいが、次にもう一つだけ、以前文字を知る階級の間に、是が最も標準的なものと見られて居た、

錦の長者

……それで市が榮えた

といふ結びの言葉が、今はどうなつて居るかを考へて見たい。「市が榮えた」は亦一つの改定であつて、本來は「いちご榮えた」、即ち昔話の主人公が長者となり、一期滿々と繁昌したといふことで、多くの物語の「めでたし〳〵」も同じであつたらうことは前にも述べたが、地方の多くの變化も大體にそれを證據立てゝ居る。新潟と宮城の二縣には、殊に其痕跡が多い。鳥取縣の八頭郡などにも、

……一ごさんごくらえた

といふものがあるさうだが、越後の西頸城郡などは更に原形に近く、

……いちごさかえたぞ

といひ、又はそれをやゝをかしく、

……えちやぽんとさかえた

とも謂ふのは、「さかえた」が口語から消え去つて、それを「裂けた」の意に取る人が多くなつたからであらう。東頸城郡に移ると簡單に、

……えちやおえた

……えちやばらり

……えちやぽん

といふ者が多くなり、更に中蒲原郡に於ては、

……いちごぶらんとさがつた

……いちごさんがいた、ぶらりとさがつた

といふ風にも變つてゐる。佐渡の島では

……それでいつちようはんじようさけたとさ

……いつちようはんじようさけたとさ

といふやうな形を存し、又は全く言ひ方をかへて、

……一生安樂に暮らしたとさ

といふこともあるさうだから、此島だけはまだ古い感じが殘つて居るのである。

宮城縣は仙臺で何と言ふか、まだ聽いて見たことが無いが、それから以北はほゞ陸中の下

ンドハラヒの堺まで、似たやうな文句が流布して居る。それを一列に並べて見ると、

……是でよんつこもんつこさげたのさ　宮城縣桃生郡
……これでまん〳〵ときまつたのさ　同　栗原郡
……いんちこまん〳〵さかえた　岩手縣東磐井郡
……いんつこもんつこさかえた　同　西磐井郡
……いんちくもんちくさかえた　同郡一ノ關

是等隣接各郡の僅かづゝの差異は、もう少し細かな採集によつて、やがて其推移の跡を明かにし得るだらうが、是だけから見ても、最初は「それで一期滿々と榮えた」と謂つたものが、意味が不明になり語音の印象のみ強く、次第に斯ういふ變化を遂げたことがほゞ推測せられる。さうして是が又一生をイチゴと謂つて居た時代の、新たな思ひ付きであつたことも先づ明かで、其以前はやはり最も平凡な「これだけ」「これきり」の形を、ほんの僅かづゝの言ひかへを以て、守り續けて居たのではないかと思ふ。

我々はまだ見究めることが出來ないが、或は是が同時に昔話全體の語り方の、地方差を伴なうて居るのかも知れず、もつと進んでは前代の交通と、文化浸潤の經路を示すものかも知れない。ちやうどこの新舊樣式の交錯する陸中水澤のあたりには、

……この話誰が聞いた、猫と鼠が棚の隅できいた

といふ樣な、グリムの說話集にでも有りさうな結びの文句もあるといふことを、森口多里君は言つて居られる。東西偶然に斯ういつた奇拔な形が併存して居るとすると、是は又一つの興味深い問題になるが、自分の耳に觸れた限り、他ではまだ類例に出逢つて居ない。之に反して、

……ちやうどほんの昔ばなし、それで慾はせんもんぢや　兵庫縣氷上郡

もしくは「だから人の眞似はするもんぢやないと」といふ類の、訓誡の辭を以て昔話の結末とする例は、全國到る處に今は流布して居り、動機は明白であり聽手の誰であつたかも大よそわかる。既に中世の記錄に筆せられたものがあつても、是が最初からの形を保存したものでないことは、認めずには居られまいと思ふ。

一〇

最後に昔話の中間の受け返事、即ち忠實に耳を傾けて居ることを表示する「あひの手」の言葉も、色々有る筈だが今はまだ僅かしか知られて居ない。是は恐らくは簡單なものが多い故に、改廢も容易であり、又普通の用語と一致することになつて、いつしか方式だといふことを思はなくなつたのであらう。現在列擧し得るのは宮城縣の南部、白石大川原の附近に殘つて居るゲン又はゲイ、是は昔話以外には用ゐず、昔話のこたへとしては子供までがさういふので、定まつた形だといふことが知れるが、本來は亦一つ常用語であつて、今でも德島縣の木頭（きとう）の山間などには、ゲイは傾聽を意味する感動詞として行はれて居る。以前はゲニといふのが普通で、文藝には屢〻「實に」の文字を宛てゝ居た。相手の言ふことを是認する場合が多いから、實にと解しても誤りはなかつたらうが、なほ語原は明かでは無いのである。

次には佐渡の島では一般に、サソといふのが昔話を聽く者の合槌の言葉で、それで又「サソを繼ぐ」といふと、身を入れて話を聽いて居ることを意味する。是も「嘸」などの新字を宛てた「さぞあるらん」のサソであつたらうが、今はもう其本意を忘れた者も多いかと思はれ、サースともセースとも謂つて後をせがむ者もあり、村によつてはチャソウだのチャだのといふ子供があるさうである。

東北の田舍にも、このサソのまだ殘つて居る土地が有るといふことだが、たしかにどの邊でといふことを言ふことが出來ない。岩手縣の西磐井郡などではハーリヤ又はハート、前者は「あれは」に輕い驚きのハァを副へたもの、ハートは再びそれから分化したものかとも思ふ。自然に任せて置いても斯んな語を出すかも知れぬから、是を方式とまでは見なされぬやうだが、飛驒の吉城郡などのヘントといふ語に至つては、昔話には必ず伴なひ、昔話の外には稀にも用ゐられない。さうして元は之を聽く兒童に、ヘントといふものだと敎へたこともあるさうである。しかもその起りは東京の女たちが、深く感じた場合に發するヘーエなどと、別のものであつたらうとも私には考へられない。

話を聽く子供が其さきを催促するのに、秋田縣の大曲あたりでは、ソレカラシタバヨと謂

ふのが例であつた。シタベヨは寧ろ話者の語りを繋ぐ爲の「さうしたれば」を採つて用ゐたもので、是もまた古くからの形のまゝで無かつたのである。我々の間でも今はどうなつて居るか知らぬが、曾てはウンソレカラといふのが普通であつた。昔話以外の受け返事に、さうは言つてはならぬ者までが、きまつて此文句を使用したのだから又一つの方式だつたとも見られる。九州の南の方でもウンと謂へ、オウとかハイとかは謂はぬものだと教へられたといふことだが、果してさうであつたらうかどうか。

野村傳四君の『昔話研究』(一卷八號)に報告せられた、大隅肝屬郡の昔話などは、今から四十年ばかり前までは、必ず最初に先づ次のやうな問答をしたものださうである。

とんとある話。あつたか無かつたは知らねども、昔のことなれば無かつた事もあつたにして聽かねばならぬ。よいか

之に對して相手の少年に、ウンといふ返事をさせて後に、始めて昔々と語り出したものださうである。是とよく似た例は薩摩の海上、黑島といふ小さな島にもあつて、

さる昔、ありしか無かりしかは知らねども、あつたとして聽かねばならぬぞよ

と、言ひ渡すことになつて居たと、『古代村落の研究』には報じて居る。私などの見る所では「さる昔」だの「とんと昔」だのといふ發語は、中世昔語りが純然たる民間文藝となつて後に、新たに採用せられた形式に違ひない。それにこの樣な信じて聽くべしと言はぬばかりの、改まつた誓約をさせることは、明かに一方のゲナ・サウナ・デアツタトといふ類の語り方と撞着する。しかも斯ういふ兩立し難いものゝ中から、或は嚴肅なる神話時代の殘留を探り當てる望みを、今日になつてもまだ抱くことが出來るのかも知れない。今日東北の兒童が「うそ昔」と稱して非常にいやがつて居るものは、個人が製作した新らしい昔話であつた。古くからある昔話はゲナでもトサでも、なほ彼等の爲には眞實なものであつた。

(昭和十七年三月)

猿と蟹

一

説話と所謂説話文學との關係に就いて、人が折々誤つた速斷をすることは日本だけでは無い。たつた一つの古い記錄以外、別に何等資料も手に入らぬといふ場合、是を全國共通の昔話の定まつた形とし、甚だしきは古來斯くの如しと見ようとすることは、書物に信賴する永年の慣行を考へると、些しでも不自然な弱點だとはいふことが出來ない。しかも國によつてはこの誤りに、心づく機會が中々得られないこともある。我々の後世から非難せられなければならないのは、現に立派に幾つかの異なる資料が出揃ひ、昔話は人により時と處とにつれて、無心にも又有心にも、次々語りかへられて居たことがちやんと判つて居りながら、なほ

この前々からの考へ方を改めようとしない點にある。是では一國の文化の重要な一項目が、いつになつても正しく理解せられる見込が立たぬだけで無く、折角亡失を免れた前人の勞苦の跡までが、無用か又は有害にしか利用せられないことになると思ふ。此意見を實例によつて説明する爲に、最も有りふれたる猿蟹合戰の話をする。

二

江戸では馬琴の燕石襍誌が出るよりも又數十年前から、蟹の仇討となつて此話は傳はつて居た。猿が木の上から柿の實を打つけて、甲羅を潰されて蟹は死ぬ。その子蟹が集まつて仇討の相談をする。又は親蟹が大怪我をして穴へ戻つて死ぬと、其腹から生れ出た子蟹が、成長して仇討に出かけるなど〻、少しでも自然を觀察した者ならば、承知をすまいと思はれる形にさへなつて居る。此點たつた一つから見ても、是が都會の產物だといふことは察せられるのである。現在是と同じ話の採錄せられて居るのは、甲州と越後と佐渡、是以外にも探せば勿論あらう。京都大阪の町方を始めとし、田舍でも私などの聽いて居たのは是で、何だか其通りでないのはにせ物のやうな氣がして居たが、是は赤本類の次々の普及の結果だから、ちつとでも不思議は無い。其上に人は童話の眞實から遠いことを氣にかけぬのみか、寧ろ斯ういふ根も葉も無いほどの虛誕を、子供に向くものとして歡迎して居たらしいのである。

猿蟹合戰といふ大袈裟な名稱も、或は一つの時代の流行かぶれかとも考へられる。鳥獸草木はいふに及ばず、時には臺所道具にまでも鎧を着せて、戰をさせるやうな文藝さへあつたのだから、單なる二種の動物の喧嘩を合戰と呼んだのも自發では無かつたかも知れぬ。しかし是に比べても、蟹の一子の復讐といふのは大きな改作であつた。其根源に溯ると永い期間の會我流行、もしくはそれから追々に目先をかへたかと思はれる奥州白石噺、田宮坊太郎といふ類の影響も、たしかに原因の一つとは考へられるが、なほそればかりでは是までの變化が、爲し遂げられようとも思はれない。それには今一つ都市の人々が、あの頃はまだ知つて居て後には忘れてしまつた昔話が、背後にあつたらうといふことが想像せられるのである。

東北地方の二三箇所で採集せられて居る「雀の仇討」といふのが、何よりも近代の猿蟹話と

近い。こゝでは敵は山母であり又は鬼婆であつて、其惡虐が猿よりは何倍か烈しい。雀の親が籔の中で巣を作り、一生懸命に卵を溫めて居るところへ、何度もやつて來ては卵をねだり取つて食ひ、愈〻最後には其親雀まで裂いて食つてしまふのである。其時たゞ一つだけ巣からこぼれて籔の底に落ちて居た卵が、かへつて小雀となり、それが成長して親の讎を打ちに出掛ける。其支度としてあちらの稻架から一房、こちらの架から一房と稻穗を集めて來て、團子をこしらへて之を背に負ひ、途々それを配つて栃の實以下の助太刀を求める。其同勢中に蟹が加はつて居るのも注意すべき一事實である。是とやゝ似た話は栃木縣の東部にもあつた。こゝでは惡者は山姥で無くて猿になつて居る。猿が雀の卵を取つて食ふといふのは少しをかしいが、とにかくまだ親雀までは食はれてしまはぬうちに、鴉が助太刀にやつて來て猿を撃退するので、從つて又仇討では無いのである。猿は怒つて其時から面が赤くなり、鴉のアホウ〳〵と啼くのもそれからだといふ由來譚が附いて居る。

此昔話の一地方で發生したものでない證據には、廣島縣の幾つかの郡内にも、大よそ同じ形を以て行はれて居る。敵は鬼であり、討つ者は雀又はシヨウト(頰白)であるが、是は忘れがたみの一子では無くて、子どもを鬼に食はれた親雀の方になつて居る。やはり黍團子を用意の兵糧として、栗・蜂・臼・牛の糞等の珍らしい同勢を糾合し、鬼を退治に行く點は奥州と似て居る。鬼といふ方が前の型かと思ふが、是とても變化があつたらしく、爰では臼の挽木の穴の中に、もしくは地藏樣の耳の中に、雀が子を孵したといふことになつて居て、最初から第三者の干與があるので結末がうまくついて居ない。鬼の强慾で次から次へ、飽くことなき要求をするといふ點に、最も力を入れて語るのは牛方山姥といふ昔話であるが、普通にはその牛方が遁げて山姥の家に潜んで、復讎をしたことになつて居る。ところが豐前地方にあつた一つの例では、其被害者の馬方の子供が、女房に黍團子をこしらへて貰つて、山爺の處へ仇討に行くことになつて居り、是も助太刀は栗・針・石臼・粘土等で、其中には蟹も一役買つて出て居る。或は又オロンコロンが黍團子を持つて、丹波の篠山へ親の敵を打ちに行くといふ話も同じ地方にはある。敵は山姥で助太刀は栗・蜂・臼・牛だが、どうして仇打に行くのか不明であり、オロンコロンの素性も一向にわからない、斯うなると愈〻以て桃太郎の方に話は近いのである。

三

それから今一つ現在の猿蟹話に於て、子供でも訝かしく思ふであらうことは、猿が柿の實に對して貪慾なことはよくわかつてゐるが、蟹がどういふわけで其樣に喧嘩をする迄に、是に愛着して居たかといふ點である。埼玉縣下の多くの例で見るやうに、單なる猿蟹の合戰で子蟹の仇討などは說かぬものでも、なほ葛藤の發端を柿の種と握飯との交換、及び柿の實收穫の不自由に置いて居り、九州の北部にも是とは又獨立して、幾つもの柿爭ひの話があるのだが、私の想像では是は明かに後のさし替へであつて、餅としたもの〻方がその一つ前から有つた。其改作の動機としては、勿論一方の役者を猿としたことも考へられるが、他の一方には蟹の擧動、即ち二つの手を高く擧げて合せ、恰も何事かを祈念するやうに見えるところから、浮び出た空想も加はつて居て、それに多分もと別の話があつたのが、融合してしまつたものであらう。小學讀本などには猿の淺慮、蟹の忍耐又は先見の明ともいふべき點のみが

力說せられて居るが、どこでも此話を耳で聽いたほどの子供には、必ず印象深く覺えて居る文句があつた。私などの鄕里では「芽が出にやつめきろ」といふのであつたが、到る處で是を方言に譯し、通例は三段三度に繰返すことになつて居る。念の爲にその二三を竝べて見ると、續甲斐昔話集の話では、

生いない、ほじくるぞ
太くならない、はさみ切る
ならない、ぶつ切るぞ

是を各々二度づゝ唱へ、それを聽いて柿の木が芽を出し、成長し、又實のつたことになつて居る。佐渡の片邊でも

生ふらずか、鋏みきらう
太らずか、はさみ切らう
成らずか、はさみ切らう

と順々に言ふとあり、越後南蒲原郡でも之に近い唱へごとがある。九州の猿蟹の柿話など

蟹の唱へごと

は、結末が全く異なるにも拘らず、やはり

生えにや踏みしやぐ〳〵
ならにや切る〳〵
うれんとこつきる〳〵

など〻筑後の三井郡では謂ひ、更に隣の八女郡の方では

太れ〳〵、太らんとはさみ切る
なれ〳〵、ならんと鋏みきる
うれろ〳〵、うれんとはさみ切る

と謂つたとも語られて居る。是を聽いて誰でも思ひ合せるのは、今も全國の各地で正月十五日の朝、もしくは其前夜に果樹の下に行つて、強ひて其年の豐熟を約束させる呪法で、是にも亦多くは小兒が參加して居る。柿の種は彼等の知つて居る限りの最も無價値のもので、何かと言ふとそれを戯れの言葉にも使ひ、又天狗を騙して隱れ蓑笠と交換したといふ笑話などもある。それを承知の上で握飯を以て是に換へ、斯んな呪ひの語をもつて早い收穫を擧げた

といふ話があつたとしたら、是だけでも十分に子供は笑ふことが出來たであらう。だから私などはさういふ一話が、曾て獨立して別に存し、それが猿蟹の合戰など〻いふ話と、複合したかとも想像するのである。

九州の諸處で採錄せられて居る猿蟹話などは、合戰とも言へないほどに結末がたわいなく、或は寧ろこの交換の成功といふ點に、話の中心が置かれて居たとも見られる。何處のも大抵同じだからほんの一二の例を引くに止めるが、此話を知つて居る土地は中々多いのである。蟹は折角柿の實をうんとならせたが、木登りが不調法で取ることが出來ない。そこで猿が代つて登つて勝手にもいで食ひ、下から蟹が催促をすると、

帶ども食はさい、核ども食はさい

と謂つて、種子や喰ひかけばかり、投げ下すといふ點は江戸の話と同じだが、それから後は全然別のものである。蟹は一計を案じて猿に向ひ、おまへの父さんは逆さになつて降ることが上手であつた。お前にはそれが出來るかなといふと、猿は調子者だから早速それをやつて見せようとして、懐から柿の實を皆落してしまふ。それを拾ひ集めて穴の中に持込んで、一

人で蟹が食つて居る。或は又、袋に柿を入れて枝の上に置き、ゆすぶつて見なさい面白いからといふと、猿が騙されて袋を下に落したとも謂ひ、或は樹の傍に穴を掘つて置いて、騙して柿を落させて皆其穴に持込んだと謂ふ者もある。とにかくに今度は猿が穴の口に來て俺にも少し分けてやれと謂ふと、蟹が口眞似をして「蓆ども食はさい云々」を繰返す光景は、聽手を笑はせるに十分な力があつた樣である。是で復讐もすみ結末もついて居ると思ふのだが、九州の話には何れもなほ其續きがある。猿が大いにくやしがつて、穴の口へ尻をもつて來て、汚ないものを垂れ込むと謂つて脅すと、蟹はすかさず其鋏を以て尻をはさみ、毛を拐り取つて猿を敗北させる。もしくは猿が尻の毛を遺つて堪忍してもらふ。それ故に今でも猿の尻は毛が無くて赤い。もしくは山蟹の兩の爪には毛が生えて居るのだといふ風な、由來譚が附いて居るのである。我々のまだ說明し得ない理由によつて、古い昔話には屢ゝこの「事の由」が附いて居る。或は逆に Why So Stories とも謂つて、物の起りを說明するやうに話が出來て居る。是だけは日本でも竹取物語もしくは其以前から、中代の所謂本地ものにも其片端を現はして居て、本を讀む人たちも皆知つて居られる。事々しく爰に辯ずる必要も無いことである。

四

自分が新たに述べて見たいと思ふ點は、この柿の實と全く一つの話が、同じ九州でも半分は餅の爭ひとなつて行はれて居ることである。たとへば私の持つて居る寫本の福岡縣昔話集を見ても、前に擧げた三井八女の二郡、筑前の糸島郡などで採集せられたものは柿であり、「ならぬと鋏み切る」の呪文を伴なうて居るが、其他の多くの郡、殊に豐前の三郡のものは皆餅で、猿が餅の袋をつかんで柿の木の上に登つて一人で食ふとあり、それから後の蟹の計略、猿の降參の段は双方同じである。他の地方をざつと見渡しても、大分縣速見郡の猿は澁柿を樹下の蟹に打付け、鹿兒島縣肝屬郡の蟹は、餅を枝に載せてゆさぶりながら食ふとうまいと謂つて猿を騙す。肥前下五島では、柿の木に登つて柿を食つて居る猿を羨んで、ぶらんこをすると柿がうまくなると欺いて、こぼれ落ちる柿を蟹が拾ひ集めるといふに對して、壹

岐島では猿が餅を木の枝に引掛けて、蟹を羨ましがらせようとするうちに、餅を落して穴の中へ運び込まれてしまふ。さうして結局長い尻尾を切取られ、乃至尻の毛を蟹に取られてしまふのは一樣に猿である。勿論餅の方の話になると、柿の種交換の發端は有り得ないが、それの代りになる部分も九州は略一致し、又他の地方のとも明白なる聯絡がある。鹿兒島附近では是を猿と蟹の寄合餅といひ、豐前京都郡では餅ビカリとも謂つてゐる。兩名申し合せて刈田に出て穗を拾ひ、又は小豆拾ひに出かける。愈〻餅を搗くといふ段になつて、最も數多い例では蟹を山へ杵代りに遣り、一度伐つて來たのを此杵は歪んで居るからだめだと謂つて又伐りに出し、其間に一人で曲つた杵で搗いてしまふ。其餅を袋に入れて持つて木に登つて食つて居るのである。斯ういふ不埒な猿だから始めから同情が無い。結局は穴の口での喧嘩となつて、「毛くりゆう〳〵」と毛を出して宥してもらつたと佐賀附近では謂ひ、或は此時から毛が三本足りなくなつたと、阿蘇地方では謂ふのである。猿の尻はなぜ赤いの說明なども、餅爭ひの話の終りにも附けば、又全く別の昔話の結末ともなつて居る。是を伴なうて居る故に、柿の實の話が古いとは無論言へないのである。猿が横着で蟹が機敏であつたといふ、元の形はそつくりとして置いて、餅と杵との部分を柿の種の成長したといふ話に、置きかへる位のことは誰にでも出來たのである。

この二つを根原相異なるものと見ることは不可能であると共に、同時に並び生れたと見ることも恐らくは六つかしいであらう。柿と蟹とでは如何にも緣が遠く、何か今一つの引掛りが無いと、是を猿との合戰の原因には、もつて來られなかつたらうと思はれるからである。そんなら餅ならば猿が好むかといふ詰問も有るか知らぬが、それには又相應の順序と沿革とがわかつてゐるのである。しかし其問題に入るに先だつて、今一つ考へて見なければならぬことがある。話は少しばかり九州の方に偏して居たが、この柿の實を猿から奪ひ返すといふ話は、必ずしもかの地方だけの特產ではなく、蟹の仇討話の早くから出來て居た東京の近くにも、同じ形の語り方が可なり廣く分布してゐる。埼玉縣鄕土研究資料を見ると、南は北足立から北端は大里秩父まで、各郡ともに略同樣の形であり、近頃世に出た川越地方昔話集にも、よく似た話ばかりが幾つも報告せられて居る。此縣下の猿蟹話に於ては、爭奪の目的物がすべて柿の實であつて、前段は最も九州のそれと近く、たゞ後段が甚だしくちがつて居

る。蟹は一計を案じて樹上の猿を欺き、昔の猿は逆さ降りがよく出來たが、今の猿たちにはそれが出來ないと獨り言のやうにつぶやくと、之を聽いてのこ〳〵と猿は木から逆さに下りて來る。懐の柿が皆こぼれ落ちたのを早速に拾ひ集め、穴に持つて入つて何と言つても分けてくれない。そこで猿は大いに憤慨し、よし〳〵覺えて居れ、今夜は夜盗に入つて蟹なんかの甲羅を敲き潰してくれると謂つて行く。蟹が心細くなつてしく〳〵と泣いて居る處へ、色々の物が見舞に來て話を聽いて助太刀を約束するのである。其連中が土地によつて少しづゝ皆ちがひ、たとへば秩父ではひよう〳〵栗と疊針と立臼と熊ん蜂、北埼玉郡では蜂と臼と卵と水で、水がお猿に水を掛けることにもなつて居るが、何れも幼童でも聽いて其取合せの奇拔に驚くやうなものばかりであつて、此等が合同してうんと猿をいぢめ、結局毛を拔き又は尻尾の長いのを切つて、それから今のやうな形の猿になつたといふ點は皆同じく、素より子蟹の仇討などの沙汰は無いのである。たつた荒川の一つの流れを隔てゝも、先づ是ほどにもちがつて民間の話は傳はつて居る。それが遠方の九州や奥羽各地と、たとへ一部分にもせよ爭はれない一致があるといふのは、是は又何等かのわけが無くてはならぬことで、今まで知らずに居た燕石襍誌一流の研究家が、何と之を說明するだらうかは私には寧ろ興味がある。

東北各地の猿蟹合戰の話を、この埼玉縣の諸例と比べ合せて見ると、是は又九州の方とちがつて居る點ばかりが主として一致し、しかも其東北と九州の間では、埼玉地方に無い部分ばかりがよく似て居る。目に立つ特徵だけを拾つて言へば、先づ第一に喧嘩のもとになつた柿の實と餅、是が九州には二つともあつて結末全く同じく、埼玉地方では柿ばかり、東北は餅の方が幾らもあつて、柿を爭ふといふ話は一向に見當らない。柿が自分の想像のやうに、比較的新たな趣向であり流行であるとすれば、是は說明がつくのである。次には猿が失敗し閉口しただけで話を打切らず、更に合戰と呼んでもよいやうな、大がゝりな攻擊に移る段は、九州にも全く無いわけではないが、それの猿蟹の話に伴なつて語られる例は、少なくとも私はまだ聽いたことが無い。それが中央から東の方に來ると、臼蜂栗等の助太刀は、必ず猿蟹の合戰に伴なふべきものと認められ、たま〳〵離れた土地で蟹以外の主人公の登場するものがあれば、其方を却つて作り替への如く、見るやうな傾向を生じて居るのである。是がそも〳〵の誤りの元かと、自分などは思つて居る。

五

此點にかけては奥州の猿蟹話は、たつた一つの柿と餅との差を除いて、實によく埼玉縣下に普及するものと似通うて居る。發端は幾分か九州の曲つた杵よりも込入つて居るが、是も兩名の者が山の上で寄合餅を搗くのである。紫波郡昔話などに見えて居るのは、猿が其餅を獨りで食つてやらうとたくらんで、もういゝ加減に搗けたと思ふ頃に、杵で餅臼の端をどんと突くと、臼はごろ〳〵と谷間に轉がり落ちて行く。それを止める顏して猿は飛んで行き、蟹はどうせ取られてしまつたものと諦めてそろ〳〵と山を下ると、豈はからんや餅は中途の木の根に引掛かつて居て、猿の追掛けて行つたのは空の臼であつた。大喜びでそれを一人で賞味して居る處へ、がつかりした樣子で猿が上つて來る。こゝに子供でも笑ふやうな猿と蟹の問答があつたらしいが、其先がまだ附いて居る爲に、大抵は半分ほどに省略せられて居る。猿は色々と蟹の機嫌を取るのだが、何と言つても其餅を分けてくれない。そこで大いに

怒つて覺えて居ろ、今夜夜盗に行くからさう思へと謂つて山へ入つてしまつた。餅は腹一杯食つたものゝ蟹は心配でたまらない。家へ歸つて來ておい〳〵泣いて居ると、例の如く雌鷄に針、牛だの臼だのがやつて來て、蟹どの蟹どのなしてさう泣いて居ると、仔細を尋ねて何れも加勢を約束するのである、さうして此話では蟹も鋏を研いで水甕の中の一役を持ち、結局は猿を殺して猿汁を一同で食つたことになつて居る。

是と殆と同じやうな話が、秋田縣の鹿角郡でも（第一昔話號）、又津輕地方でも採集せられて居るが（津輕口碑集）、元來は二つの話の繋ぎ合せであつたことが、繼ぎ目が有るので誰にでも容易に察せられる。さうして又この話の前段だけを以て終るものが、數も種類も多く、地域に於ても遙かに弘いのである。主人公は必ずしも猿と蟹とには限らぬが二つの動物が約束をして、寄合田を耕作し又は穗拾ひをして寄合餅を搗く、一方が横着で色々の口實を構へて勤勞を他の一方に押付け、餅搗きになると出て來て又獨占しようと企てる。臼轉がしは殊に光景の繪になるやうな話方である故に人望があつた。是には兎といふ例も幾つかあるが、猿とした方が擧動が似つかはしかつたのかと思はれる。猿は谷底まで空の臼に附いて行き、失望

してのこ〳〵登つて來る。取つた者が勝といふ約束だから文句をつけることが出來ない。それでぢつと見て居て「蟹どん〳〵、そこは木の葉が附いて居るに、こつちの方から食つたらどうか」などゝいふと、

木の葉が附いてゝも土が附いてゝも、おつぱらひ吹つぱらひ食へばうまうござると答へたといひ、又は

上から食はうと下から食はうと、蟹が餅は蟹が勝手よ

と謂つたなどゝ、土地相應の皮肉な挨拶をしたことになつて居る。子供には或は此淡々たるユウモアが、さとりにくい場合もあつたのであらう。更に一歩を進めてちつとばかり分けてくれといひ、そうら遣るぞと投げてくれた餅が、顏にくつゝいて剝がすと皮がむけ、それで猿の面は赤いのだと謂つたり、どうしてもくれないので怒つて背中を踏み、それからあの通り平たくなつたと蟇の場合には話し、或は兎の場合だとくやしくて傍の木の皮をかぢつたとか、餘り走つたので足がすり切れて短くなつたとか、色々の至つて平易な笑ひを其後に取附けて居る。九州の猿蟹話の結末も無論その一つの方式の著名になつたものであつたらうが、蜂・栃・臼・牛糞その他の助太刀の話とても、決して最初から是に附いて成長したものでは無かつたのである。兒童に取つては稍もの足りない結末を補充する爲に、今まで用ゐて居た平凡なる猿の尾、猿の面の由來譚の代りに、新たに外から斯んなものを持つて來て、變化の興味を加へようとした計畫がどこかに有つたので、或は是を童話發達の一段階に、算へる人があつても私は强ひて反對をしない。

六

そこで暫く方面をかへて、今度は二三鄰接民族の間に行はれて居る昔話を問題にして見たい。一昨年五月に英譯せられた獨逸人エーベルハルトの支那民話集を讀んで見ると、其中に廣東省の某地から採集したといふヌングアマの話といふのがある。話の發端は日本でいふ牛方山姥、又西洋の赤頭巾などゝやゝ似て居る。或一人の女が餅を持つて道を通ると、此名の怖ろしい鬼が出て來て其餅を食はせろといふ。親の處へ持つて行くのだから遣れないと斷は

ると、よし〳〵それでは今夜、おまへを食ひに行くからさう思へといふので、女は恐ろしさに堪へず、家に遁げ歸つて泣いて居る。そこを通りかゝつた小間物商人が、何を泣いて居ますかと近よつて來てわけを問ひ、それではと言つて二十本の針をくれ、それを戸に挿して置けと謂つた。次には家畜の糞を拾つてあるく者が通つて、同じ問答の後に若干の糞をくれて、入口に塗つて置けば鬼が滑るからと教へてくれる。次には同樣にして蛇賣りが蛇を二匹、之を水甕の中に放して置けば、鬼が來て手を洗ふからきつと咬まれるといふ。次には魚賣りが通つて是も人を螫す圓魚といふ魚を二尾くれる。其次には卵賣りが卵、臼屋が臼、何れも商人が之を女に贈與したことになつて居て、物が自身で來て援けたといふ程には奇拔で無いが、其等を適當に配置して大敵に意外な逆襲を食はせ、あべこべに之を退治したといふ順序は我邦と同じである。商人を仲に立てたのは、單に幾分の現實味を添へんが爲としか思はれない。だから是がもし今數年も後に採集せられたのだつたら、或は日本の兵士が彼地に滯留して居る間に、村の兒童に教へたのだといふやうな、想像説も成立つたかも知れぬのである。

ところが同じ話は南支那だけで無く、全く方角ちがひな處にも既にあつた。鳥居きみ子刀自の集めて來られた蒙古の童話といふものが、「旅と傳説」（九卷四號）に出て居るが、其中には四人の娘の母が、餅を持つて夜歸る路で鬼婆に食はれ、其鬼が母に化けて家に來て戸を叩くといふ、日本では「天道樣金の綱」といふ話と、發端の全く一つなるものがある。是は警戒して戸を開けなかつたので、そんなら明晩來ると謂つて鬼が歸つて行く、それが怖ろしさに四人で集まつて泣いて居ると、そこへ卵と石臼と鋏と針と豚とが、順次に通りかゝつて助太刀を約束し、其晩再びやつて來た鬼婆を退治してしまふことは、悉く我々の猿蟹合戰と合致するのみか、姉妹が爐の火で餅を燒いて居る香を嗅いで、それを一つ下されば と協力の條件にする點までが附いて居るのである。蒙古とあつては是が向ふの人が學んだとも、又は日本へ輸入せられたとも、言ひ雜いことは共に同じであるが、さて現在のところではまだ何分にも、此一致の原因を考へ出すことが出來ぬのである。

しかし其うちには少しづゝ、判つて來る望みが有ると思つて居る。たとへば孫晋泰君の集めた朝鮮民譚集に、慶南馬山府で聽いたといふ惡虎懲治の一話がある。是などは一つだけ引

離しては、まだ同じ話の變化とも言ひ切れないが、將來もし半島各地の傳承が比較し得られる時が來れば、系統は追々に明かになると思ふ。この惡虎の話に於ては、老婆は前々から虎と知合ひである。明日の晩は粥を食はせるから來いと招いて置いて、晝の中に炭火・唐辛子の粉・針・牛糞・乾し蕗・背負梯子といふ類の、手近の物ばかりを助太刀に用意する。それが皆人のやうによく働いて、順序よく虎を退治してしまふので、こゝには弱者に同情するといふが如き、意外の物の義俠心は全く現はれて居ないのだが、斯ういふ老婆の裏切といふ類の話も、捜せばまだ日本にも絶無ではない。續甲斐昔話集の「蟹の仇討」話二つを見て不審に思つて居たことは、爰では同勢が猿の家に攻めて行くと、そこには猿のお婆が火じろに當つて一人留守して居る。やがて主が歸つて來て、待伏せをして居た栗がはね、蜂が螫し針が突くといふ際にも、それを妨げぬばかりか脇から口を添へて、猿を次々の危險の方へ向はせるのである。現在の猿蟹合戰に至つは、斯んなお婆は少くも用が無い。それが出て來て一役を持つて居る所に、何かもう一つ以前の異なる話し方が、痕跡を遺して居ることが察せられるのである。澤山の類例を竝べて見て、蟹に助太刀をした者の等類の、大よそきまつて居たことは誰にでも認められるが、是とても土地毎に顔ぶれはちがつて居る。この一つの點からでも斷言し得るやうに、此話は休みも無く變化して居たのである。形が古風だから最初から此通りであつた如く思つてかゝることが誤解のもとである。

七

我々日本人の生活ぶりには、對岸大陸の諸民族と、傾向を一にするものが有るのではあらうが、之を見現はすことはまだ中々容易で無い。たま〳〵文化の外貌の似たものがあるかと思ふと、それは明かに文籍によつて、彼から學んだものであつたりする。さういふ中に於て根源も詳かならず、或は双方の偶合ではないかとさへ思はれる昔話がたつた一つ、是だけ爭ひ難い一致を示して居るといふことは、重要な現象だと私は思ふ。是非ともどうして斯くあるかを突止める必要があるのである。輸入舶來といふ説明は氣が樂でよいやうなものだが、證據を見つけることの不可能なるは勿論、いつ頃どういふ人がどんな機會にといふことを、

想像して見ることも實は容易でない。是が長崎平戸とか坊津とかの附近に、特に濃く殘つたといふのなら格別、現に全國の隅々にまで擴がつて居るのである。さういふ運搬と分配は唐藥や唐織物でも出來なかつた。賣らうといふ品すら買ふ力の無い者の手には入らず、又入用を感じなければ無いも同じであつた。是をたま〳〵入口がたつた一つ、開いて居たといふだけの理由を以て、採擇と見ようとするのは無理な話である。

だから自分などは書證の有無によらず、一應は國に古くから、持傳へて居たものと見て置くのであるが、それには又氣になる點も幾つかある。第一には蒙古の一例で特によく表はれて居る內外の類似である。昔話の國際一致といふことは珍らしいことで無い。何等互ひの交通の跡づけられぬ區域にも、捜せば幾らでも似通うた筋と趣向があつて、世界の說話の差は、言はゞ組合せのちがひであるとまで言つて居る人も有るのである。しかしこの臼蜂牛の糞等の助太刀の話となると、事情は又他とは異なつて居る。是は或一つの組合せの一致である上に、目的が先づ思ひも掛けぬものゝ協同によつて、聽く人の笑ひを惹かうとするに在つた。殊に牛糞などを斯んな仲間に取入れゝば、驚き又笑はれることは請合ひであるが、それを我々の祖先が單獨に思ひつき、もしくは古い素朴な昔話を、斯ういふ風に笑話化したらうとはどうも考へられない。一言でいへば話がやゝ變り過ぎて居る。

それから今一つ私たちの心づくことは、このやゝ複雜に過ぎたる挿話の用途である。現在、知られて居る海外の三つの例では、是が說話の中心をなし又は主題であるに反して、我々の間に於てはいつでも結末の、附錄のやうな地位を占めて居る。殊に猿蟹話などでは蟹の機智乃至は其忍耐と先見の明とによつて、既にそれだけの敎訓的效果を收めて居るのに、それから又新たに一本の線を出して、其あとへ斯ういふ話を取添へて行くのである。寄合餅の臼轉ばしの例を見てもわかるやうに、猿が空の臼を谷底まで追掛けて、失望して歸つて來る間に、蟹は根株に引掛つて居る餅を、獨りでしんみり〳〵と食つて居る。是でおしまひになつて居る昔話も、數に於ては遙かに、助太刀を賴んで猿の夜盜を擊退したといふのよりも多いのである。斯うして今までの單純なる結末のものを斥けて、もつと大きく笑へるやうな長話にさし替へたといふ所に、後者が借り物であるといふ名殘を留めて居るのではないか。もしもさうだつたとすると國の需要があつたわけで、近世何かの序に對岸から持つて來た說話でも、話を長く面白くする

もて囃されて座頭などの手にかゝり、弘く端々までも運ばれるといふことがあり得るのである。しかしそれも是も今はまだ假定で、他日或はその渡來の道が明かになるかも知れぬと共に、又或はもつとちがつた形で、久しく我邦の内にあつたと決するかも知れない。少なくとも是が猿蟹合戰の昔話の、最初からの構成部分でなかつたといふことだけは、今日でも斷言して差支ないであらう。現に我邦でも雀の仇討にも之を說き、又牛方山姥の復讎譚にも、之によつて成功したと話す例があるのである。さういふ幾つかの試みの中で、特に一つの子蟹の猿退治だけが、本筋のやうに見られて居るといふのは、都府の力と言はうよりも、赤本があの通り赤く又安かつた偶然の結果だと思ふ。蟹が餅の配給の力によつて同勢を集めたといふ點などは、蒙古にもあるのだが普通の猿蟹からは落ちて居る。さうして奥州の雀仇討にはあり、九州のオロンコロンにはあり又桃太郎にはある。柿の實を說かない九州東北の猿蟹話などは、多くの助太刀の條を說くものも說かぬものも、一樣に話の中心を餅にして居る。私は是が多分新舊二つの部分の、接續點だつたらうと思つて居る。

八　一

昔話はこの通りに、時々別な話をよそから借りて來て、後へ繋いで面白味を新たにする技術であつた。それも聽手が子供なら子供に向くやうに、下品な笑ひしかわからぬ人ならば又その樣に、目先をかへて行く方法が幾らもあつて、それを生計にする者が世に現はれてから其變化が目まぐるしくなつたやうである。是に就ても話はまだ色々あるが、次を急ぐからこの位にして置かう。古い話を覺えたまゝ語ることは、家々の祖父祖母の今でも守る方針であるが、それにも拘らず、古い形に飽きるといふ癖が、世と共に少しづゝ增長して來たらしい。昔話の根源を究めようといふ人々には、是は往々にして迷ひの種であるが、もと〳〵變遷の順序をも調べずに、單刀直入に古い事を知らうとするのが、横着かもしくは無謀なる企てゞあつたのである。さうして千年五百年の長い歩みを認めて之を學ばうとする者だけが、この二つの傾向の對立、町では新らしいことを好み、田舍では以前の習はしに附くといふ現

象が、自然に中間の幾つかの段階を、土地毎に殘して居ることを知るのである。全國の傳承を集め比べて見る事業が我々の興味を惹き、同時に一つの學問ともなる理由はそこに在り、一方又殘り傳はつて居る前代の說話文學が、意義ある遺物として我々を樂しましめるのも此爲である。古人は說話が眞實を語る手段では無くて、單に我々の夢を遊ばしめる花苑であることに心づいてから、急に著しく聽手の悅びといふことに重きを置くやうになつたやうである。必ずしも愛する幼ない者の爲に、出來るだけ彼等に適應した昔話を供與せんとするだけで無く、大人の間にも互ひに珍らしく面白い形を示し合ふことを心がけ、殊に所謂笑ひ話の數は追々と增加して居る。娘たちの間には又泣かせる話さへ新たに普及した。しかも其能力は甚だしく限られて居て、專門の技藝を傳へた者以外、さう思ひ切つた改作の途に出ることは出來ない。だから交通に惠まれない山間や孤島では、今なほ一部分だけしか古い形を棄てず、從つて又遠い土地との類似を、幾らでも拾ひ出すことが許されるのである。勿論そのたつた一つを取上げて見ただけでは、何の判斷をも下し得る筈は無いが、比較の數を重ねて行くうちには、自然にどの變化が新らしいものであり、どの變化がそれに先だつて起つたかを確かめることもさまでは困難では無いと思ふ。

たとへば信州小縣郡の西部には、猿と雉との豆拾ひといふ話があつた。猿は拾ふそばから食べてしまつて一粒も殘さず、雉は袋の中に貯へて置いたのを、寒くなつて食物に困つて猿が貰ひに來るといふのは、何だか西洋の蟻と蝶々の話くさいが、それを拒絕したので猿が怒り、それでは今夜夜盜に來るぞと謂つて歸り、雉が心配して泣いて居ると卵と蜂と蟹、牛糞と臼と腐れ繩が來て助けてくれる點は、全く他の地方の猿蟹話も同じである。同郡東部の村では是を栗拾ひと謂ひ、猿の袋には穴があいて居るのを知らず、雉は後からまはつてそれを拾ひ、すぐに一杯になつたのでもう歸るといひ出し、それが喧嘩になつて結末は前のと同じである。此方が少しは古いかも知れぬが、穴のあいた袋といふのも「繼子の椎拾ひ」、即ち繼母の惡意から姉には破れ袋を持たせ、其穴からこぼれた椎の實又は栗を、妹が又拾つて自分ばかりさつさと歸るといふ話が、弘く全國に亘つて流布して居る以上は、此場合はたゞ應用としか思はれない。乃ち臼・蜂・卵・牛糞などの奇拔な援兵が、協力して猿をやつゝけたといふ點に興味を置いて、それへ話を導いて來る段取りに、雉との喧嘩といふ話を考へ出して、

取つて附けたかとも見られることとは、双方共に同じなのである。

さうするとこゝに問題になるのは、既に隣の埼玉縣などの、猿が計略にかゝつて柿の樹から逆さに降り、柿を取られてしまつて合戰になつたといふ話が、相應に行渡つてから後にそれを傳へ聞いて、其蟹を雉にさし替へたのであらうかどうかである。自分にはさうは思はれないわけは、信州以西ではまだこの猿と雉の話は採集せられて居ないが、東北には可なり弘く是が分布して居り、或は蟹よりも數が多いのでは無いかと思はれるからである。此方の發端もやはり區々だが、是には信州とは違つて一つのヤマが有り、且つ一般に寄合田の話となつて居る。秋田縣の淺舞附近に行はれて居るものは、此地方でよく聽く稻束の分配で、猿は田植にも草取にもちつとも出て働かぬくせに、稻を分ける時にはずるいことをする。是も子供らにもよくわかる滑稽だが、猿一把雉一把マス一把と謂つて分けて行くので、結局二把づつ取ることになる。マスは「ましら」と同じで猿の異名だからである。雉は腹を立てゝ復讐をすることになり、助太刀には栗・蟹・臼・びた糞などが參加する。南部の五戸あたりで謂ふのも喧嘩のもとは是に近く、猿が雉はたきにして食つてしまふぞと脅すと、雉は怖しくなつて泣いて居る。其話に同情して手を貸さうといふ者に、卵や臼以外に風がある。風がごう〳〵と寒く吹いて、猿を圍爐裏の傍へ寄らせるといふなどは、寒國の思ひ付きらしくて至極よい。鄰の九戸郡に行くと是が又寄合畠となつて居る。爰の話の他とかはつて珍らしいのは、其一つには猿と兎と雉と三名の契約となつて居り、もう一つの方では猿の代りに、敵役が兎である。雉は時々一人で畠見に行くが、その度毎に粟を少しづゝ食つて來る。それを兎が大いに怒つて、十二串にさして燒いて食ふぞとどなりつける。何で泣いて居るぞと雉を慰めに遣つて來て、力を貸して兎を降參させるのが、此土地では栃と蟹・臼と牛の糞になつて居るが、喧嘩は少しばかり雉の方が無理で、この兎はやゝ氣の毒である。

九

興味の中心の推移といふことが、この土地毎の變化を說明するかと自分は思つて居る。世界的なる「尻尾の釣」といふ話でも見られるやうに、當初熊とか猿とかいふ全體に尻尾の短い

獸が、どうして尾を無くしたのかを問題にして居るうちは、どんな事があつても主人公を他の動物にさし替へることが出來ない。それが日本ではいつの間にか、あの太い房々とした尻尾をもつ狐が、不誠實の罰として其尾を氷に挾まれ、切つて遁げることにもなれば、又切れなくて水汲みに叩き殺されたことにもなつて居るのである。古い何故話に段々と興味を引かれなくなつて、石臼とか牛の糞とかいふ意外な物が、義俠心を起し且つそれ〴〵の働きをしたといふ話を、珍らしがつて人が聽くやうになれば、もはや主人公はどれでもよく、寧ろ新顔の方がをかしくて歡迎せられたのである。そんなら是だけを引離して、全く別な話として傳へたらよさゝうなものだが、それが出來ないのが昔話といふものゝ、見逃してはならぬ大きな特徴だつたかと私は考へて居る。此頃は田舍の筆を執らぬ者の中にも、折々は所謂童話作家にかぶれて、新たに話を自作する者があり、それを又後生大事に採錄して來る者もあつたが、半分も聽かぬうちに女子供にもうそはすぐ判る。數ある鳥獸草木の中でも、昔話に出るものはきまつて居り、又その出る舞臺も略定まつて居た。そんな筈が無いといふことを、昔話だけには言ひ得たのである。それでも永い間には熊が狸となり、猿が兎の類に取つて代られて居るが、是にも今はまだ隱れて居る何等かの約束があつたものと見えて、其變化の範圍は全國を通じて大よそは定まつて居る。針や卵の助太刀の條が、いつ迄も或一つの話の後段としてのみ語られて居るのも、原因は爰に在つたと同樣に、猿の相手が蟹でなければ雉で、其他にはもう是といふ顔ぶれの現はれぬのも、たゞの偶然とは自分には考へられない。即ち斯ういふ風に徐々として變つて行くだけの、路筋が始めからあいて居たのである。陸中花卷附近の寄合田話では、猿は口實を構へて一向に出て働かなかつたにも拘らず、苅上餅の日だけ雉と立會つて、臼を轉がして早く取つた者が食ふといふ提案をする。空臼と知らずにむだに走つて、餅は雉に見つけられることは例の通りで、戻つて來て色々と世話を燒くに對して、「ひつぱりおつぱり食へばうまうござる」と雉が皮肉を謂ひ、それから腹を立てゝ其晩夜盗に入込み、却つて栗・疊針・にが味噌・蟹・臼・びた糞等に擊退せられることも他と一致してゐるが、是などの殊にをかしいのは、蟹や蟇蛙なればこそ足が遲いから負けもしようが、立派に羽があつて飛んで行ける雉に、斯んな競爭を申込むといふ話はない筈である。つまり新らしい部分の面白さに氣を取られて、それへ話を持つて行くまでの手順を粗末にしたものな

のであらうが、それで居てなほこの臼轉がしの一條を棄て切らぬのは、說話のさう容易には改まつてしまはない證據であり、同時に又今ある猿蟹合戰の賑かな結末が、少なくとも日本の東半分に於ては、蟹とか柿の種とかの話が纏まるよりも以前から既にあつたことを、推測せしめる一つの根據でもある。もつと色々のかはつた例が出揃ふ迄は、斷定は必ず差控へなければならぬが、九州の一部と奥羽一帶では、喧嘩のもとは皆餅になつて居る。雉は言ふまでも無く柿などは省みもしない。餅ならば省みるかといふことも疑問だが、とにかく蟹雉二種の話に共通して、寄合田と餅搗きと臼轉ばしとがあるのだから、此方が一つ前であつて、爰で蟇といひ蛙と謂つて居た役を、後に雉にかへ蟹にかへ、更に一轉して柿の種の交易とでなつたものかと思ふ。蟹と雉とは何れが早かつたとも決しかねるが、少なくとも二つの話の併存する土地だけでは、外部と共通して居る蟹の方が、後から入つて來て訂正したものであることは、九州各地の猿蟹話の、餅から柿への變化と同じであらう。

猿と蟇との餅爭ひに就ては、餘り長話になるから爰にはたゞ要點だけを述べる。第一にはこの昔話の分布區域、是が今まで竝べて見たどの話よりもずつと廣く、四國はまだ尋ねて見ないが、本土は殆と全部、九州にも亦明かな痕跡が有る。此一點からでも、是が古い形であつたことは親はれる。第二には此話の最も普通の結末が單純な「なぜ話」、その爲に猿の面はあの樣に赤うなつたとか、蟇は腹一杯に餅を食つたので、あの樣に膨れて居るといふ類の笑ひになつて居ることで、たま〳〵猿が怒つて踏付けたといふ位の變化はあつても、夜盜だの復讐だのといふ所まで話は展開して居ない。第三には臼轉がしと兎と龜式の走り競べは此話の興味の中心だつたと見えて、大抵の場合には保存せられて居る。たゞ其前後を少しづゝかへて話さうとした傾向は既に現はれて居る。たとへば寄合田の約束の代りに、穗拾ひだの米と臼杵との持寄りなどもあるが、東北には蟇に赤兒の聲を眞似させて、御產のある家の待餅を盜むとか、井戸へ大きな石を投込んで、子供が落ちたのかと家の者を動顚させて、其間に餅臼を抱へ出したといふやうな新趣向も、一部には流行して居る。即ち此樣なよく整つた人望のある昔話でも、やはり古くなると片端から、少しづゝ變へずには居られなくなつた前例が見られるのである。それから終りにはなほ一つ、猿を兎に替へ又は兎を加へて三名の競走にした例が、至つて飛び〳〵に全國に現はれて居ることも注意に値する。福岡縣の三井郡

では、猿と兎とが餅を搗いて居る處へ、龜が遺つて來たのに分配することを厭ひ、山へ持つて行つて驅けくらをして龜を斷念させようとした話があり、一方岩手縣の北端では、猿と兎とが走り過ぎて却つて失敗し、のろい蛙が餅に有りついた話にもなつて居る。即ち前にも幾度か繪樣を取替へて見ようとした試みがあつて、結局は蟹に落ちついたのだが、是には或は「ならぬと摘み切る」の呪文とか、又は「蟹どん何を泣く」といふやうな、印象の深い敍述の偶然なる支持があつて、兎や雉の話にはそれが得られなかつたからとも見られるのである。

一〇

猿蟹合戰の昔話の成長して今ある形になつた歷史は、是で先づ一通りはわかつたとして、最後にまだ一つの殘つた問題は、この前型かと見られる猿と蟇と餅の話が、どうして我邦には生れて來たらうか。即ちその又一つ前の手本乃至は種といふべきものが、如何なる眼鼻を具へて我々の間に存在したらうかであるが、之を推定せしめる樣な資料はもう現在の生活の中にも、又は文獻の上にも共に乏しくなつて居るのだから、斷念をする必要も無いが、よほど困難なものだといふことは認めなければならぬ。自分が抱いて居る一つの希望は、何等かの暗示がこの說話の變遷から、もつと具體的にいふと、蟇や蛙が後に蟹と話しかへられて通用したといふ點から、得られはせぬかといふことである。兎とか雉とかは山の者だから、猿の相手になつてもまだ不思議は無いが、わざと配合の奇を求めた近世の趣向でも無しに、蟇や蛙を猿に對立させたといふのには、何か隱れた意味があるかも知れぬ。是に就て自分の言ひ得ることは、猿が日本の昔話に入込んで來た路順が、少しばかり他の民族とはちがつて居るらしいことである。元來があの通り頓狂な、どんな滑稽の一役でも買へさうな顏をして居るに拘らず、猿の說話の記錄に出て居る最初は、猿神の畏怖であつた。年經た猿丸が人の屋の棟に白羽の矢を立てゝ、娘をさし出さぬと祟をするといふ話は、幾つかの小說の趣向となり、又今以て民間にも傳承せられて居る。六部がその酒宴の歌を立聽して、名犬を求めて來て退治したといふ物語などは、既に三國傳記の中にも見え、又多くの土地で傳說化して殘つて居る。今ある猿聟入の御伽話の如きも、片端は是と聯絡して居るやうであるが、是は少な

くとも成立の動機を異にして居る。近年多くの研究者の手を附けて居る問題だから、爰では簡單に入用な點のみを述べるが、蛇が若侍の姿に化けて人間の美女を娶つたといふ昔話などは、其結末から見て幾つかの階段に分れて居る。あるものは姉二人が羨み悔ゆる程の幸福な婚姻を結んで、末は長者となつて榮えたといふ話で、是は多くの舊家の言ひ傳へとして、水の神の恩寵と血筋の特權とを說くものと、近い關係をもつて居ることが察せられるが、なほ其以外に人間の智慮の淺さから、無上の幸運の緣を絕つたといふ、色々の說話も殘つて居る。神が蛇體を以て示現するといふ信仰が、追々に普通の感覺と背馳するやうになつて、それが先づこの種の民間文藝の上に、一つの傾向を作つたものかと私などは思つて居る。さういふ中にも苧環の絲を辿つて、遠い奧山の岩屋の中の問答を立聽し、逆に靈物の言葉を利用して、絕緣の手段を講じたといふやうな、新舊の思想の境目を示す說話もあるが、一方には又鐵の針とか瓢とかいふものを武器として、異類の押掛け聟を擊退したなどゝ、丸で妖怪征服と同じやうな話し方をするものも出來て居る。さうして其中の殊に子供らしくたわいの無いものが、今では猿聟入の昔話として笑ひ興じられて居るのである。弘く全國に分布する猿聟入と、蛇聟入の最も笑話化したものとは、話の內容なり順序なりがよく似て居る。何人が見ても兩者を別系統のものとは言ふことが出來ない。大蛇と猿とでは、今日では全く緣の無ささうな二つのものであるが、是は我々の幻覺にもまだ幽かに殘つて居る水の靈の姿といふものを中に置いて考へると、必ずしも推移の跡を尋ねられぬことは無いやうであるが、それはもう爰では辯じないことにする。とにかくこの猿聟入に最も近接した蛇の聟の昔話にも、やはり蛙が干與したり、又蟹が出て來たりするのである。

この美しい人間の娘に、はからずも忌はしい異類の聟を取り合せて、百方苦心して之を引離すことを得たといふ昔話には、今でも幾通りかの話し方が傳はつて居る。猿の方ではたゞ水瓶とか臼とかを背負はせて、岸の梢の花の枝を折らせたといふのみだが、是にもよく見ると瓢や針の遺形を留めて居る。蛇の方の話では大體に四つの方式がある。其一つは長い絲を針に通して、男の衣の端に刺して置けと敎へるもの、第二には妻の病を治する爲と謂つて、鵲の鳥の卵を採りに遣る話だが、この二つは私の問題とは直接の緣が無いから略して置く。第三には蛙報恩型と我々の呼んで居るもの、第四は卽ち蟹報恩型である。この二つの中で

は、蛙の方は爺さんが水を見廻りに出て、蛇が蛙を呑まうとするのを見つけ、やれ宥してやれ其代りには娘をくれるなどゝ、餘りにも無造作な約束をしたことになつて居て、話は大分笑話化しかゝつて居る。其蛙が後に巫の婆に化けて來て、蛇の聟を追退ける手段を敎へてくれたなどゝ、前後の照應はついて居るが、話としては全體によほど幼なく出來て居る。之に反して他の一方の蟹報恩は、既に元亨釋書・沙石集・著聞集・今昔物語等を見た人は知つて居る如く、又其出處かと思ふ日本靈異記に、二つも重複して出て居るやうに、千年以上も前からの日本の昔話であり、今日もなほ能登の稻船村と飛驒の丹生川、遠州の濱松と燒津、丹波の上夜久野と紀州の有田郡、北は岩手縣の蟹澤、南は長崎の伊王島などに、口頭傳承として保存せられて居る。語りつゝ運んで居た者が曾てあつたとしても、民間にも亦深い印象を以て之を受入れ引繼ぐだけの素養があつたことだけは推測せられるのである。現在の猿蟹話の類は、人間の參加しない純然たる動物譚であつて、固より此系統には屬せざる別種の說話であるが、少なくとも猿と蟹又は蛙が餅を爭つた一話を、猿と蟹とが柿を爭つた話にまで、改作する位な因緣にはなり得たかと思ふ。

自分が玆に揭げた資料から、下し得る推論は寧ろ消極的のものである。猿が古くからの說話文學の上に占めて居る地位は、可なり顯著に今ある猿蟹合戰、乃至は其前型たる猿と蛙の話などゝちがつて居る。卽ち一方が動物と人との交涉を說くに反して、此方はイソップ以來の、人の樣な心を持つた動物仲間だけの葛藤を敍するものである。說話としては二者は全く成立ちを異にし、是に屬する鳥獸蟲魚も、おのづから二つの種類に分れて居る。さうして全世界の動物說話は、土地により又時代によつて、頻々として其役者を取替へようとして居るのである。それ故に自分は寧ろ日本の猿と蛙の餅爭ひなどは、たとへ書いたものゝ證跡が無いにしても、さう夙くから此形のまゝであつたものと思つて居らぬ。以前に少なくとも一回以上、熊なり狸なり何か他の動物の逸語として話されて居たことがあつたものと想像する。臼轉がしの趣向はよく纏まつて居て面白いが、是とても餅なり臼なりの大きな變遷を考へると、新らしい興味の產物だつたやうにも思はれるのである。僅かな年代の間に猿が兎になり、蟇や蛙が蟹になり又雉とも話されるやうになつたといふのも、元々此部分が變化し易い傾きをもつて居た爲であらう。たゞ慾が深く鼻元思案ばかりで結局失敗をするといふ主人公

を猿にした以上は、自然に其相手を蛙とし又は之を改めて蟹とすることが、多數の聽手に承認せられやすかつたらうといふことは謂へる。蟹は我國の民間傳承に於ては、頗る特殊の地位をもつて居て、それが今忘れられて居るらしい。山城蟹幡寺の緣起だけでなく、榛名山の神池の傳說でも、水の神の妻になつたといふ上蔦の侍女が、蟹になつたといふことが言ひ傳へられて、今もなほこの御社の信仰の一部をなして居る。或は又それとは反對に、是が水底の靈物を征御する一つの力であつたやうに、語られて居る例も少なくない。さうして猿も亦山川の岸を住家として、蟹を取つて食ふ獸だといふことが知られて居たのである。我々の猿蟹合戰は、可なり新しい產物とは思はれるが、斯ういふ形のものが生れて來る素地だけは日本にあつたので、たゞ是に柿の種　交易談を配したのが日本人の才能、是に栗・卵・臼・牛糞等の助太刀の條を結び附けたのが、日本人の應用力の新たなる現はれだつたといふことが出來るだけかと思ふ。

（國文學論究、昭和十四年三月）

續かち〳〵山

何かどうしても書かねばならぬといふことになつて、Mrs. Leslie Milne の "Shans at Home"(1910)を出して見る。此中には最も人に知られないシャン族の昔話が二十ばかり載せてあつて、その一つは日本のかちかち山の後半と同じ話である。兎が小屋を建てようぢやないかと虎を誘つて萱刈りに行く。刈つた萱を虎の背に負はせ、自分は加減が惡いと僞つて萱の上に載せてもらひ、燧石で火を打つて其萱に火を付けるのである。今のは何の音だと虎が訊くと、寒む氣がするので齒がかち〳〵いふのだと答へる。虎は大火傷をして苦しみ、兎はちやつと逃げて何食はぬ顏で、大きな蜂の巢のかゝつた木の下にしやがんで居る。そこで何をして居るか。おちい樣の釣鐘の番をして居る。おれに一つ撞かせてくれ。そんならきいて

來てやると謂つて逃げてしまつた跡で、虎は一人で鐘をついて見ると、蜂だから飛出して來てうんとからだ中を螫す。斯ういふ風に何度でも騙されてはひどい目に遭ひ、おしまひには泥沼の中に二人で入つて、兎は虎の頭を踏んで自分だけ飛出して助かるといふ話である。

同じ著者の"The Home of an Eastern Clan"(1924)を見ると、此一話は少しづゝの變形を以て印度支那の各地まで行渡つて居るといふが、Palaungs族の間では、被害者は虎でなくて熊になつて居る。こゝにも熊ん蜂の巣を釣鐘だと言つて撞かせる條があるのは、多分南方山地だけの特産であらうが、熊をいぢめたといふ話ならば、日本でも加賀にあり又岩手青森の方でも採集せられて居る。相手が狸で無くなると共に、婆汁を食はせるなどゝいふ前段は引離され、從つて又義俠でも仇討でもなく、たゞ惡智慧のある兎といふ話になつてしまふのである。今あるかち〳〵山は二つ又は三つの話の繼ぎ合せで、多分は狸が逃げて行つたといふ迄で話をおしまひにしては、あまり子供には本意ないので、ちやうど有合せの兎の話を持つて來て附けたのだらうと思つて居たが、それが斯樣な遠方の異種族の中に、分布して居らうとは實に氣づかなかつた、兩者は別々の起原と云つて見たところで、やはりどうしてこれほどまで似た空想が浮んだらうかゞ問題になる。運ばれたものだとすればいつの時代に、誰がどうして持つてあるいたか。少なくとも記傳以外の文化交流が、遙か昔の世に行はれて居たことだけは窺はれて、それが斯ういふ意外の方面から、徐々に判つて來さうな氣がするのである。

それよりも當面に私たちの感歎するのは、斯ういふ大陸と共通の素朴な古文藝を、こゝで我々の祖先が風土に適應させ、又時代の好尚に合致させた伎倆の竝々で無いことである。短いあつけない話の繼ぎ足しに之を持つて來たなども、何人かの即席の思ひつきであつたらうが、其話し方の器用さとても、練習を經たものでは無いのである。それを追々と面白いものを採り、いやな趣味のものを退けて、今ある形にしたといふことは、半分以上は聽手としての鑑賞法で、話者が多くはたゞ平凡なる常の暗記者だつたことを考へると、愈ゝ民衆智能の總和といふものが、文化の展開に對する大きな力であつたことを感ぜずには居られないのである。兎が熊をいぢめたといふ東北地方の例は、もう知つて居る人も多いから詳しくは玆には引かないが、との緬甸の土人などの喜んで聽くものと比べると、それは段ちがひにさらり

としたユウモアがある。すばしこい兎は逃げて先まはりをして、蓼山に入つて蓼を摺つて居る。うさぎ〳〵、そちはよくも俺に大火傷をさせたなと熊が言ふと、萱山の兎は萱山の兎、蓼山の兎は蓼山の兎だ。それを俺がなに知るべさと答へて、再び蓼を塗りたくつて熊を苦しめ、其次には藤山、杉山と、順々に同じ問答をくり返して、終に泥舟の悲劇にもつて行くのである。是がKarle Krohnの曾て證明したやうに、世界の陸地の半分以上にも流布して居る動物闘諍譚の一つの表現だとすると、日本をさし置いて說話傳播の說を說き盡さうとすることが、既に業觀に過ぎたる學者の企であつたとも評し得られぬことはない。

しかも知識慾のまだ我々程度にも達しない民族は數多い。それを一つ〳〵ミルン夫人のやうな親切な學徒が訪ね寄つて、採集を殘してくれる日を待つて居られないことは知れ切つて居る。我邦の昔話が此頃の勢ひで、どし〳〵集まつて來ることになると、自分たちは先づ何よりも國內の傳承に於て、どれが共通の形、どこから先が日本の話好きの、追々と加工し改良した部分であらうかを、見分けることといふやうなものを習得しなければならない。私なども時々是は輸入であらう。是は書物からの復原であらうなどゝいふことを豫言するが、それが適中したこともあれば、見ごと反證を擧げられたことも屢ゝある。猿の聟入だけは和裝であらうと思ふと、支那にも近い話があり、又南洋の何島とかにもそれがあるといふので氣が氣でない。「虎狼より漏るぞ恐ろし」と云ふ話の後段に、猿が長かつた尻尾を賴まれて穴の中へ探りに入れ、それを切られてから尾が短くなつたといふ部分などは、所謂尻尾の釣りの話の應用で、日本人の才覺であらうと思つてゐると、是もちやんと隣大陸の方に有つたのである。支那は誠に驚くほど豐富な昔話の採集地で、且つ我邦との往來も最も久しく且つ親しい。十數年來の南北の採集は、まだ我々には目に觸れる機會が乏しいが、僅か片端を知つただけでも、こちらと似通うた話例が、うつかりして居られない程もある。しかもそれが決して學者の考へて居たやうな、書物を通して學ばれたものだけではないのである。西洋人の出してゐる本では、Mac-Gowanの支那民話集でも、又 J. S. Galeの朝鮮民話集でも、實は名ばかりで古書の飜譯だからがつかりするが、是はまだ民間の採集が一向に進まなかつた時代の產だから致し方が無い。第一我々は不自由な橫文字の寫しに依らずとも、此國だけは直接に土地の人から聽いて書いたものを、讀まうと思へば讀めるのである。小さい仕事だと考へ

ずに、常民の心の最も奥に潜むものを、是によつて互に突合せて見るやうにしなければなるまいと思ふ。一昨年英譯せられて出たW. Eberhardの支那民話集は、まだ獨逸語の原文は見ないが、珍らしく實地に採集した昔話であつて、筆者は一つ〳〵の出所と名とを擧げ、それが皆最近の民間傳承の記錄らしい。近くに居ながら知らなかつたのは耻かしいが、向ふに行つて住んで居れば、白人さへも斯ういふ機會はあつたのである。此中で早一つ私の學んだのは、普通日本で猿蟹合戰の後段として語られる栗・卵・蜂・臼・牛糞等の助太刀といふ話が、南支那では獨立して妖怪退治の一話になつて出て居る。爰でも助力を受ける中心の人物は別にあるのだが、目的は主としてこの樣な意外な者の組合せが、緣あつて人間の災難を救つたといふ點に興味を置いてある。それを我邦では小蟹の如き微々たる無力の者が、勁敵を殪したといふ奇譚に應用したもので、近世日本人の才覺としては、種さへあれば是くらゐのことはお茶の子であつた。それよりも驚くことは鳥居きみ子刀自は、內蒙古の昔話中に同じ趣向の存することを夙く注意せられ、又孫晋泰君は其朝鮮民譚集の中に、老婆が惡虎を退治した話の、同一系統かと思はるゝものを報告して居る。小學生の地理知識でも、この四ケ所の發見地の相互の距離は莫大である。それがいつ如何して流れ傳はり、又土着して根生ひの如き觀を呈して居るのであらうか。人類が歷史に錄せられて居る以上に、古來隱れたる親しみを交して居たものであることを前提としなければ、偶合としてどもこの著しい一致は說明し得ない。五族協和の痛切なる未來の問題の爲にも、是は現在のやうな切れ〳〵の好奇心の、餌食として置けないのは勿論、又我々の如く一國文藝の發達を、培養基の成分から見て行きたいといふ者にも、手輕に看て通れない新しい發見である。

世界の昔話をよせ集めるといふ事業は、現在ではもう個人の一生には盛り切れぬやうになつた。それでも西洋には何萬集めたなど〳〵いふ人があるといふが、どういふカードの作り方をするにしても、是に力を注げば其原因を究める部面に、手がまはらぬのは已むを得ないことで、第一にそれを讀み通すことが、我々には望めない根氣である。是は何でも機械的の部分だけは別にして、自由に誰にでも檢索し得るやうな便宜を、外部から供與しなければならない。最近の民俗調査が、中央ではちつとも成績が擧がらず、却つて臺灣とか朝鮮とかの役所で、永く後代に遺るやうな立派な仕事をして居ると同じく、新鋭潑剌〻計畫者に、至つて

僅かな好意と費用とを、割いてもらふことは望まれないものでもあるまい。滿洲國の最高學府などで、もし斯ういふ事業に手を着けたとしたら、どの位世界に平和の氣を漲らすか測り知られぬ。しかも方法さへ立てばごく容易な又樂しみな仕事でもあると思ふ。私も折を見て献策して見たいと思つて居るが、是には幾つかの段階を立てれば、一歩々々に成果を收めることが出來る。たとへば個々の老翁老嫗に就て採集を試みることは、この兵馬倥偬の際には六つかしいとしても、今まで出て居る話集を標出して、之を分類することは何でもない。それが個人には困難で、公の仕事にならほんの一人か三人の勞力の問題である。世界の隅々に、殊に亞細亞の東半分に、無始の昔から人が聽いて樂しんで居る說話が、是だけ一致して居るといふことは想像しても面白く、しかも個々の傳承者にとつては、それは何れも皆新らしい啓示なので、是あるによつて再び又、自分の持つものを大切にするやうにもなることゝ思ふ。回顧すれば三十餘年の昔、故高木敏雄君は丸善の書棚を訪問し、歸つて來ては失望してよく斯ういふことを謂つた。あそこでは兒童用の繪入昔話と、我々の研究する說話集とを區別することを知つて居ないと謂つた。其狀態は三十年後の今日も改まつては居ないやうだが、それは日本に又は極東に、まだ丸善をして此態度を改めしめるだけの、學問が起つて居ないことを意味するだけかと思ふ。小兒は御承知の通り今では昔話を馬鹿にしようとして居る。もう是からは保存の役をもしてくれまい。空しく研究の好機會を逸し去る懸念が、此頃になつて殊に我々を憂鬱にするのである。

（學鐙、昭和十四年一月）

天の南瓜

一

無意識傳承といふ言葉を、我々の仲間では好んで用ゐる。今まで考へて見たことも無い昔風、誰も殘して置かうと企てなかつた「日本人らしさ」とも名づくべきもので、その發見は大抵の場合には樂しく、又御互ひの向學心を刺戟する。殊に文學藝術の新たなる花野を歩んで、たまさかにその隱れたる流れの音を聽くなつかしさは、既に一千年前の歌人の心を動かして居る。求めてたやすくは得られない機會である故に、私などは深くこの偶然の遭遇を喜び、改めてあの

いにしへの野中の清水ぬるけれど本の心を知る人ぞ汲む

の歌を、吟誦せずには居られないのである。

天に夕顔の花を咲かしめて、思ふ人に見せたいといふ空想は、作者はどこまでも自由なものだつたと言つて居る。さうして中河君の稚ない頃に、讃岐に是と近い昔からのかたりごとが、傳はつて居たらうと思はれる形跡は一つも無い。しかし我々が日本人である爲に、特にこの筆の跡に引寄せられ、他の何れの國民よりも身に沁みて、物のあはれを感ずべき理由だけは有るのである。文學の先祖は讀者であつたか、但しは作者が先づ生れたかといふ大きな問題に、結局は是が歸着するのであらうが、まだ私にそれ迄論ずる力が無い。たゞ夕顔の蔓が我々のまぼろしの中に、如何に芽を吹き又どういふ方角へ伸びて行つたらうかを、片はし考へて見ることが出來るやうな氣がして居る。さうして是が文藝に國々の型のあること、世界の統一する傾向にどの程度までか對抗し得るといふことの、一つの根據になりさうな豫感があるのである。

二

天を一つの大きな穹窿と見て、かの蒼々たるものゝ彼方に、住んで此世へ通はうとする人があるといふことを、信じ難くなるまで信じようとしたことは、獨り未開半開の種族のみで無く、開け切つた國々にも屢〻その痕跡が殘つて居る。たとへば植物を梯子にして天へ昇つて行つたといふ昔話などは、日本は英語がはやるから國内に昔からあるものよりも、却つて「ジャックと豆の木」の方が多くの人に知られ、又もてはやされて居る。決して我邦ばかりの固有のものと、思つて居る人などは無いのである。

つまらぬ穿鑿のやうに思ふ人もあるか知らぬが、私は日頃このジャックが梯子にした豆の木即ちBeanstalkが、蔓のある豆だつたか否かを確かめたいと念じて居る。といふわけは、蔓ならば伸びが早く、又知らぬうちに何處までも進んで、稀には天までも屆くことがあらうと、考へられたかも知れぬからで、もしも是が我々の太豆のやうな木だつたら、それが青空

を突抜くといふことは完全な不可能事で、愈〻この昔話が何人をも信ぜしめようとしない、只の慰みごと即ち文藝化の狀態に在ることがわかるからである。

日本にも實はもうこの狀態まで、改作せられて居るものが既に有るのである。たとへば陸中江刺郡の、天に昇つて雷神樣の聟にならうとした話などは、「ジャックと豆の木」に最もよく似て居て、もう其梯子が茄子の大木とさへなつて居る。昔々愚かな息子が、母に命ぜられて茄子苗を買ひに行き、百文でたつた一本の高價な苗を求めて來る。それが成長して天に屆き、紫の雲が掛つたやうに花が咲く。七月の七日にその茄子の實を採りに木登りをしてゆくと、しまひに天上の御殿の庭へ出た。あゝ是はおまへの畠から伸びた茄子の木だつたか、もう毎日採つて御馳走になつて居たよといふわけで、雷神樣とその二人の美しい娘に款待せられる。それから雨を降らせる御手傳に出て行つて、あやまつて雲を踏みはづして、故郷の村へ墮ちたといふ笑ひ話は、後から附けたものと見えて他の國では言はない。

をかしいことだが私などは幼年の頃、こんな茄子の大木の話でも、まだ一部分だけは信じて居た。或は何かの本に出て居たので無いかと思ふが、八丈の島は暖いから、秋になつても茄子の木は枯れない。それで高い梯子を掛けて登つて採るやうな大木が幾らでもあるといふことを、可なり大きくなるまで事實かと思つて居た。僅かな海を隔てただけでも、南の方の島ならばそんな珍らしいことが、有るかも知らぬと思ふことが出來たのである。ましてや「昔」は不思議の世界であり、子供は一樣に物を信じ易かつた。神話の時代がさう手の裏を返すやうに、全體に一度に改まつてしまふことはない筈である。おとなは忘れたり笑つたりする世の中になつても、なほ片隅には古い幻を守つて居る者が、絶えなかつたといふことは想像し得られる。

三

この民族の半醒半睡とも名づくべき狀態は、文藝の發育の爲には非常に重要なものだつたやうだが、それが日本では特殊に永く續き、且つ快くすが〳〵しい傾斜面を示して居る。天の夕顔の無意識傳承なども、他日或はその適切なる一例として、再び取上げて見る人があら

七月の七日に

うかと思ふので、單に豫言のやうな心持で、今知つて居るだけを書きとめて置くのである。蔓がよく延び遠く居き、すぐにからまつて梯子として重寶だといふだけならば、どんな蠻民にでも夢み得られる空想かも知れない。一夜に植物の驚くほども成長する熱帶の島にでも住んで居れば、是を天上への通路にしたいといふ、現實の願ひさへ抱き得たかも知れぬ。たゞ其蔓ごとに眞白な清い花、あのたそがれをおぼめくといふ夕顔の花を、持つて來て咲かせたのは日本人の巧み、巧みと言はうよりも我が親々の、夢を美しくする能力では無かつたか。といふやうなことを私は考へて居るのである。

日本の豆の木話は、私の知つて居る限りでは二筋に分れて居る。その一つは繼母に憎まれた孝子が、冥助によつて大きな幸福を得るといふので、シンドレラ系の昔話との結び付きが強い。越後では今は一種の傳說に化して、八石山の由來といへば想ひ出さぬ人が少ないほど有名なものになつて居る。その豆の木で某寺の山門を建てたとか、又はそれを伐つて胴にした太鼓が、何村に有つたさうなとか、所謂大話の誇張は、一本で八石採れたといふ豆の木にばかり集注して居るが、是も最初は一つの繼子話で、折角生えた大豆苗を其母が拔き棄てゝしまつたのが、たつた一本だけ見落されてゐて、成長して八石の收穫があつたといふ風に、覺えて居る人もあつたさうで（越佐傳說夢を買ふ話）、その殘りものには福があるといふだけの趣向ならば、支那にも古くから、又日本にも各地に分布してゐる。つまりは此地方だけの產物ではないのである。

能登の半島でも松波の松岡寺、この寺の太鼓は豆殼の木で作られ、それ故に山號を吼木山と謂つた。その太鼓には空海判といふ署名があるなどゝ傳へて居たが（能登國名跡誌）、是もやはりあのジャックと豆の木の破片であつたことは、同國鹿島郡千石村の千石山に、一本から千石の豆を取つたといふ話があるのを見ても察せられる。

四

能登の千石山の豆の大木の話は、陸中稻子澤の粟の大木の話とやゝ似て居る。前者でも土地の大百姓の下男等が、播けと命ぜられた五合の豆を食つてしまつて、たつた一粒だけ殘つ

たのを土に伏せ、寄つてたかつて其上に小便をして、豆よ大きくなれと祝して歸つたら、それが芽を吹いて千石とれるやうな大木になつたと謂つて居る。一方の稻子澤の長者には何百人といふ奉公人があり、其中には寢手間取りと稱して、たゞ寢て居るだけを一役とした者も居た。それが五合蒔きの粟畑をもらつて、五合の粟の種をたゞ一所に蒔いてしまつた。粟の草は一本立ちに取るものだと教へられると、愚かな者だからそれをまちがへて、たつた一本の苗を殘してあとは悉くそれを拔棄てゝしまつた。そのたゞ一本の粟が成長して、七人の木樵りを賴んで、斧で伐つてもらふやうな大木になつたと謂つて居る。斯ういふ念入りな大話は、聽いて信ずる者の無かつたことは勿論で、言はゞ此附近では是を一つの文藝として傳へて居るのである。

しかも此話には注意すべき後段があつた。長者の息子さんはあんまり珍らしいので、畠に出て見物して居ると、粟の大木の伐り倒されたあほりを食つて空に舞ひ揚がり、飛んで黑石の正法寺の屋根の上に墮ちた。それをどうかして助け降さうとして、大きな風呂敷をひろげて下で待ち受けて居ると、飛びおりた拍子に四隅を持つた小僧が、鉢合せをして眼から火が出る。其火で黑石の正法寺は燒けたのださうな。斯ういふ風な結末で人を笑はせて居る。

黑石の正法寺は文福茶釜の寺であり、同時に又澤山の盲法師を庇護して居た寺でもあつたらしい。座頭の職業は、一つには斯ういふ罪の無い笑ひ話を、なるだけ人が誤つて信じないやうに、やゝしつこく談ることであつたが、その爲には別に又大いに、新しく學んでも居たのである。

或はもう知つて居られる人もあらうと思ふが、この粟の大木の大話は遠來の輸入品であつた。德島縣卽ち阿波では、其國名の由來として、大分古くから同じ物語が流布して居る。さうして粟の穗に彈かれて飛んで行つた先は、大阪天王寺の五重の塔のてつぺんといふことになつて居る。此地方でも鴨取權兵衞の如く、鳥に引張られて空を飛んだといふうそ話は多いが、粟の穗に彈かれてといふのは、どうも阿波の國が本場らしい。さうして私などは是によつて、遠くは少彥名の神代から、もう斯ういふ話をして笑ふ人々が、國の一つの層には有つたのでは無いかといふことを想像する。文藝がすぐれた記傳者の苑に芽ばえて居たといふことを以て、全國の草莽を類推することを得ないのは勿論である。

五

翻つて第二種の豆の木話の分布を見て行くのに、是は全體に都からは遠く、しかも遠方に於て互に若干の一致を示し、且つそれ自身の成長をして居る。重要と思はれる共通點は天上との交際であつて、殊に日本では羽衣の奇蹟を說くものが、北は奥州から沖繩の島まで一貫して居る。津輕では天女の羽衣を置して、之を松の樹の下に埋めて置くと、啼いて居る赤兒が妙に其樹の傍に來れば啼き止む。子守の小娘が其話を天人女房にして聽かせたので、喜んでそこを掘つて羽衣を見つけ、それを着て天へ還つて行く。行きがけにたつた一粒の豆を其子守女に渡し、之を背戸の外に播いて成長して天に屆いたら、子供と二人でそれを攀ぢて登つて來いと敎へる。さうして其通りに豆の木がたけ高く伸びたので、二人は約束の如く天へ昇つてしまつたといふことで話は終つて居る（津輕ムガシコ集）。何だかこの方がジヤックの豆の木よりも、今一段と素朴なやうな感じがするのである。

山口縣の周防大島でも、是と半分似通うた話が二つ採集せられ、それは二つとも動物報恩譚と結び附いて居た。天人は自分で羽衣の在りかを見つけて、それを着てさつさと天に歸つてしまつたが、あとで狸が恩返しに豌豆を一粒だけ持つて來てくれる。それを蒔いて置くと成長して天まで屆き、男は之を梯子にして天へ登つて行つたといふのと、今一つは天人女房が自ら豌豆の種を殘して行つたのを、蒔いて成長して天に登ることが出來たが、向ふで色々の難題を課せられて困り拔いて居ると、前に助けて置いた動物が遣つて來て加勢をしてくれる。どちらが古いかは一寸きめにくいが、少なくとも御伽冊子の天若彥は後者と近く、又他の地方にある犬飼七夕の昔話も、天へ拏入してから舅の難題で、苦しめられる方の話が多いのである。さうして是と「ジヤックと豆の木」の昔話とを比べ合せて見れば、結婚を主眼とせぬ點に於て、ジヤックの話の方がずつと少年向きになつて居る。即ち假に根源は同じであつたにしても、日本の羽衣は一段と幹に近い所から、岐れた枝だつたといふことが言はれさうなのである。

さうなつて來ると、この周防大島の豌豆一粒といふのが、後々の一部改定であつたことが

知れる。古くこの話の我々の仲間にもてはやされた頃には、まだ豌豆などゝいふ豆は無かつたかも知れぬからである。天を貫ぬく梯子用の植物は、是非とも一つのもので無くてもよかつた。忘れてもまちがへても亦わざとでも、成るだけ似つかはしい早く成長し、さうなものを持つて來ればよかつたので、又その爲に我々が天と交通したといふ要點にまで、模樣替へをする必要は無かつたのである。天の夕顔も恐らくは同じ事情から、徐々として日本人の空想の中へ、入つて來たのであらうと私などは思つて居る。

六

この實例のはつきりと殘つて居るのは、島根縣伯耆の打吹山の口碑であつた。信州隨筆の中にも載せてあるから、爰には只要點のみを述べると、天女は地上の男に羽衣を取つて匿されると、忽然として身の昔を忘れ、たゞの此世の女房になつてしまつて、二人の娘の母になつて苦勞する。ところがその二人は舞が好きで、母の羽衣を携へて打吹山に遊んで舞を舞ふ。それを見て居ると母も興を催して、偶然にその舞衣裳を着て見たところが、古い記憶があり〳〵と蘇つて、空の國に還る氣になつたといふ點は、竹取物語などゝも同じであつた。夕顔はちやうどその母と子が舞を舞うた山に、其時咲いて居たといふのが意味のあることゝ思ふ。今ある傳說では娘も其父も、是に傳はつて天へ昇つたといふことは無く、單に天女の母が其花の咲く時に、故鄉に歸り得るといふ夢を見たといふことになつて居るが、是は恐らく說明がしにくゝなつたからで、或は其遺跡の附近に住む人に尋ねたら、今でもまだ記錄と異なつた言ひ傳へを保存して居らうも知れぬ。

さういふ想像をする他の一つの理由は、同じ羽衣說話の九州各地の異傳に、天と地上との階段となる植物を、絲瓜にしたり又南瓜などにしたものが多いことである。南瓜などは素より大いにふざけて居る。斯ういふものにさしかへるのは笑はせるつもりで、それ故に話が又一段と誇張せられ、或はあめ牛を一千疋、その根元に埋めると南瓜は天まで伸びると謂つたり、又は足なか草履を一千足、作つて埋めよと敎へられたのに、一足だけ數が少なかつたと謂つたりして、到底有り得べからざる話にしてしまつて居るが、私などからいふとさういふ

空想は、縁もゆかりも無く突充としては起り得ない。一度は夕顔の花美しい瓜の種子を播いて、それに縋つて妻の國を訪ねたといふ話が、弘く行はれて居た時期があつて、それがやゝ尋常になつた頃が、ちやうどこの絲瓜とか南瓜とかいふ植物の、普及し始めて珍らしかつた時に際會したのかと思ふ。さうで無くても昔話の信じにくさが迫々と募つて、是をいつそのこと茶にしてしまはうといふ氣風は、近世に入つて急に著しくなつたのである。江戸や大阪では滑稽がやゝ過當にもてはやされて居る。是も私などは神話に對する失望といふ風に見ようとして居るのである。

七

或は子供らしさに對する批判もしくは反省と謂つてよいかも知れない。是は往々にして亂雜に墮し易く、又その爲に素直な清いものを、何の計算も無しに滅ぼしてしまふ歎きがあるが、それを防がうとするには片方にも用意がなければならぬ。器も色どりも昔のまゝで、何の考へも無しに永く保存させようといふことは、日本人のやうな鋭敏な民族には殊に無理だつたかと思ふ。少なくともどうしてあゝいふものが久しく傳はり、又は突如として變形するかといふ事情だけは、知つて居なければよい思案は出ない。しかも常人に對する上層の同情は、今のやうな世になつてもなほ乏しいのである。私は特に彼等の中から新たに卓越して、外國ばかりを見て居る秀才を戒めたいと思つて居る。諸君の優れて居ることはもう判つて居る。しかし此次には諸君自ら、まだ優れなかつた昔を知らなければならぬ。それは必ずしも彼等だけの、幸福の爲では無いのであると。

話が思はず理に落ちたが、まだ少しばかり夕顔の無意識傳承について、話さねばならぬことが殘つて居る。この植物の文獻にあらはれたことは古いが、山野の自生が絶無なのを見ると、もとはやはり輸入であり、その分は「ひさご」の用法が之を誘致したものだらうから、花に我々の祖先が心を引かれたのは、第二次の經驗であらうと思ふ。朝顔晝顔の二つの花と合せて、名を附けた昔の人の心持が考へられ、或は萬葉集の「かほ花」といふのも、斯ういふ一輪咲きのちつと見つめられる花を、人の顔になぞらへたのがもとかとも推測して居る。さう

いふ中でも夕顔は折からがあはれだつたのみで無く、後に結ばれる實にも數々の神秘があつた。第一に形が珍らしく且つ大きく、中がうつろで水に浮ぶことが、始めて見る者を驚かすに足りたであらう。それ故か今日の所謂共榮圏内では、どの島でも内陸でも之を尊重し、たゞに器物として普く利用するのみか、之に關した呪法俗信、又さま〴〵の言ひ傳へが多く、昔話の中にも毎度出て來る。日本に數ある「うつぼ舟」の口碑なども、本來は特殊に大きな「ひさご」であつたらうことは、朝鮮の古傳の瓠公の例からでも察せられる。それから又一つは藝州の羽衣譚に、天女が二子をつれて天に還つて、男が獨り泣き悲しんで居ると、こゝでも恩を知る動物として鹿が白髪の翁となつて現はれ、今度は此川の水を汲みに、天から黄金の擔ひ桶が下つて來るから、それに入つて天へ登つて行けと敎へてくれる（安藝國昔話集）。それと殆と同一の話は朝鮮にもあるが、たゞこの水桶だけが、大きな水汲瓢として語られて居るのである（朝鮮民譚集）。さうして見ると夕顔は絲瓜や南瓜とちがつて、花になる前からも う既に、天に下界の人を運んで行く力と認められたのであつた。それが又この白々とした黄昏の花を、無限に懷かしいものにして居るのかと思ふ。

八

我々が不思議に思つて居るのは、北と南との懸け離れた一致であつて、西國だけならばまだ何とか説明は付かうが、奥羽の果までも折々は同じ話が入り込んで居る、たとへば人間の若者が天上へ聟入すると、色々の難事業を課せられてしまひには追出されるといふ點は、羽衣説話の普通の結末であるが、其悲劇の中心には妙に甜瓜を食べたことが説かれて居る。犬飼七夕と私などの呼ぶ話、即ち一年に一度しか逢瀬の無いといふ理由に、瓜を横に切らずに縱に切つたのが惡かつたと説明して居るのは、九州各地のものが最も詳しく、それに近い話が又信州にも東北にもある。たとへば秋田縣の平鹿郡の一例に、水屋尻の夕顔の蔓に匐ひ登つて行けば、好い嫁がもらへるといふ夢の告げを得た若者の話がある。大きな親方の家にきれいな娘が三人、それがこの男の命ぜられた三つの困難な仕事を、そつと來てそれ〴〵に助けてくれるが、結局作つて番をして居た甜瓜を一つ食べたばかりに、ふわりと體が浮いて下

界に落ちて來るのである（昔話研究二ノ一〇）。斯ういふ取留めも無い失敗譚を笑つた人々が、夕顔ではまだ可笑味が足らぬので、絲瓜にも南瓜にも取替へたのであらうが、本來は瓢でないと縱に切つてはならぬといふ戒めが意味をなさぬやうである。横に切れば浮寶になり、空を渡る船の代りともなり得るものは、夕顔といふ大きな瓜の外には無い。それが氣づかれなくなつて、瓜の種類は次々に變化して來たやうだが、本來はこの天上の瓜作り挿話も、人を空の國に運んだ夕顔の花咲く蔓の、末に結んだ大きな實であつたかも知れぬ。昔話はまことに不思議なもので、是だけは日本の國產であらうと思つて居ると、それが支那にもあり南海の小島に在り、或は北方の草原にゆくりなく見つかることもあつて、しかもこの聯絡系統は、まだ少しでも明かになつて居ないのである。だから將來の採集によつて、この假定說は覆へるかも知れぬが、少なくとも今は私は斯う信じて居る。瓠の海に浮び遠く漂ひ得る如く是が天上にも行き通ふ手段のやうに考へて居た者が、最初に「豆の木」の空の梯子を、横に匐ふ夕顔の蔓に置きかへた。それは或は大陸のどこかの海のほとりだつたかも知れない。是が日本人にも久しく信じられて居るうちに、彼等の幻しはこの瓜の花を見つめて居ることによつて、段々と美しくなり、それがこの蔓の如く伸び〳〵て、終には絲瓜とも南瓜とも、言ひかへて大いに笑ふやうになつたのであらうと。

九

もういゝ位にして止めたらどうかと言はれさうだが、又といつても折が無いから、今一つだけ附け加へて置く。岩手縣の紫波郡昔話には、夕顔長者といふ話が出て居る。是だけは羽衣とは關係が無く、昔二人の兄弟の兄は富みて吝嗇、弟は人柄がよくて貧困なのがあつた。粒種を借りに來たのに種を悉く熱湯を通して貸したので、苗代には苗が一つも生えず、たゞその田から夕顔が一本だけ、際限も無く伸びて多くの實がなつた。その大きなのを庖丁で切らうとしたが切れない。まさかりで割つて見ると白米が一ぱい。次々の瓠も皆其通りで、忽ち夕顔の長者となつたといふのは、宇治拾遺などの腰折雀と片端は似て居る。つまりこの大きな丸い瓜を切つて種のこぼれ出るのを見た者の、是が米だつたらといふ空想が培養した話

だつたのである。兄弟の善惡對立、最後の瀬戸際まで行つて忽然として大福長者になる話は、近くは氣仙郡の百疋塚、遠くは三河の犬頭蠶のやうな例もあつて、最も由緒のある話術であつたが、それが夕顔と結びついたのは、是一つしか今はまだ知られて居ないから少し心もとない。

ところが一方西海の豐岐島昔話集には、遠く離れてこの程度に似通うた話がある。昔隣同士、一方は極度に貧しく、他の一方の金持に粟の種を借りに行くと、心の良くない者で其種を炒つてから貸した。少しも生えないので不審に思つて居ると、その八斗八升蒔きの大きな畠のまん中に、たつた一本の南瓜が芽を出し、やがて成長してたつた一つだけ南瓜がなつた。さうして其中から笛太鼓三味線の賑やかな音が聽える。取つて還り家に置くと、毎日遠方から多くの人が其囃子を聽きに來て御賽錢を置いて行くので、急に貧乏人が金持になる。それを羨んで隣の惡い金持が、無理に借りて行つたが何の音もしない。それを腹立てゝ庭に投げ付けると、南瓜は割れて其中から、ちやうど貸しただけの粟種の炒つたのが出て來たといふことになつて居る。南瓜の中の音樂は異樣だが、是も世界に行き渡つて居る「歌ひ骸骨」心の清い者だけが骸骨に助けられて、歌を聽かせて財寶を獲たといふ一系統の昔話を、瓢の米の奇蹟にさし替へたもので、惡い隣人は眞似をしても無益だつたといふことの、根本の趣旨まで一貫して居る。これが双方の話の面白さを、十分體驗した人の作爲であつたか、はた又自分にもさう記憶して心づかずに改めてしまつたかは、未來が決すべき大きな問題であるが、少なくとも曾て祖先の深く心を動かしたものだけは、いつかは機會があつて思はずに胸に浮び、又はさういふ形に近い物語に觸れると、比例を超えた痛切なる感銘を受ける。或は何か其部面の神經細胞が、千百年の遺傳を重ね〳〵て、やがては發見せらるべき變質をして居るのかも知れない。とにもかくにも國民文學の未來を說かうとするやうな人が、思ひをこの無意識傳承に致さぬのは間違つて居る。

（文藝世紀、昭和十六年四月六月）

俵藥師

斯ういふ昔話を、どこかで諸君は聽かれたことはないか。横着で惡智慧のある下男が、何度でも旦那をだまくらかしてひどい目に遭はせる。もう何としても宥して置けないとなつて男を俵にぶち込んで大川へ流しに遣る。橋の袂まで來るとおい〳〵と泣き出して、こんなことならあの匿してある金を使つてしまへばよかつたと言ふ。それを擔いで來た二人の百姓が聽いて、どこにある〳〵と尋ね、俵をそこに轉がしたまゝ、それを見つけに還つて行く。其處へ馬に魚を負はせて魚商人が一人やつて來る。俵の中では惡い下男が頻りに「俵藥師、目の養生」とくりかへし唱へてゐると、ちやうど其魚賣が目の悪い人間だつたので、どうしたことかと近よつて來てわけをきく。これは目腐れのすぐに治るまじなひだ。わしも御陰であら

方よくなつた。そんなら暫くの間代つて私を入れてくれと賴んで、魚屋は俵に入り俵の口を括つてもらひ、下男はさつさと馬を牽いて、別の路から歸つて來る。そこへ二人の百姓が、又うそをこきやがつたと、ぷん〳〵と怒つて戻つて來て、有無を言はさず俵を川へ投げ込んでしまふ。旦那の家の大戸さきへは、川へ流した筈の惡下男が、ぢやらん〳〵と馬の鈴を鳴らして、威勢よく乘り込んで來る。御蔭で龍宮さんからこんな馬と、さかなを一荷貰つて來ました。あそこにはまだ何ぼでも魚も馬もありますといふと、人のい〻旦那は又うつかり騙されて、さうかそんならおれも一つと、同じやうにして川へ入れてもらつたと謂つて、それから後にまだ少し話が續いてゐる。

日本でこの話の存在が既に知られてゐるのは、秋田縣に一つと岩手縣に二つ、關東では栃木縣によほど壞れたものが一つあり、信州では二つの採集がある。近畿中國四國の中では備後にたつた一つ、九州は福岡大分熊本の三縣に一つづ〻、それから飛び離れて南島の奄美大島に又一つある。外國の類例と最も接近してゐるのはこの大島にある形で、他の地方の昔話では嘘の名人は、何れも下男となつて居るに反し、是だけは所謂二人椋助、即ち愚兄賢弟もしくは富兄貧弟の話を發端にして居るのである。どれだけまでの一致が東西民族の間にあるかといふには、すべてを並べて見るに越したことは無いのだが、そんな退屈なことは到底出來ない。日本だけでも既に少なくとも十一はある。クラウストンの民間說話考に擧げてあるのは、愛蘭のLittle Fairlyを始めにして、英佛獨から諾威に希臘、阿弗利加北岸のアルゼリヤにもあり、それも國によつては何箇處からも發見せられて居て、結局は印度の記錄にあるものが最も古いといふことになつてゐる。つまり昔話は機會が有る毎に、天涯萬里の果までも運搬せられて居るが、其割にはさうひどく原の形を損じては居ないといふことが是でよくわかる。自分などはこの東西の一致に驚歎するよりも、寧ろ多くの類話の比較によつて、個々の民族の改造技能が、少しでも現はれて居る點に興味を惹かれる位のものである。

俵藥師は恐らく日本で始まつた趣向であらう。上總の東海岸などでは、昔俵に藥師如來の木像を入れたものが、漂着したといふ口碑もあつて、何かこの佛にはそんな信仰なり緣起なりが附いて居たらしく、しかも我邦では主として眼病の願掛けをして居る。俵といふものも稻の國だから話になるので、西洋の各地では大きな袋に入れてといひ、又は樽につめて流さ

うとしたとも謂ひ、印度の舊話には三つある二つまでが、手足を繩で結はへて轉がしたことにもなつて居る。しかし袋の中から騙したといふので無くては、實は此話はさう面白くはないのである。

目病みの魚屋が通りかゝつたといふのは、少しく偶然を濫用した嫌ひはあるが、日本の話では大抵が皆さうなつて居る。東北の方では「目くされまなぐの御用心〳〵」と唱へて居たといひ、九州の方でも、福間の又兵衛は目の養生〳〵と謂つて、目たゞれの魚賣を引掛けたことになつて居る。日本で斯ういふおどけ話をする者が、しば〳〵座頭であつたことを考へると、此點も或は國產でなかつたかと思ふが、既に朝鮮にも目が治ると謂つて騙した話があるといふことだから、是はまだ何とも斷言が出來ない。たゞ少なくとも俵藁師を引合ひに出しただけは、我々の先祖の輕妙な思ひつきであつたらうと思ふ。歐羅巴の話はグリムを始めとして、どれもこれも滑稽が少し重くるしく、大きな聲で「大僧正になるのは御免だ」と謂つたり、「誰が殿樣の娘などを嫁にするものか」など〳〵どなつて居る。さうすると通行の牛方とか羊商とかゞ、立寄つて來て話を聽いて騙され、そんならわしが代つて其袋に入り、僧正にならうとか、姫の聟君にならうとかいふのである。或は極樂の近路と謂つて、富裕の農民を誘うて樽に入らせたとも、智慧の袋だと稱して旅の書生を欺いたといふのもあるが、どれ一つでも其まゝ日本へ受賣したら、ちやうど又今日の飜譯御伽のやうな氣の拔けたものになつたことであらう。それをトラホームか何かのよく有りさうな旅商人にしたことは、誰の細工か知らぬが氣の利いた思ひつきであつた。

それから今一つ、大陸の話は殆とどれも是も、家畜を牽いて通る旅人が騙されることになつて居るが、是は昔の人が長者になる普通の段階であつたといふまでゝ、水の底から戻つて來たといふ話とは、何分にも調和しさうもない。この點を我々の話術者が採用しなかつたのも思慮があると思ふ。グリムの話集などでは、空の白い雲がむく〳〵と水に映じてゐるのを指して、あれあの通りまだ澤山の羊が居ると、最後の嘘をついたといふのは面白く、或は又水に投込まれて死んだこと〳〵思はれてゐる男が、太つた豚の群を追うてのこ〳〵と村に歸つて來る光景も繪にはなるが、日本ではとにかくさういふ空想は成立たなかつた。それ故に是をそつくりと、こちらは村で歡迎せられる魚屋に取替へてしまつたのである。魚を龍宮から

貰つて來るといふ話は、勿論クラウストンの列擧した中には一つも無いが、神代卷以來親しみのある挿話を、爰で應用したといふことはたしかに昔話の骨法を得て居る。日本が此昔話の本家だと言はなくても、是までに安らかに又面白く改良した技能、もしくはそれを承認して他のものを排除した鑑別力は、我等の祖先をさしおいて何人のものでも無いのである。

東西の説話を比べて見てもう一つ氣づくことは、この嘘つきの名人が俳に入れて棄てられるまでの段取りが、日本に行はれて居るものは特別に短い。通例我邦の昔話に共通して居るのは、山へ働きに遣られて癡轉んで日を暮しながら、鷹の巣を見つけましたと謂つて主人を喜ばせる。生米を嚙んで居たのを樹の下に吐きかけ、又は衣類の肩袖に少し附けて、この通り鷹の糞が落ちるなどゝ謂ふ。是は外國の類例中にはまだ一つも見當つては居ない。向ふで最もよく知られて居る挿話は二つ、一つは一匹の瘦牛の皮を賣りに出て、思はぬ幸運によつて大金を得て還る。それを其牛の皮の價だと謂つて騙したので、仲間が又は金持の兄が、有るだけの牛を殺して皮を賣りに出かけ、少しも賣れないので怒つて歸つて來て袋に入れるのである。それから今一つの點はグリムなどにもあるやうに、瘦牛の皮を携へて一夜の宿を借りた家で、女房が夫の留守に悪いことをする。それを隙見して居て亭主が戻つて來てから、其皮を使つて占なひをすると稱して、一々の隠し事をすつぱ抜くのである。相手は感心して皮を高價で買取り、もしくはその隠し男が助けを乞うて澤山の御禮をするといふので、聽いて大笑ひをするやうなをかしい出來ごとが、もうこの前段の中にも幾つか盛り込んであるのである。日本人が斯ういふ話もよく知つて居たことは證據がある。たとへば第二の挿話は鼻利きの何某とか、見透しの六平とかいふ題名で、やはり女戻の隠し事を片端から暴露するといふのが各地にある。第一のたつた一匹の瘦牛といふ話も、極東の諸國に古くあつたのみならず、我邦でも陸前氣仙の百匹塚などゝ稱して、兄は九十九匹のよい馬を持つて居てしまひに貧乏し、弟はその一疋の瘦せたのを元にして忽ち長者になるやうな話もあれば、或は金ひり馬だと僞つて愚かな兄へ賣付けるといふ形になつたのもある。もとはそれ〴〵が別の笑話であつたのを、後にあちらでは繋ぎ合せて長話にしたのか、或は夙くから膝栗毛などのやうに、次から次へ笑ふ話を並べて居たのを、日本の方では切りほどして數多い短篇を作つたものか、どちらが早いといふことはちよつと決しかねるが、何れにしても我々の中の話好き

は、笑話はさうだら〳〵と引伸すものでないことを知り、又は少なくともさういふものを珍重しなかつたのである。從つて次の笑ひの來るまでの退屈といふやうなものを、經驗しないですんだ代りに、日本の笑ひはいつもあまりに無造作な一口話、もしくはそれを更に切詰めた秀句見たやうなものになつてしまつて、組織のある滑稽文學は成長する機會が無く、其爲に一生樂しい笑ひといふものを味ふことが出來ぬ人を多くし、たま〳〵笑はうと思へば馬鹿を友だちにしなければならぬやうな、それこそ笑へない世の中をこしらへてしまつたのである。是が國柄であるか、はた又歷史の偶然であつたかは、私にはまだ何れとも言へないが、ともかくもたつた一つの昔話の消長からでも、國と國との歩む道が異ならねばならぬ、うら悲しい法則が見出されさうな氣がする。

（博浪沙、昭和十四年四月）

峠の魚

一

私の「日本の昔話」に、土佐の黑鯛大明神の由來として採錄して置いた一話は、そちこちで我土地だけの奇談と信じて傳へて居る。白石實三君の書いたもので始めて知つたが、私の今暮る多摩川の邊の村でも、是を昔の名代官田中丘隅の逸事のやうに謂つて居るさうだ。但し話は魚商人とした方が自然に聽えるのである。

昔々ある一人の魚賣が、山路をあるいて居ると、路傍に獵師の掛けて置いた罠に、山鳥が一羽引かゝつてばた〳〵騷いで居る。あたりに誰も居らぬからそれを取つたが、只持つて歸るのも氣が咎めるので、代りに其わなに黑鯛を一尾く〳〵り附けて來た。村の人たちは後でそれを見つけて、斯樣な深山に黑鯛が飛んで來て、罠にかゝるといふは只事で無い。是は何で

も有難い御示しに相違ないと言つて、早速其場所に祠を建て黒鯛を祀つて、黒鯛大明神と唱へて拜んだところ、如何なる祈願も成就せずといふことなく、信心の徒が踵を接して參詣して來る。そこへ以前の魚商人、偶然に再び通り合せ、びつくり仰天して白狀をしたといふのが土佐の話だが、他の地方でいふのは少しづゝ說明がちがつて居る。田中代官などは、その鰹を引出して刺身にして一杯飲んだとかいふのだが、是はやゝ日數が經つて居て感心しなかつたことであらう。

支那の所謂小說にも鮑魚神といふのがあつて、顚末は是と大分近い。さうして其方がずつと前から有名だつたらしいから、二國別々に同じ事件が、幾度も起つたものと見ることは困難である。さうすると誰が斯んな話を知つて居て、知らぬ顏をして諸國の山路の傍に、そつと殘して行つてしまつたかも問題になるが、更に不思議なことは土地の人たちが、いつの間にか是をそれ〴〵の場所に、曾てあつた出來事と信じ、假に他の府縣にも同じ話が有るといふと、きつと爰から持つて行つたのだらうなどゝ、互ひに言ひ下す位に自分のものを大切にして居ることである。幾ら面白い口碑であらうとも、よそにも在ると知つてから眞似る者は先づ無からう。

是には第一に我々の世間を知らなかつたこと、其次にはさういふ風に話す人があつても、それを作り話だとは氣がつかぬだけの、素朴な下地が以前から出來て居たものと見なければならぬ。私たちは寧ろ其點に興味を抱いて居るのである。

六七年以前、盛岡から海岸の宮古鍬ケ崎へ越える大きな峠の路で、縣の役人の久米君から斯んな話を聽いた。

昔、と言つてもさう古いことでは無いらしい。此峠の頂上に在る平たい大きな石の上に、鯖が三尾ちやんと載せてあつたことがある。それを不思議に思つて色々と詮議して見ると、やがて其魚を置いて行つた主が判つた。正直で親孝行な若い農夫で、時々遠路をして濱へ出て魚を買ひ、持つて歸つて親たちに食べさせて居た。或時この峠にかゝると急にもやがかゝつて、山路が眞暗になつて前へも後へも踏出すことが出來ない。それで携へて居た鮮魚を此石の上に三つ並べて、熱心に拜んで居たら、忽ち天地が明るくなつた。それを通りかゝつて見た人が、有るとか無いとかいふ樣な話であつた。

私は之を聽いて非常に心を動かし、どうして又魚をこゝに置いて拜む氣持になつたでせうと、根ほり葉ほり尋ねて見ようとしたが、今はもう自動車がぶう〜〜走つて通るやうな時代だから、是以上の事は皆目知つて居る人が無かつた。もし私が記憶して居ないとこれだけの話でも、つかまへ所が無いから大抵の者は忘れてしまつたらう。とにかく三陸の境の峠には稀には魚を置いて通る習はしがまだ殘つて居たので、祭をしたのは却つて當の本人であり、後々之を發見した人たちでは無かつたのである。他にもやゝ似た記憶がもし片端でも傳はつて居たならば、是はたしかに考へて見るねうちがあると思ふ。

我々の子供が悅んで聽く諸國の昔話の中に、假に私などの牛方山姥と名づけて居る、一つの化物退治譚がある。

昔々ある一人の牛方が、牛に鹽鯖を積んで山路を越えて來ると、怖ろしい老婆が現はれて其鯖を一尾くれと言ふ。くれなければ手前を取つて食ふぞといふので、仕方無しに一つだけ拔いて後に投げ、すた〜〜と牛を牽いて逃げて來る。聽手が五つ六つの幼ない子供であると、此鹽鯖を一尾くれといふ問答を、先づさつと一駄の魚の數だけ繰返して聽かせる。

つまり山路の段が非常に長いのだが、我々が聽く場合には二度ほどで後を省略して話すことになつて居る。其鹽鯖を殘らず食つてしまふと、今度は牛を食はせろといふので、片足づつ遣つて逃げて來る。それでも怖ろしさはもう終局にならないで、此次に牛方おまへを食ふと言つて追掛ける。

それから後の話が、土地によつて二通りちがつて居る。一方は菅苅りや臼切りや船はぎに助けられ、湖水の岸にある松の樹に上つて匿れ、鬼婆が其影を見そこなつて水の中へ飛込んで自滅する話。今一つは途中で婆の住む一軒屋に逃げこんで、天井裏に隱れて居て、餅を刺し取つたり甘酒を吸ひ取つたり、猿蟹合戰以上の可笑味があつて、最後に其山姥を退治する痛快な復讐譚になつて居る。

前段の壓迫が忍び難かつただけに、後の方の話が兒童には悅び聽かれる。何れにしても今ではたわいも無い童話になつて居るのだが、峠と魚との奇妙なる因緣は、こゝでもなほ若干の原の姿を窺はしめるのである。

此昔話も南北に分布して居る。中國九州では牛の代りに馬であつたり、又その鹽鯖を大根

とし、もしくは鹽俵だと言つて居るものもあるが、鹽俵はとにかく、大根では遠く運ばれる理由が無い。

童話が斯ういふ風に變つて行つたもとは、牛方を普通の駄賃附けと考へ出した爲かと思ふ。是が本來は立派な旅商人であつたことを、此頃の子供はもう知らずに居るのである。以前も牛方は壯年の農夫であつたけれども、自分で牛を持ち又商品を仕入れて、それを運んで遠くまで賣りあるいたのである。他人の中へ入れば話をすることが近づきになり易い。話をする位ならば自分の仲間を主人公にして、怖ろしい目にも遭へば手柄もしたといふやうな話を、成るべく多くしたことゝ思ふ。即ち牛方山姥は牛方のよくする昔話で、何れ改作も彼等の所爲であらうが、話の種も亦この仲間の、持傳へて居たものであつた。

彼等隊商の通路は、海岸線と直角に、少しでも早く魚や鹽の乏しい土地へ行く爲に、屢〻峠路を越えなければならなかつた。さうして我邦では海の物を嗜み食した人々が、次第に山奥を開いて居るのだから、何は置いても魚や鹽の交易は、早くから始まつて居た筈である。鹽賣の旅にも路の傍の清い石の上に、鹽を供へて神祭をしたといふ故跡が多く遺つて居る。

山に入るに山の神を祭るといふことは、木を樵る者でも畑を燒く者でも、乃至は鳥獸を狩する者でも、すべて眼に見えぬ昔からの關門である。

「黑鯛大明神」が鳥民の雉山鳥と引換へに、魚を置かずには行かれなかつたと言つて居るのも、やはりこの古風な關稅制度の名殘を、近世の心持で解釋しようとしたもので、たとへど れ位面白い話が支那の書物に有らうとも、何も無い土地へは勝手には土着することは出來なかつたらう。

それと同樣に、牛方山姥の昔話なども、やはり魚賣が昔から往來した峠と、そこに殘された幽かな昔の世の記憶とが、代々の聽衆の想像力を支持して居たものと思はれる。

旅の魚商人は、鹽物乾物をかついで、今でも驚くやうな山間まで入込んで居る。さうして永年の得意の心を捉へる爲に、成るべく悅ぶやうな且つ手輕な品物を、兼て用意をして行く習はしが有るやうである。

その一つの例として、夙くから自分たちの注意して居るのは、ヲコゼを山の神に上げる風習であつた。宮崎縣の椎葉の山村で、獵師が海ヲコゼを大切にするといふ話を聽いてから、

折々人に話をして見ると、私の郷里でもさうだといふ地方が、今日では既に北端の秋田津軽にも及んで居る。東京の近くでは、秩父郡の奥、妙義榛名の周囲の村などでも、たしか越後あたりの旅商人が、時々みやげに持つて來るといふ話を聽いた。

食べる所も無いやうな刺だらけな小魚の、見たところ怖しい顏をしたものだが、是を山神ヲコゼとも只ヤマノカミとも言つて、山神が事の外是を愛したまひ、獻上を約束すれば狩の運は思ふまゝであり、又は木樵が斧や鉈を紛失した場合でも、之をさし上げるとすぐに見つかる。たゞ是を持參するにはよつぽど氣をつけぬと、うつかり手に持つて居ると手ごと拔いて持つて行かれることがある。それほど迄山神はヲコゼに眼が無いのだといひ、或は何十枚もの紙に包んで、一度に其紙を一枚づゝ解いて、永い御樂しみにして居る土地さへある。

山の人が珍重して居るのも、やはり山神が是を悅ばれるからで、其風習は既に室町期からあつたことは、多くの文獻によつて南方熊楠氏も證明せられて居るが、數多い海の魚のうちで、特に怖しい顏をしたあの小魚だけが、是ほどまで山の中で重ぜられ、殆と通貨と同じやうな役割をして居るわけは、私にはまだ考へ出せない。

一つの注意すべき點は、少しばかり形の似て居るカナガシラといふ魚などにも、やはりミヨ魚だの君魚だのといふ異名があつて、神祭には折々用ゐられて居ることである。

ヲコゼの刺の多いことが或は一つの要件でなかつたかと思ふ。中部地方でヲコゼといふ動物は、魚では無くて梅毛蟲などゝいふ、最もひどく刺す一種の毛蟲のことであり、又一般に毛の多い蟲をもさういふ土地があるが、どうしてさう呼ぶかは今のところまだ明かでない。

山の人々が海ヲコゼをほしがるに對して、海邊の人たちは山ヲコゼを重んずるといふことも聽いたが、その山ヲコゼは毛蟲のことでは無かつた。土佐で山ヲコゼといふのはキセル貝の一種だともいふ。但し海の幸を求むる人々に、果してそのキセル貝が尊重せられて居るかどうか。其點はまだ確かめられては居らぬのである。「河と海」の讀者諸君は、多分是からはさういふ話を聽かれる場合が多いであらう。峠と魚との雜談はまだ大いに成長することゝ思つて居る。

（河と海、昭和九年五月）

鯖大師

昔話の「牛方山姥」では、鹽鯖を牛の背につけて峠を越す男が、山姥に出逢つたといふ話が特に多いやうである。後々其鯖を鹽とも大根ともさし替へて話すことになつて、感じの出なくなつたのは兎も角も、何か大切な一つの古いものが脱落した。それを私は「黑鯛大明神」の話の研究によつて、取戻して見たいと念じて居るのである。四國八十八箇所巡りの路筋、阿波から土佐へ越えようとする八阪八濱の中ほどに、遍路さんなら皆知つて居る鯖大師といふ傳說が横たはつて居て、弘法大師であつてもよさゝうなものだが、爰だけは奇妙に行基堂となつて居るのである。『阿波名所圖會』にも出て居る筈だが、今手元にないので、『雲錦隨筆』を引用すると、

昔この邊りを、或男が馬に鹽鯖の荷を負はせて通る時に、旅僧が近よつてその鯖を一ぴきくれよと謂つた。馬方は承引せぬのみか惡口をして行かうとしたところが、その僧が一首の歌を詠んだ。

大阪や八阪阪中鯖一つ、行基にくれで馬の鹽病む

さうすると忽ちその馬が煩ひついて一足もあるかなくなる。是は尊い御僧だと驚き心づいて鯖主、いそいで行かうとする旅僧の衣の袖を捉へて、くれ〳〵も無禮を詫び且つ鯖を献じたので、僧は取敢へず、四句目の「くれで」の濁音符を取り、腹病むを「腹止む」とも解せられるやうにしてくれたので、即座に馬の病が平癒したといひ傳へて居る。その繪姿が今でも信心者に分配せられて居て、此書に載せた挿繪も其寫しらしい。莫蓙を背に括つて草鞋をはいた和尚が、左の手には珠數、右の手には高く尾を以てぶらさげた鯖が、何だか初鰹と似て居るのも興味がある。

法師が魚の無心をするといふことは、不似合な話だが昔も例が多かつた。殊に行基菩薩には摂津の昆陽池、又は泉州の家原寺などに、有名な言ひ傳へがあつて、現に其池の魚は片眼であり、又は片身が焦げたまゝで、今でも活きて居るのがよい證據だなど〻言ふ者さへある。弘法大師にも同じ奇蹟は折々あつたのだが、流石にその信仰の中心地では、是はや〻有難迷惑であつたものか、爰ばかりは之を本職の行基に委ねたまゝになつて居る。

斯ういふ珍らしい傳說が旅人の知る所となつて、それ〴〵の故郷に傳へられ、又何かの拍子に他の場處に移るのは不思議でないが、九州地方ではそれが一つの信仰になり、しかも其名を鯖大師と謂つて居るのは、少しばかり考へさせられる。福岡縣遠賀郡の漁村をあるくと、時折路傍の石佛に鯖大師といふのがあつて、其像には手に鯖を下げた僧形が彫られて居るのみか、あの阿波國の八阪阪中の歌の文句が、若干の轉訛をもつて傳承せられ居るといふことであり、櫻田勝德君の實見した一つなどは、昭和五年何月女連中云々の文字を刻してあつたといふ。漁村だから多分馬は飼はなかつたらう。たゞ腹痛のときは鯖をこの石體に上げて轉ると驗があるといひ、又漁の願ひ事をもすると謂つて居る。

この變遷はどういふ風に說明すべきものであらうか。無論一つの原因としては、この四國の奇蹟談が、先づ西國方面の馬を飼ふ農家に行はれ、此歌が何處へ行つても馬の腹病を治す

力をもつやうに考へ、且つ利用する者が多くなつた結果、馬に利くほどならば、人は尙さら自分で信心するのだからもつと早い御利益があらうと、類推したものとも考へられる。現に其證據には宮崎縣の北部にも、腹痛の時のまじなひに、文句は少しこわれて居るがこの歌を唱へるさうであり(日向鄕土資料六號)、そこから西北に山を越えて、熊本縣の阿蘇谷に入ると、古城村の北阪梨の邊りでは、馬が虫がせく(腹が痛む)ときのまじなひとして、

大阪の八阪の阪の阪中で
虛無僧に逢うて
鯖三匹もろうて
此虫はやせきやませ

といふ文句を唱へて、笹の葉で馬の腹を撫でてから、その笹の葉を馬に食はせるといふ風習がある(旅と傳說九卷五號)。しかしまだ是だけでは、路の辻に鯖大師の石像を安置して、祈願に鯖の魚を供へるまでの理由にはならぬ樣な氣がする。

それよりも元に溯つて、全體何人がこの樣な歌を作つて流布させたかといふことが問題になる。すぐに氣のつく點はたつた一文字の變更によつて、歌が全く反對の意味になるといふ趣向が、かの關寺小町の「見し玉だれの內やゆかしき」を、「內ぞゆかしき」にかへたといふ話と同じいことで、作者は一人で無いまでも、一つの仲間の智惠だつたといふことが考へられ、しかもさう古い世の文藝で無いことも明かである。ところが『旅と傳說』の一〇卷九號に、天文年間に成つたといふ馬書の『勝藥集』なるものに、馬の腹病のまじなひとして、この歌を利用したものがあることを報告した人がある。

一、馬の耳に口あて、歌に曰く

大阪屋八阪阪中鯖一つ、きやうきにくれて駒ぞ腹やむ

と七返よみ、「我手にてはなきぞ、おうたせんの御手なり」とて背を撫でべし。

とあるさうで、鯖が鯖にかはつて居るのも面白いが、更に「おうたせんの御手」といふのが、今は不明だけれども又新たな手掛りを提供する。次には栃木縣の安蘇郡に於て、近年倉田一郎君が採集して來た一例、是は競馬に勝つ爲に走り馬(相手の?)をとめる呪文とあつて、歌は又大分こわれて不可解のものになつて居る。

大阪の八阪の阪に阪一つ、さそふにつれて駒ぞやむ

アビラオンケンソハカを三度唱へるのだといふ。察するところ既に歌に伴なふ物語は忘却せられて、其文句の神秘ばかりが、や〳〵過度に信ぜられて居た時代が、土地によつては四百年も前から始まつて居たので、しかも雲錦隨筆に載せたやうな奇蹟譚が、阿波の南海岸では無いまでも、何處かに行はれて居なかつたら、恐らく歌だけが裸で學び取られるわけは無いから、其以前にもう斯ういふあまり巧妙でも無い歌物語を、そちこち持つてあるく者が日本には居たのである。

我々の改めて考へて見たいのは、單に阿波の八阪の古傳説が、うそか本當かといふやうな小さな問題では無い。是が南海の濱に漂着して、どうして根を生やしたかといふことも、國内交通史の資料としては有用かもしれぬが、それよりも意味が深さうなのは、山路と鯖と旅の宗教家との縁の遠い三つを、始めて結び合せたのは何人の思ひ付きであらうかといふ點で、それには人間の財政制度に、關税があり又は入市税があつた如く、靈界にも亦一種の運上信仰とも名づくべきものがあつて、鯖が何等かの理由で特に重んぜられたらしいことが想像せられる。山鳥の掛員に飽魚を挿んだといふ話は支那からの輸入だが、是が日本人の感じにも不自然には聽えず、安々と土着し得るだけの素地が此方にもあつたのでは無いか。「牛方山姥」の如き全く別な昔話の流布が、さういふ想像を私に許すのである。肥前長崎邊の鯖腐れ石の傳説は、既に司馬江漢の西遊日記にも見えて居る。佐賀縣東松浦郡北波多村の弦掛岩の辻にも、現在同じ名の岩があつて、やはり魚商人がこの危ない大岩の下を通り兼ね、ぐづ〳〵して居るうちに其鯖を腐らせてしまふからと謂つて居るさうである。鯖は腐りやすい魚となつて居るので、面白半分にもそんな名を付けたとも見られるが、是がもしなほ他の多くの峠越えにもあり、しかも其あたりにはちやうど鯖を載せて置くやうな、平たい別の石でもあつたとすると、私は陸中宮古街道の二十年前の妙な經驗を、思ひ合せずには居られないのである。それで讀者の注意によつて、新たなる資料の報告せられるのを待つ間、や〳〵冒險ながら一つの假定説を出して、學問の運をためして見ようと思ふ。

私の大膽な當て推量といふのは次の如くである。曰く、海岸の住民が魚を捕つて、之を内陸の農産物と交易に行くのには、昔は境の神を祭り魚を供へる風があつた。その場所は大抵

道の辻森の下、その他或特別な感じを起すやうな隘路などで、そこには魚を載せる爲の石が置かれ、それが又靈地の目標ともなつて、次々變化して行く傳說を支持して居たのであらう。「馬の腹やむ」のまじなひ歌などは、それ一つ獨立してゞも記憶せられ、又は利用せられたかも知らぬが、もしも其土地に鯖を路の神へ上げる信仰、又は其破片が少しでも殘つて居る場合だつたら、印象は確かに何層倍で、從つて鯖を手に下げた石の大師像を、新たに建立する位のことは何でも無かつたらう。福岡縣遠賀郡の各漁村は言ふに及ばず、事によると今日本家本元のやうに見られて居る阿波海部郡の八阪八濱などにも、斯んなへぼ歌の暗記せられるよりもずつと前から、山間に交易を求めに行く濱の人たちが、鯖を供へて通る習俗は、夙にあつたのかも知れない。なほその魚が必ず鯖であつたといふ點にも、きつと何等かの隱れたる意味があると思ふが、それは又他の折に考へて見ることにしたい。（昭和十七年六月）

片足脚絆

一

前にも野鳥の會の集まりで、鳥の觀察に詳しい方々の意見を尋ねて見たのだが、何れもさういふ心當りが無いといふことであつた。日本の昔話には、親が子を失なつて傷心のあまりに鳥となり、今でも名を喚んで鳴いてあるくといふ、あはれな前生譚は數多いが、それには又脚絆の片足を脱ぐいとまも無く飛び出したので、それで其鳥の足は一方が白く、他の一方は黑いのだといふ條を添へたものが、是亦二箇所や三箇所の特例ではないのである。果して其樣な兩足の毛色のかはつた鳥が實際居るものか。もしそんなことは無いとすれば、どうして一つの空想が是ほどにも廣く根を張つたのか。何れにしても我々には興味が深い。問題は

勿論さう容易には解決し得られないだらうが、とにかくに手掛りを見つけるために、先づ事實を集めて置かうと思ふ。

最初にこの話に私たちが注意したのは、内田邦彦氏の『南總の俚俗』の中に採錄せられたもので、此書の世に出たのは大正四年、上總長生郡の本納・味庄などゝいふ古い村に行はれて居るといふことであつた。昔くらといふ名の女が幼兒を畔に寢かせて置いて田の草を取つて居るときに、鷲が來て其子を攫み上げて、遠くの空へ飛んで行つた。母は大急ぎで田から出て、股引を半分脱ぎかけたまゝで、其後を追うたが取返すことが出來なかつた。それで我身も鳥になつて、クラッコ、クラッコと鳴きまはつて居る。百舌鳥より少し大きな一種の鳥だと謂つて、爰では郭公とは別な鳥のやうに考へて居る。片足の白いのは股引を片方脱いだからで、それで又一方の足は黑くきたないといふ。此土地の女たちは、田に入る時だけ股引をはくことにしてゐるので、話は斯ういふ風に變つたのである。くらを子を尋ねる親の方の名としたのも、他の地方の言ひ傳へとはちがつて居るが、母一人子一人の淋しい親子が、田植の頃に死んだといふ哀話ならば、奥州では仙臺の小鶴池、九州では薩摩の池田を始めとし、

全國に廣く分布するものであつて、それとこの片足脚絆の由來とが、結び合つて居るのが珍らしいのである。鷲に赤兒をさらはれるといふ話に至つては、今一段と起原が古いかと思はれる。文獻に現はれて居るのは今昔物語、また水鏡の中にも歴史のやうになつて傳へられ、是等は共に都近くの出來事として居るが、現在は關東以北に多く殘つて居る。最も有名なものは東大寺の良辨僧正がその赤子で、年經て母親と對面したと謂ひ、今ある良辨杉の傳說なども是を記念する木であるが、それはたゞ一つの話し方といふに止まり、土地々々の語部は大昔以來、是に少しづゝの潤飾を添へて、しかも最初の深い感動を持傳へようとして居たのである。どうして此樣な單純な一つの驚きが、地をかへ人をかへて永き世に語り繼がれて居たか。東上總のクラッコ鳥の由來は、先づこの根本の問題を我々に提供する。さうしてそれをこの小さな天然の特徵、たとへば鳥の啼聲や羽の色と、結び附けて說くやうになつたのは、果して何人の智慮に基づくかといふ疑ひが、之に次で起つて來ずには居ないのである。